

見八犬傳拾一編
卷十四

特別
N13
4304
12

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

4304
12

曲亭 翁編 次犬傳 第九輯



狗寶 又エヌノ

輯 柳川重信画

南總里見八犬傳第九輯下帙之上附言

郷食庭文庫

有人云在昔里見氏の安房小起りて後上總を略し又下總をも半分討從り有
徳の安房の小國を其發迹地多しとて今も世の人推並て安房の里見といふは
然るを更の這書ふ名に南總里見と便是本と捨て只その末と取るに似る故ある
いふをと詰問れ小予答て云否子今論より後の稱呼に従ふの上れる代の制度考
る安房の素是總國の郡名之説古天富命更求沃壤分阿波齋部率
往東土播殖麻穀好麻所生故謂之總國古語麻謂之總也今為
阿波忌部所居便名安房郡是也古語捨送を古事記並書紀
景行紀の東の淡水門を定めありと直景行五年冬十月天皇上總國到
淡 watermark 水を渡りありと云ふ事ある元正天皇の養老二年五月乙未上總國を
は平群安房朝夷長狹四郡を割り安房國を置ありの聖武天皇の天平十二年十二

八犬傳九輯卷之三

...

月丙戌安房國と元のごく上總國を併せぬかて 考謙天皇の天平寶字元年
 五月乙卯安房國舊依り分立ちし書紀及續紀にその皇より一々後
 安房と上總と二國なる論あり。安房も初に總國に當時里見氏の威徳と史料に土
 人相傳へてその封域といふ者二百二十七萬石を房總志料第五卷安房の附録に是を
 不口々里見九代記に據る里見の領地の義光より義弘傳へ所安房上總並下總
 半國是を加ふ三浦四十餘御あり此彼を合しても七十萬石の尚元ざらぬ土人の口碑に傳
 る所何れも本に於ける欲といふ縦七十萬石の元ざらぬ大諸侯と稱する足れり然れ起
 本の國ともかゝる如く小説に編小の安房と云ふ里見の三字の冠をなすべしとて又房總と
 倡ふる三浦四十餘御あり因て南總と云ふに地廣大の相聞を唯上總の限るあり
 らば這書に載る里見父子の賢明當時のを雙るに南方藩屏第一の大諸侯と云
 くと看官のめりせんとも作者の用意素よりの如く知を僻言するんか。

本傳第九輯の初の腹稿より巻の數いと云くるとり第九十二回より第百三回ま
 るの六巻と九輯の上帙と第百四回より第百十五回までの七巻と中帙の上下と一
 今板第百十六回より第百二十五回までの五巻と下帙の上とを是より下も尚物語
 尋れ亦復十巻と兩箇を釐て下帙の中下帙の下とて明年二度の續出にべし
 八犬士及八犬女の端像 俗に是を 第二輯三輯より再々是を出して今此の送漏を
 としども或は総角の折の姿と寫し或は微賤の折の趣あり。其真面目と云ふは
 足らぬ今又その是を出せり。亦も惟伏姫の生前死後の神體まで曩の端像に
 出まらば茲より省せり。七犬女と重出せり。中濱路沼菡離衣の既小鬼籍の入りこれ
 其の墨色と異ふをて綉像同からばらしむ。又彼神女の賛詞の如く琴籟君子の麗藻
 あり。因て、大と賛を五絶と俱亦亦簡端の餘紙の録し。

天保七年丙申秋九月下澣立冬後の一日

菘笠渙隱識



南總里見八犬傳第九輯下套上摠目錄 九集第三版

卷第 第一百十六回 賢士重知犬士 政木肇詳政木

之四 第十三 第一百十七回 答恩化龍示升天 問津犬童惱風濤

卷第 第一百十八回 兩國河原南客逢北人 千千三畷師弟屠姦媼

十五 第一百十九回 說來路次團太附驥尾 盡餘談親兵衛促扁舟

卷第 第一百二十回 傳命令使臣正征伐 獻一葉窮士償前愆

十六 第一百廿一回 天資神祐劈石門牢戶 大江親兵衛破魔夷賊

卷第 第一百廿二回 讓勲功親兵衛赴法會 後賞祿安房侯温寒御

十七 第一百廿三回 小乘樓一僕謁故主 大庵十僧資法筵

卷第 第一百廿四回 守師命星額齋遺骨 受殘捨癘僧告禍鬼

十八 第一百廿五回 逸正寺德用與二三士謀 退職院未得名詮諫不得

八犬傳第九輯下套上目錄終下套中下二帙陸續刊行



幼稚養村莊義心凌毒事在泥不染
泥市上權入口 贊大川義任

依義失雙寶
逢靈全兩英
誰知仙境
老樹榮

贊音音





大飼信道
Ōkai Shindō

劍法阪東一勇威
不可當拾骸庚申
嶺補孝赤岳卿
贊大飼信道
一時離而羽恩惠
六年間歡喜且憂
苦共維倚富山
贊妙真
Ōkai Shindō

戶山妙真
Taniyama Mitsuhiro



赴赴忠意子領年凌百憂
英風誰敢敵一箭貫金兜

變姿知幾處智勇最
冠州牛閣返重恨鈴
森討久雙賢犬山
忠與犬阪胤智
Ōno Chikayoshi

犬山忠與
Ōno Chikayoshi

犬阪胤智
Inoshima Chikayoshi

大飼信道

五

大飼信道

大飼信道

大飼信道



馱馬倒山路姉妹咫尺間
若非神妙助爭得到仙寰

又
仙山逢第姑夜
徑見古丈姉妹
依神助相恨
鳳雛十郎

十條力二郎
おきよおたけら

皮手
ひくく

單節
ひとよ

十條尺八
とせうしちやう

八代傳九郎卷三十四

大徳寺藏



沼蘭
ぬまらん

一卷探野豬雙手
駐物拈謙遜不曾
誇其名轟世界
贊大田悻順

心血成良藥眼前救一雄悲風花落
處不料得神童 贊沼蘭

大田悻順
おおのたけのり

八代傳九郎卷三十四

大徳寺藏



鍾動從極物 如淚滿 羅裳花
 亂富士雨 落英蓮 八方
伏見
 撰 統却成 華法衣 長遊 俗歷
賢大
 遊二十年 終總八行 玉
法師
 右抄贊 一十七首 叨題 幸 穉 簡 端 以
 款 於 四 方 后 子 雅 鑒

琴瑟壇史



南總里見八代傳第九輯卷十三之十四

東都 曲亭主人編次



第百六回 賢士重く大士と知る 政木肇て政木と詳む

再說大江親兵衛仁の尺の中も足る鐵扇のて河鯉佐太郎孝嗣の最も劇ある鼓又
 矢と受流し相柱えり。挑戦ふ至妙の武藝の孝嗣秘術と盡せども、毫も迷はざる。い
 憶も聲と被て、少少姑且もね同ふありと叫び、身を跳りて、圍籠の外へ退き、喘と
 定め、刃と鞘と、親兵衛莞尔と立ち笑ひ、思ふに優る和殿の大刀筋何とぞ、雌
 雄を決せると向うへされて、はまはるとよ、和殿の為人を揣り、貨財と奪ふ、騙見ると、欲
 必是响馬前刀徑の事とせり、又那麻生の松籬の亞流るんとあり、とて、鼓を果さず、欲
 甘み、精力凡庸るむとて、矢庭に我身と撥、投石の合、一夏の勢、世に少ゆる村上義

光妻鹿孫三郎とて。及ふ。加旗武藝精妙。純子數寸の扇子。我大刀風を
 扇返す。神術奇特の。上奇に和殿の懐より。一道の光明赫赤火と。閃出散徹
 多。只我眼と遮り。朽惜も腕見狂ひ。大刀筋安定る。心敬篤に誅し。不
 徳の刃と歇め。意不和殿人倫を。奮我死を救ひ。箭の刀自の等類。欲權者の化
 現。欲狸妖怪。欲惑心と解。甚摩之。向ハ親兵衛うち領を。疑ハ然と。さ
 酒家の妖怪。変化さ。実を諦せ。和殿等。窮達不定の孤客。這頭と遊歴。老の
 我名。酒家の和殿。相識。毛野道節。七犬士。同因果の義兄弟。
 大江親兵衛。仁と喚。做去。今茲九歳の。総角。童年。才小四の秋。伏姫神の擁
 護。安房。富山の神。崇嶺。人となり。甲斐。心術。身長。見。像。大人
 補。文学。武藝。姫神。授。然。本。事。料。ぬ。比
 世。復。出。時。を。國。主。御。父。子。の。奉。為。寇。と。夷。は。敵。と。降。と。功。と。寵。用。せ。

上總。館山の城。を。隨。預。け。れ。故。事。幾。日。も。あ。君。の。見。妙。自
 餘。の。犬。士。の。在。外。と。索。ひ。一。個。も。送。り。領。て。来。よ。猛。可。身。の。暇。と。賜。り。ぬ。我。亦。同。因
 果。の。義。兄。弟。先。ち。單。國。主。仕。と。本。意。と。思。ひ。一。談。及。び。領。當。り
 多。伴。當。一。個。も。俱。甚。投。方。と。赴。程。則。一。日。の。旅。る。け。由。這。頭。へ。来。け。ぬ。御
 上野の松蔭。茶店。一。番。時。立。寄。て。路。疲。勞。と。憩。へ。り。一。里。人。多。群。立。走。り
 前。面。岡。中。頭。を。敷。き。那。罪。人。を。見。ん。と。慌。く。相。罵。り。思。ひ。茶
 店。の。老。媪。所。以。と。問。ひ。老。媪。の。答。の。詳。少。心。圖。る。城。内。の。機。密。と。送。り。告。げ。れ。り。
 然。る。酒。家。富。山。中。伏。姫。神。の。示。現。の。上。和。殿。親。子。の。忠。誠。孝。義。と。知。り。と。り。
 了。今。又。老。温。の。所。の。具。多。酒。家。悄。地。思。ひ。那。孝。嗣。忠。孝。の。異。高
 段。の。對。陣。道。節。毛。野。野。們。感。嘆。と。刃。と。交。を。相。別。れ。と。傳。少。小。慨。や。侮。人。們。不。誣。ら
 多。罪。る。罪。命。と。頑。を。欲。憐。む。猶。餘。の。非。如。我。這。身。と。あ。其。死。と。極。は。

せめ ちきり うむと せんがきり ちきり
 切々首級と奪命を 選佛場へ葬らる。亦武士の情のそと尋思とあつて遠
 あくを儘茶店と立去り。前田岡はまき相まの既刑伐の折とあつて和殿と布草の
 上小牽居る。身邊より実檢使あり。竝小大刀合の武士もあり。他は老嫗小少知
 なる。刃心岡の城の頭人根角谷中二麗慶と穴栗專作あり。と精せらる。大の餘幾十
 個の雜兵四下と守護。專非常と警ある。後方の連の岡の中。樹柵隙る。成平
 あつねの件。樹陰に身を潜して。事の容子と偷看在り。小觀目不樂。和殿の終
 馬白刃既小頭上小莅ぬ。胸の裏に胆冷て。挿し術も折る。幸ひ多き越路より。長
 尾家の老夫人當所へ發向のゆえあり。多々轎子と寄られて。遂に和殿を救ひ合はる。
 理非明辨の談精妙。敬馬奇雀躍愉快の光景。況る。時宜なる。一々麗慶
 りみる。退去りて。那大刀自の両刀を和殿に合はる。と觀し。怪しや。幻也。其里に在
 てる。簾大刀自最ヨリける。伴當さへ瞬息間に在る。事の奇瑰。小月潰

快立去まされ程の酒家。悄地と思ふ。那孝嗣の智勇の健雄。毛野道節們
 と相識する。親子の忠誠。その甲斐も。僅に死罪と免れて。萍跡浮浪の人とあり。と
 我君侯は薦めまらる。里見の家臣に做まらる。萬卒の倍々。馮心か入る。と
 のま。本事と知らぬ。銚一と尋思とあつて。和殿に先づ同道より。悄地と走りて
 這里に在る。像の如く。計較と聊試きたり。ける。倘九庸の浪人。我懐るる
 財囊と相と。正る。心を發ま。死に一所不住の浮浪の其身。小鏢一文の盤纏を
 けれど。然る。と。小掛念せ。酒家と路に倒れる。病者。と。憐れ。思ひて。喚活す。
 る。不届の。介保せん。と。を。掛られ。清白仁慈の心操。君子。と。知る。め。武
 藝の利鈍を。撈ら。為。小陽。多。と。下。不。投。れ。多。と。跌。倒。れ。多。と。刃。を。抜
 晃り。と。數。果。さん。と。挑。ま。け。大刀筋。都。と。法。稱。ひ。て。一人。當。千。の。段。る。死。に

武藝の程を知る上、里見殿へ汲引せん外を求ると、意末と告て慰められ、
 孝嗣深く感佩し、然るに天々々々、四下とて、聲を惜りて、原来和殿、大阪、
 那七勇士と宿因ある大江生であらうと、那八の義兄弟八名ありと、皆か言向、
 對陣、大塚生と、虧れ和殿の上、夢知らり、神の擁護、靈山にて生育せりと、
 少く、思ひ合、奇特の觀面、今茲九歳の総角と、誰う知る、死身長、心術さへ、
 大人備て、智略、勇力、武藝、まで、現神々、雋傑、今昔を、雙と、つて、神靈、傳授の、
 大刀筋、く、敵、か、然る、と、方、僅刃、と、合せ、折奇、れ、和殿の、懐より、光を、發ら、
 榮然と、我面を、捷け、る、必是、所以、あり、と、親兵衛、うち、所、疑ひ、鮮易、り、我、
 黨、さ、八、大士、の、自然、と、獲、る、靈玉、あり、その、八、顆、の、玉、母、仁、義、礼、智、忠、信、孝、悌、這、
 八行の、文、二、字、あり、天造、地作、の、寶貝、あり、れば、厄、と、釋、を、雙、と、征、す、第一、の、身の、衛、られ、
 優、き、もの、あり、就中、我、持、る、至、り、仁、の、一、字、あり、仁、と、名、告、る、これ、由、り、曩、富、山、と、

折獨館山の城、赴、逆將、墓田、素藤、と、生、拘、ら、凶徒、を、降、城、と、拔、れ、我、靈、
 玉の、威、徳、よ、れ、信、れ、和殿、と、挑、一、折、の、自然、と、光、を、發、ち、る、速、莫、館、山、の、城、を、
 あり、の、那、兇、黨、が、降、伏、の、為、体、と、告、る、事、と、違、わ、と、言、詳、る、ゆ、れ、る、思、ひ、
 れ、又、只、我、上、の、七、大士、們、が、才、幹、言、行、安、房、侯、老、候、御、父、子、の、明、徳、賢、と、愛、し、民、を、
 極、善、政、限、る、施、の、賢、君、良、佐、の、事、の、崖、略、伏、姫、神、の、靈、驗、威、徳、の、世、の、復、ゆる、死、
 奇、談、を、鮮、示、さ、思、へ、と、這、里、久、恋、の、園、あり、卒、の、上、野、の、原、も、退、て、送、意、
 衷、と、盡、ま、と、の、孝、嗣、再、議、の、覃、を、現、る、れ、の、理、あり、物、蔭、も、な、這、池、畔、
 少、く、長、譚、小、時、を、程、さ、谷、中、二、們、が、稍、醒、と、立、か、る、事、何、せん、非、如、その、あ、り、と、
 忍、心、固、る、不、遠、と、一、歩、も、快、退、と、上、策、と、死、の、卒、と、連、立、と、上、野、の、原、の、
 來、れ、親、兵、衛、遙、指、と、河、鯉、生、の、那、老、松、を、片、食、り、と、建、屋、葺、き、折、
 遠、と、老、の、嚮、我、魏、と、老、媪、の、茶、店、で、侍、る、和殿、の、身、の、皮、の、囚、牢、衣、を、去、向、

外視宜かき。今日殊に温暖るれば。我下衣一箇脱く。裏て腰の纏る。且
 那里へ立ち上りて。あをまわらせん被ぬる。と云ふを孝嗣と云ふ。そと又治く死好意有り。
 知己の隨意せざらんや。と答へ答へ共侶の伴の茶店へ来りて。窓の蒼柴烟の立
 ども。何地の煙けん老媪の在るを。然りとて。茲より外の亦媪ふ。死家の。一雲時等る。ど
 かの来りんと。思ふ。兩個の後生の。儘裏面へ入。折る。何由段篋を掖遠ら。外
 視と憚る。目柴ふ。俱の茶を汲。ち喫。親兵衛へ腰の附。袂裏より被たて
 衣。會て孝嗣。卒とて。遞與。孝嗣。受令。うち戴。多。上。襲被。身
 装を。あ。れ。も。あ。の。の。老。媪。の。ま。還。な。ば。を。儘。登。見。虎。と。楓。て。親。兵。衛。と。俱。媪。ひ。て
 在。登。時。大。江。親。兵。衛。の。孝。嗣。の。ち。向。ひ。て。御。話。漏。た。る。身。の。福。福。伏。姫。神。の。真
 助。撫。育。并。小。姥。雪。老。夫。婦。曳。の。單。節。母。子。の。事。及。七。犬。士。の。事。の。趣。の。裏。小。姫。神。小。告
 られ。と。听。の。隨。一。事。も。省。も。且。里。見。殿。父。子。の。賢。明。四。家。老。諸。勇。臣。の。行。狀。得。失

素藤が叛逆の顛末まで。その要を演敏系と甘と箇様々と。情語を示せ。孝嗣と
 听毎小連の感嘆の聲を。断ち憶も。太息を。吻。連愛。諸大士の孝義英
 才始。在下。君父の與。大坂生を。恨。その僻事。と。悟。り。より。更。不。捨。く。死。思。ひ。あり。
 知。今。又。その。義。兄。弟。大。江。和。殿。の。解。近。と。その。身。の。資。助。の。り。り。過。世。あり。て。歎。宜。小。奇
 り。任。ま。る。八。個。うち。揃。い。ぬ。佳。門。傑。連。の。宿。縁。あり。と。君。臣。の。義。と。結。せ。ぬ。と。里。見。殿。兩
 侯。の。年。來。の。德。澤。仁。政。听。く。宗。治。り。名。將。の。り。美。む。む。と。只。管。嘆。賞。せ。た。れ。ば
 親。兵。衛。の。聲。と。惜。め。て。御。中。も。既。ま。い。け。し。我。君。侯。の。賢。を。招。れ。士。下。り。ぬ。を。の。と。老
 殿。の。死。時。より。蛭。崎。十。一。郎。照。文。と。喚。做。を。家。臣。を。関。八。州。遣。し。と。智。勇。全。備。の。士。城。を。と。く
 招。ひ。ぬ。い。ぬ。折。大。塚。大。飼。大。田。の。下。總。を。行。徳。也。と。大。法。師。と。十。一。郎。思。ひ。ひ。多。相。遇。ふ。て
 里。見。殿。の。息。女。を。伏。姫。上。の。大。士。の。與。過。世。の。母。を。い。ゆ。ゆ。と。料。も。曉。得。る。首。の。い。は。徳。と
 ち。と。八。房。の。犬。の。事。金。碗。入。道。の。大。事。及。親。兵。衛。の。二。親。の。義。俠。横。死。の。事。を。も。詞。意。道

よく解せず。孝嗣の感嘆して。咱們扇谷家不在。一日、奸黨の仇を忘れて。一個も知音の
友を。高嶽の軍陣を。大阪、大山西、勇士の意を。衷と始。听し。冤家。寛家。心似。知
知己。思ひ。今又。和殿の。話説。九人。知。不足。水原。尋。姫神。孝
義の。英烈。自然。生れる。八個の。豪傑。里見。宿田。是。安房。四
郡。過。偉。造化の。妙功。八顆の。靈玉。個の。良臣。身。護り。君。補佐。武威
八方。赫。久。後。憑。感心の。外。縁返。心。誠。親兵衛。慰
め。思。他。未。里見。殿。仕。酒家。一尺の。書。和殿。薦。必。登。用。せ。安房。赴。孝嗣。沈。吟。非。如。不。徳。の。君。扇。谷。家。の。父。祖。の。時。より。恩。顧。重。代。の。主。君。の。一。小。今日。死刑。免。れ。他。姓。仕。願。和。殿。の。従。者。と。成。り。投。不。伴。大。阪。大。山。自。餘。七。個。の。大。士。連。小。對。面。和。殿。と。俱。那。人。々の。安。房。小。参。り。仕。後。幸。ひ。て。棄。れ。我。身。吹。擧。小。

預。左。右。の。香。意。依。目。今。の。從。い。と。答。折。然。と。は。定。方。と。投。て。者。あり。此。は。是。別。人。る。も。這。茶。店。の。老。媪。を。引。続。ら。せ。段。筆。見。推。啓。て。找。入。る。親。兵。衛。們。見。合。笑。と。揖。讓。して。あ。郎。君。前。面。岡。より。剛。才。か。ま。ま。甘。飲。奴。家。の。所。要。の。の。喚。れ。宿。所。走。り。程。店。ち。空。け。好。を。せ。ひ。た。れ。兒。連。さ。る。も。茶。と。召。れ。飲。先。沸。ら。し。ま。わ。せん。とい。吹。笛。合。抗。埋。火。撥。て。吹。起。せ。木。の。煙。立。升。る。雲。霧。の。離。色。白。菊。の。衰。易。風。情。を。老。媪。と。孝。嗣。と。相。々。親。兵。衛。と。袂。を。掖。て。大。江。主。那。と。老。媪。と。那。老。媪。が。面。影。に。御。不。我。が。必。死。と。救。い。假。大。刀。自。小。肖。の。備。の。人。の。あ。ま。と。ち。耳。指。し。示。せ。親。兵。衛。も。稍。心。現。の。れ。聲。音。まで。毫。も。錯。定。不。似。り。故。を。奇。と。潛。語。く。鼓。耳。の。歩。を。けん。老。媪。徐。徐。と。刀。袂。達。ま。ま。不。訝。り。前。面。岡。を。河。鯉。王。の。危。命。と。極。令。り。別。人。る。奴。家。の。好。を。孝。嗣。の。親。兵。衛。も。胸。を。潰。ら。さ。る。長。視。を。老。媪。と。微。笑。く。

八代傳七郎 孝嗣 十三 女史堂藏

大江王の遣使の初對面は、何れも知らせぬ理の河鯉腋子に名をとりたも、所知りたるも、
 孝嗣家の政本は、信か、と名生れど、孝嗣なるは、作摩政本と誰り、と訝り、向ひて、
 近つて、登見、死し、うち、搦て、原來、忘れぬ、依然、具の告、まゝ、大江王も、听、和子、
 思ひ、出、ぬ、奴家、の、身、の、後、の、姥、母、の、政、本、で、信、か、と、孝、嗣、を、信、か、と、悟、り、原、來、我、總、
 角、の、比、大、人、の、夜、話、の、信、か、と、故、る、影、と、願、き、姥、母、政、本、に、你、飲、み、之、什、麼、思、ひ、は、再、會、
 する、と、の、不、訝、る、親、共、備、へ、我、姓、名、を、知、れ、る、も、亦、奇、と、も、口、を、針、で、刺、す、當、下、政、本、は、ち、
 點、頭、を、又、孝、嗣、を、向、ひ、て、や、喃、和、子、這、回、奴、家、を、身、を、救、ひ、事、の、情、を、今、ゆ、く、説、明、え、
 恥、く、面、を、所、由、で、信、か、と、身、の、未、生、以、前、より、奴、家、の、忍、岡、の、城、内、に、牝、牡、栖、馴、る、野、狐、と、
 あ、ふ、奴、身、の、年、二、才、の、比、奴、家、に、有、身、信、り、と、あ、る、は、奴、身、の、養、父、權、佐、守、如、大、人、の、素、と、
 忘、義、の、士、で、當、時、忍、岡、の、城、頭、の、頭、人、で、と、せ、り、と、那、城、内、に、在、り、又、奴、身、の、奶、々、も、慈、悲、深、
 く、物、を、憐、む、本、性、な、れ、ば、心、を、痛、く、思、ふ、間、奴、家、牝、牡、の、家、の、富、來、て、篁、子、の、下、小、栖、れ、と、人、見、

られ、知れ、ぬ、奴家、の、開、里、を、子、と、産、ぬ、時、又、河、鯉、家、の、若、黨、小、楳、田、和、奈、三、と、喚、做、を、あ、り、
 その、性、酷、く、殘、心、を、救、生、と、好、ま、り、あ、の、年、奴、身、の、養、父、守、如、大、人、の、君、命、よ、り、京、都、將、軍、家、
 へ、使、小、立、ぬ、小、那、和、奈、三、の、政、本、と、喚、做、を、奴、身、の、姥、母、と、幾、の、間、密、通、を、あ、り、し、る、折、
 病、を、推、け、て、ま、の、伴、ま、さ、る、小、程、は、我、雄、狐、の、奴、家、と、與、小、食、物、を、求、め、夜、々、外、へ、出、し、有、一、日、
 件、の、和、奈、三、の、釣、漢、の、地、龍、と、身、合、ふ、と、心、も、も、く、庭、の、印、を、狐、の、足、跡、と、見、出、し、這、足、
 跡、の、猫、より、大、に、く、狗、より、亦、像、小、な、這、頭、小、狐、の、穴、を、開、き、通、ひ、路、を、あ、ら、ん、と、と、尋、
 思、と、考、へ、その、日、の、夕、飲、鼠、と、麻、油、を、敷、き、甲、夜、より、庭、の、涼、を、搦、け、し、我、雄、狐、を、相、て、涼、
 け、と、知、る、の、く、畜、生、の、悲、し、い、の、香、小、掖、と、心、を、感、ひ、て、慾、を、禁、ず、と、要、せ、ぬ、終、に、涼、を、搦、
 ら、れ、と、命、と、開、里、を、頭、に、け、り、小、程、小、楳、田、和、奈、三、に、搦、り、し、て、狐、を、合、を、獲、て、その、穴、を、う、ち、咬、
 皮、を、售、れ、ぬ、飽、を、狐、の、穴、の、あ、ら、と、悄、々、小、未、獵、る、程、小、我、子、狐、の、穴、に、在、り、鳴、聲、耳、を、
 洩、す、て、原、來、の、篁、子、の、下、小、栖、る、狐、の、穴、に、あ、り、獵、出、し、射、て、合、ら、ん、と、罵、り、噪、り、て、准、

備を養ふ。おん身の奶々の守知りぬ。うち敬篤。和奈三と召よせり。向ふ。和奈
 三懸をよむ。夜庭。涼を措て。簀子の下。栖ひ。牡牝を捉獲。支の趣を
 招き。乳々の腹。立ぬ。そを輕く。曲事。我良人の性。とて。慈善。と旨と
 ぬ。其介る虫。と。故。殺。ぬ。況。當所の鎮守の神。妻。忠。橋。荷。之。御
 座。六。狐。の。要。ある。獸。且。その。狐。を。捉り。宵。河。鯉。氏。の。先祖。の。忌。日。の。速。夜。中。も。丁。する。簀
 子の。下。栖。る。狐。の。あり。と。知。り。主。事。告。げ。傳。恣。を。殺。生。の。言。語。同。ぬ。と。い。へ。折。り。我。良。人。と
 京。上。りの。留守。の。一。家。見。る。僕。従。の。ゆ。正。支。を。考。と。稟。六。家。と。守。ま。る。我。怠。慢。を。と。發
 憤。ら。せ。ぬ。ん。傳。鳥。許。の。波。黒。見。今。よ。りの。後。使。ひ。さ。り。大。爺。の。か。へ。せ。ぬ。自。ま。で。速。下
 宿。と。慎。く。沙。汰。と。筆。と。思。ひ。の。隨。吐。り。懲。り。て。子。舍。を。退。け。屏。居。ら。く。和。奈。三。を。保。人
 某。甲。と。召。ま。り。仔。細。と。示。し。て。那。身。と。預。け。遣。ぬ。ぬ。傳。の。一。程。お。ん。身。の。奶。々の。奴。家。母
 子。と。憐。れ。ぬ。い。て。這。城。内。の。岡。も。あり。林。も。あり。その。狐。の。牝。牡。の。家。の。簀。子。の。下。栖。ひ。所

以。小。牡。牝。の。を。斬。ぬ。の。人。の。も。可。惜。命。を。預。け。た。り。牡。牝。の。を。ぬ。れ。ぬ。の。牝。牝。の。子。を。養
 ぬ。ぬ。便。る。く。哀。う。め。日。毎。子。食。と。與。よ。と。心。術。素。直。の。奴。婢。の。恣。々。と。吩。咐。を。或
 餅。赤。豆。飯。油。敷。の。豆。腐。鯨。魚。を。と。簀。子。の。下。小。措。ぬ。ぬ。日。夜。小。賜。ひ。ぬ。奴。家。の。夜。み
 外。出。て。求。食。る。不。及。ぬ。飽。ま。ず。乳。汁。も。卓。散。し。け。れ。子。を。養。ふ。便。り。を。得。ぬ。も。皆。日。足。奶。々の
 御。恩。を。侍。れ。ぬ。と。泰。く。思。ふ。も。恨。め。ぬ。只。和。奈。三。の。三。然。れ。と。も。他。の。心。猛。く。殘。忍。を。斬。ぬ。の。暴
 男。を。令。漏。く。命。を。果。さん。術。と。施。ま。す。も。あ。ら。ず。誰。何。せ。し。と。思。ひ。不。眠。々。四。五。十。日。と。歷。ゆ
 程。小。守。如。大。人。の。恙。多。く。華。夏。より。か。へ。返。命。を。ま。う。ぬ。ぬ。お。ん。身。の。奶。々の。折。小
 榎。田。和。奈。三。が。事。の。趣。を。守。如。大。人。の。報。ぬ。ぬ。大。人。の。所。々。點。頭。と。和。奈。三。の。譜。第。の。お
 ら。ぬ。心。術。良。し。ぬ。ぬ。身。の。暇。と。取。せ。ぬ。思。ひ。の。果。さ。ぬ。免。惜。ひ。ぬ。者。を。と。預。置
 せ。和。奈。三。が。保。人。を。召。よ。せ。り。家。風。小。背。の。他。が。越。度。と。恣。々。と。喧。え。知。ら。し。て。那。身。の。暇
 取。り。ぬ。恣。而。又。日。數。と。歷。く。我。子。の。既。小。乳。を。離。れ。て。稍。大。き。り。ぬ。他。の。野。山。遣



政木の老媪が
懺悔話説
和奈三政木
夜剪徑子
説さる

Page 11

木

八代傳九郎

六

文楽堂

八代傳九郎

文楽堂

あつ。身單故の穴小在の徳う程和奈云。主家小在まゐりよる。月情慾のき方
 けれ。惜地の政木小艶翰とまゐり。謀合し夜小紛まて誘引出て走のけり。明輩の
 奴婢們と小井と知れるものより。小奴家とるの豫より。徳らんとし。猜たり。這時怨と復さ
 む。孰の時を期ま。思ふ。當晩和奈と政木と政木と述を跟て行。小千住より去向遠う
 ぬ竹塚の邊ま。和奈と干乾小父の莊客あり。那里と憑ま。姑且の身の躰外小まへとて。開
 方と投う。そのを奴家途ま。迷。瀧野川村。掖てあつ。左右問ま。細路ま。奴家の
 前徑の山家小化。他們が前後より。兩個とをせ。立頭れ。盤纏と遞與せと。喚被ま。
 引拔れ。詭き刀の光。和奈と政木の吐嗟と叫び。路と討め。逃んと。る。歩下。暗。小藤原
 折る。月雲不没。黒白と別。男女と。急流。名高。石神川の岸。踏崩。滾落。
 浮り沈。流れ。が。俱。溺れて。死。けり。徳。て。奴家。月。屬の。怨。と。復。ま。と。ゆ。心。小
 快。り。か。も。政木。が。在。ま。り。よ。り。生。れ。嫁。母。と。隸。ま。る。が。和子。の。必。面。嫌。い。あ。て。その

乳を軋く。嘆。然。和子の。食。嬢の。心。苦。く。お。な。ま。く。是。より。五。疳。の。病。ま。と。引。出。
 思。ひ。争。何。い。せん。和子の。奶。の。好。意。を。我。子。の。安。く。生。育。し。今。その。報。と。せ。ま。の。あ。ら。ん。
 思。ひ。ぬ。の。不。似。り。子。毎。大。泣。う。り。か。と。乳。汁。へ。今。る。餘。滴。あり。絞。れ。ば。ま。く。出。る。か。今。宵
 政木が。逐。電。せ。よ。人の。知。ぬ。を。幸。ひ。ま。れ。せん。術。あり。と。尋。思。く。その。時。天。小。心。圖。の。城。内。小
 今。來。く。政木小。變。へ。和子の。臥。草。小。添。乳。と。ま。臥。た。り。けれ。東。人。御。夫。婦。い。へ。あ。ら。り。
 一家。兒。の。奴婢。們。誰。も。か。政木が。逐。電。ま。と。知。ま。況。和奈。と。共。侶。小。石。神。川。小。滾。落。て
 底。の。水。屑。小。あ。り。よ。後。ま。で。告。る。め。る。け。れ。奴。家。と。直。真。の。政木小。あ。ら。ま。と。知。る。め。絶。て。ま。り
 けり。徳。而。の。次。の。年。お。身。の。奶。の。血。塊。の。病。着。重。く。臥。ひ。よ。り。鍼。灸。茶。餌。の。效。驗。を
 約。莫。半。稔。有。餘。あり。竟。小。身。故。り。ぬ。ぬ。奶。と。亡。る。ぬ。い。よ。り。和子。の。奴。家。を。莫。稔
 離。れ。ぬ。ぞ。放。ち。も。せ。ぬ。恩。愛。既。小。庸。常。ま。ね。我。実。子。の。思。ひ。と。做。し。守。守。む。又。二。稔
 有。餘。和子。の。五。才。小。あ。り。ぬ。い。ける。夏。の。日。の。ひ。かり。南。向。の。小。坐。席。小。奴。家。小。和子。小。添。乳。を。ま

怪しと思ひぬけん次の間在り大人を連り喚立りて登りて是禽せ渡り顔の物
 児お作り侍りし禽せ渡り喃々と喚る聲の奴家が宿耳入りて駭然覺て一霎時堪せ
 鈍まや我れ我が本形と頭けりと思へを伶庭門も走去りて竟ふ還らざるも別の悲し
 けし日の暮るるまで前栽る樹蔭お躲れて泣く在り守如大人も件の奇異を禽し
 駿馬に怪しめ大なる原政木の野執りし年の来知りて我子と守育せりて悔
 まけれぬのゆえ人知る武主のめが畜生の乳をくその子と育まけりといれん此上
 るの秘よ口外まじむと奴婢們と駭りて警めりてその明日日政木が保人某と召せ
 日政木の逐電をり然りとて另ふ犯せる幸り往方と索て見出るるおぼて来りて
 この餘の云及れ和子に五才ありぬぬ母もくてもあべとく老女と守小隸ありて
 我子の與るれと人薦れとも後妻と娶らるる鰥夫在りし今程の年の冬與隸の

老黨其丙病死ければ扇谷殿守如とて并々迹復成りぬ日足より守如大人に五
 十子の城お召れて那首お移り住るぬ奴家の情々も和子と見ま欲するお路近々ねを思
 るも儘を不娯しき涯のまのりか忍心圖を立去りて上野の原お獨居りぬの時奴家お
 中身お幸ひ命長くと數百年と歴れども靈魂もなき死功徳をけりて通力も亦疎ゆ
 壯の残忍の人お殺され我れ我程おくくその怨を復し折読したるも下を和奈三
 政木と害せりぬぬ遺莫不良の人とも世萬物の靈とて守身お畜生とて仇と
 謀りて賸死地お陥れり人畜尊卑の差別を思ひて對心の義をりて我れ行ある
 さんや然り神も佛も憎るぬ我身も天の眞罰怕るし焦も罪障重けれ今より
 幾層の功徳と積り世の爲又人の與る慈善とて言せぬも志願成就の日ありて深
 念の胸と固めけりぬぬ這上野の原お昔よりして人鶴お出茶屋をどのあをきけれ
 三伏の最熱した日又玄冬の寒は時旅客寒暑堪難て死に至るものなるあをき

故の奴家の老媪の妻なり。ここに茶店を置より往復人の便を為さる。年米のりよけの然る日毎の獲得茶銭のを見或の寒民の餓を施し又這頭を溝壑深の朽損ねるの隙をたれ奴家情地不獨木と知る。人の便宜をせざる。或の男女の情死を制め意見を加え慈を諭して故の收りも勘も或の困窮至極して溢れんと欲する者身は淵川投んとあまを救ふ錢を取らば且生活の便宜副誨を宅着と養せしむ憂を轉しと歡びと做さしむくゆり病奴家這陰徳を思ひ起けその日今追て二十許年人の必死を救ひぬ九百九十九名おほの天意を稱ひ故終身年々白くあり。その清は雪の像く尾の亦裂く九尾おほ世の九尾の狐は近世の似而非物語玉藻前事として皆悪狐とと思われ并其に訛針老九尾の狐は神獸又九尾狐と稱す。瑞應編の明文あり段成式が酉陽雜俎の天狐とあり九尾あり日月宮に来往し陰陽洞達し千里外の事と知る天眼通とある。奴家の修行の功徳因て精その數入

るあわゆる白毛九尾の形と備天眼通を語り五十字の城に在る身の谷々守如大。人今茲正月廿一日免れぬ厄あり折奴家その美を知るを。救ひまりと思ひが命數既の涯の定業も争何せん本意をせとのまら不嫁し又死身は好當毒悪詐許中れて冤屈の罪の死を促され白刃頭おは位お至れり今日我和子の死を救ひぬ。この慈恩お報りせし始あり終る。年来做あ我陰徳の空あるんと尋思ふ。這頭おはる着属の野狐と召聚合て計畧と説示。奴家の即越後長尾家の老主人服殿お身と妻と着属の百十數個の伴當打捨し根角谷中三伯を罵り。今輒く死身と救合しぬ。因縁都てか。如然り年来人の死を救ひぬ。數九百のり。一人を千の満ち志願成就のけの折昔字育まぬを。和子と救す。昔恩答は。一。一事兩用と鉄くはるか。情免告長談久話を孝嗣つらく所果て感涙坐お叱む。一。一霎時の答は。一と思ひく。嘆賞し。通徹妙は汝の方便衛あゆむ。一。一

かく我総角より比親の聞きし事なり故に速電を往方へ今知れどと思ひし事
 思ひ死をその身の非人異類にて賢人貞女も及ぶべし陰徳善行我與の再生の因なり
 開も亡母の慈善の餘徳世に復ゆるる幸なりと稱す感謝の堪ざりし後ひ涯りる
 けりその時にも親兵衛のいふに頭と低て黙然と在りける徐の貌と更めて政木狐の
 うら向て物千載と有りぬれ神の通と靈あるの和漢の例も汝の命長は亦怪む
 足らぬもの身既一十年の長壽も治まる靈狐るの量小河鯉の家の重貴子の下ゆく
 子と産め其比の九百八十許歳るべし縦その身の異類とも物老れは經紅燭の有
 身も正有るからん然も有りぬるゆと詰と政木の所へ去る宣まると言ふ約莫
 天地の清氣の稱も長壽を有りぬるもの身老て又嬬回百歳毎も血氣復して
 情慾も亦始ふ異ぬるべし奴家の連添は雄狐の老て死せし又外より入贅しぬて來
 ぬも十の數ふ抑狐の陰類を群居せぬの氣の牝牡と栖るもの故に唐山

中文字のあらはれぬ狐の爲に狐の即狐の義にて群居するのよと取れり要する教言
 其の身の與史釋迦の説經孔子の語道は似たりかとのう物々うち笑ひ親兵衛屢點
 頭てその氣の既ふるる然らば又問詰し汝の雄狐の死せし比の靈狐の田地に入る欲
 多し情を割れ然れ林の慈善も言とせしは後暗に初むる所なりと云ふ河鯉生を救ん
 とてその形貌と變化して谷中二竹の愚母は是機變の神ありは機變の神佛の憎む所
 事邪魔鬼の入り所以に徳悪機變の心報也恐慎むべし靈狐の所は似けり
 や且汝が河鯉生未贈る兩刀の原河鯉の什物をも既未没官せられ惜地小奪奪るる多
 開の竊盜の所爲に似て快らぬ所ありは亦是故ありは教詰政木各笑て理論は定
 然も多し機變も私慾の與も其或母の與君との與中ひりるる況罪を因人の枉
 死に救ひ一機變の佛説の善巧方便孔子の教を直に奉じて父の子の爲に隱し子も亦各
 爲に隱し直に其中に在りしはこれと思ひぬ奴家が詭計の恩義の與はる間神佛も與

又孝嗣主の両刀の實の波官せられぬ根角谷中下私怨を奪せ收め置るを
 復して主を返すを竊盜の所なり。心志然ても儼然とて欲たらず親兵
 衛又點頭て耳新を論辨分明理の多ぶるを。咱們及び及び。と答るを政本を推
 禁めて然る直以て奴家の知り親身世界中人と見八犬士の隨一人神女の真助成長の
 奇童をたゞとて。衡の穂ひる折奴家のを猜し。然る親身の懐中天地の間
 両箇にたゞ仁字の靈玉の。九庸の野狐の。非如長壽を有らざるも。横向ののを克と
 本形と頭去る。身の幸い。はも。既の靈机の數入の。心志毫の邪を。是を證據
 事。の顛末と解。示。あ。知。て。い。と。馮。心。思。う。情。地。小。安。房。上。總。る。城。隍。土。神。速。と。招。く
 せ。那。里。の。安。不。と。同。試。し。あ。又。い。か。る。異。変。の。死。身。の。ま。知。の。あ。る。あ。ま。親。兵。衛。發。見。を
 放。ち。て。開。と。何。事。を。い。ふ。知。ら。ず。快。う。ち。半。ね。听。ま。く。は。と。同。か。答。え。然。る。も。死。身。の。主。君。を。疑

猛可の遊歴の暇と賜ひる素も邪魔の所為か。その故の箇様々々と逆將甚田素藤の
 妖尼妙椿が幫助とゆるい。身夜館山の城を襲る。その折城の頭人。登桐山八良干の生
 柙。れ。田。税。戸。賀。九。郎。逸。時。と。若。屋。八。郎。景。能。の。敵。の。圍。を。殺。用。に。俱。他。擲。走。り。事。是。お
 とも。里。見。殿。の。荒。川。兵。庫。助。清。澄。と。討。隊。の。大。將。と。七。館。山。の。城。を。攻。伐。を。い。ひ。妙。椿。が。幻
 術。を。用。い。魔。風。を。起。し。寄。隊。を。破。り。浦。安。半。助。友。勝。を。傳。ふ。事。這。夜。艾。荒。川。清
 澄。の。埋。兵。を。い。夜。敷。の。兇。黨。礮。時。願。八。奧。利。狼。之。介。們。を。生。拘。り。し。妙。椿。が。幻
 術。を。用。い。件。の。三。賊。と。騙。畧。り。事。の。後。荒。磯。南。弥。六。と。安。西。小。介。と。情。地。小。謀。り。く。
 素。藤。を。刺。し。も。敵。城。小。入。り。戦。死。せ。事。の。比。又。里。見。殿。の。星。義。の。土。中。埋。措。せ。親。兵。衛
 が。仁。字。の。玉。と。清。澄。小。替。ん。と。穿。き。せ。の。瓶。の。ま。あ。り。玉。の。ま。日。れ。爰。始。て。感。醒。て。後
 悔。の。心。あ。り。その。比。又。妙。椿。の。稻。村。の。城。小。情。來。て。濱。路。姫。と。撞。撞。い。走。る。去。ん。と。甘。路。伏。姫。の
 神。靈。の。妙。椿。と。蹴。小。姫。と。救。ひ。て。一。霎。時。富。山。お。お。て。妙。椿。の。妖。書。の。及。假。名。鬼。が

冤魂の事親兵衛一毫も彼にせざるまゝに那妙椿が幻術でも里見殿を疑せし事
 顔末も真告き稲村へ遣ひ遣ひの里見殿を聴かぬ。慚愧後悔大なるを登
 崎十一郎照文と城雪與四郎們を使て快親兵衛を召かして素藤妙椿們を對治せ
 ぐ。折をもて餘の士大夫在外をも捕獲せ共侶招に聚合んと欲し評議區々り
 ける瀧田の城内も亦鷓鴣の奇異あり老侯那意精一も隨即照文と與四郎を
 稲村の城遣ひの君臣の便宜を照文と與四郎の君侯の仰と奉り去向を異か
 船路より狂可起行の事の趣の餘一事も送漏さるる崖略解して登崎城雪與四郎
 使价の稲村の城を立去りて便宜の浦より飛出をよける遠もあらず昨日の
 勝と拍鳴く。奇し妙し汝の忠告尙の言を聴かざれば我の他御と偏歴して再叛の賊
 素藤們を討捕る便りも思ひはける幸多くと連の稱をく已まらけり。

第百十七回

恩お答く化龍升天を示す
 津を向く犬童風濤小悩む

登時大江親兵衛の孝嗣あらち向ひ河鯉主今聴れども上總亦復賊乱り腹
 立し館山も三番士們が阿容々々と果敢る城を攻陥され一個の敵も生拘らるる
 個へ逃る不覚さ又歎け我君の死疑ひを解せられ急小仁を召へくと又素藤を伐
 せんと欲りぬと所治るるの一條の面目あり畢竟我身の枉危の妙椿と妖尼の幻術
 より出するを我思慮浅くて今も悟らぬ又我犯ち罪を犯し解れて君侯の醒あひ
 伏姫神の真助も是不足り筆で知り咱們富山在り一日伏姫神の示現ありて
 知るこのるり小始は劣る我智と思へぬ仁字の靈玉も裏小自然と土中に出て
 我懐ふ入りけり訴も小由りて影護く思ひ開も那瓶を發れ無りよと知召
 る異日京一解く證據あり裕とい恰と云造化の黙契妙なる遮莫素藤が復

叛^らんと知^らずもあ^らふさ^て己^らん今^もの事^と听^き。稻村^らの兎使^{番崎}燒雪^們の逢^はひも。
太^く館山^へ赴^き。兎徒^{を送}り討^つ捕^ます。素藤^を思^ひ敵^の折東^の思^ふ
意見^を演^じて死刑^を薦^め。京^を酒家^單の議^を否^し。素藤^復叛^くとあ^らふ人^の心^を
借^らせ小臣^が立地^不誅^戮と宣^示。我^君も憑^り思^食ける。齟齬^と人^の心^を
ま^せ我^も亦^始より素藤^が復叛^んと思^ひ。一^のあ^らねども。饒^を逆賊^を誅^すま^せ
あ^の殘^の克^り。酒^主家長^久の基^を固^め。伏^姫神^の訓^を繇^れ。并^を世^の人^の思^ふ
去^く。君^候の親^兵衛^さ。那^妖尼^の方^寸。狂^される似^而非^仁政^を。今^の謂^はれも
再^叛死^す。素藤^が悖^逆。その罪^先度^の類^のあ^らふ。曩^の那^妖尼^と誅^せ。一^の惡^木も
花^開く。稍^か芥^を入^ぎ。仁^者の心^再度^不至^す。饒^が放^く山^へ還^す。一^の虎^の人^と吠^い。
屠^る。同^仁者^の刃^必ず^も。縦^素藤^先度^の倍^一。幾^千百^人。省^籠る。又^も

活^き。捉^らん。囊^の物^を探^る。易^く。和^殿一^の辟^の力^と勅^{する}。義^侠の意^あら^ふが
卒^の伴^ふ。と^られ。孝^嗣一^の諷^及。通^要。辨^才智^勇金^玉成^を言^ふ。毎^の感^服せ^ま
と^の小^生既^知己^の資^を仰^ぎ。進^退を儘^に。欲^す火^を踏^み水^を没^す。従^らず。
俱^一と^怖る。政^木の推^禁め。又^親兵^衛ら^ち向^ひ。喃^{大江}主^様兵^卒も。た^らも。
身^那里^に到^り。素^藤們^の先^度不^懲りて。妙^椿同^か。他^の亦^も
靈^玉不^怕れて。敵^を影^を躲^れ。跡^を埋^め。風^不烟^の滅^る。如^く忽^然と^逃
亡^る。智^勇も施^す所^あら^ず。又^妖辭^を送^る。這^義を思^ひ。心^屬れ^親
兵^衛の答^難々^沈吟^し。現^いれ^が宜^か。三^回六^辟も。あ^れ目^不。敵^を
ら^の敷^を捕^ら。他^の尚^五道^の術^を。才^も不^才も。人^の各^各。得^る事^も
あ^の故^の孔^子聖^人の鋤^壞る^技。老^圃同^か。宣^の。身^不助^言の烏^許る^が。

八洲傳加轉卷之三十一

三十一

龍の路の蛇と知りぬ。那妙椿が幻術を破りて捕捕まき欲せしが先他が来歴出
 処と具ふ知事あるべしと云ふ。親兵衛欲ひてそ亦亦は死に珍説あるん快々聞き
 欲しけれと云て膝を找れり。孝嗣も亦うち合笑はて俱に耳を傾ける。登時政本は
 低めて然る又一條の昔話と云へり。大江主豫より傳せり。思ひ合ふゆも傳
 せり。抑安房團長挾郡富山の麓より程遠くぬ村落の犬懸と喚做き寒村あり。その
 村這名をゆり。以前文安四年。丁卯の秋伏姫七歳少りぬ。比件の村の貧しい
 民の字と枝平と喚ぶが。年来畜ける牝狗あり。此秋を狗見子と産けり。只一隻子
 少く牝狗を生れては。幾日も麻ざり。有一宵その母狗の狼小吠れてけり。雛狗の目
 だふ開くを蒙るる比るれ。養食べもあづり。奇に夜毎に牝狗の富山の方より出て
 来て乳を乞ふ。雛狗も子も餓も死に。最大に。一時の事。遂に瀧田徴れ
 義実王は寵養せられ。八房の犬即是。是より。八房の母婦王梓が後身。

八里見小害あり。復行者の利益あり。王梓が悪火然る解脱。八房の天も
 亦伏姫讀經の功德あり。俱に菩提入る。初八房の天と云ふ。狸見あり。亦
 玉梓の餘然。縁あり。是の。得脱。今も里見殿。怨めり。當初
 義実王八房の犬と見ゆ。折狸見の乳を乞ふ。事任々と听ゆ。字書不
 狸の大小。後八里見。若る。是里見の天。死に。因縁あり。宣ひ。只大。鐘
 愛して。狸の事。竟向れ。狸見の亦。功を。独の。禿祠を。造り。祭ら。と
 思ひ。小然。沙汰。され。啖醋。堪。富山を。立去。上總。團夷。瀧郡。普善。村。の
 程遠。及。諏訪。の神。の社頭。老樟。樹。の榎。栖。那里。在。三十。餘年。便宜
 も。あ。團。王。御。父子。小。宗。と。做。さん。思。ひ。王。梓。が。餘。然。不。惹。是。宿。因。の。悪。心。を。死
 う。て。ひ。た。り。藤。高。個。の。愛。妾。と。喪。ひ。哀。慕。鬱。悒。堪。ざ。り。折。他。の。虚。不。滿。入
 八。百。比。丘。尼。の。綽。號。と。冒。す。妙。椿。と。の。女。僧。の。変。化。遂。に。素。藤。と。哄。誘。する。非

分の婚嫁敷其の素藤酷く園主と恨まら。叛逆龍城兩度小覃ふ其今日迄も。
 るれ初妙椿狸見の神女の威靈と憚り軍陣出共位より一素藤藤們が死と既さ
 まく遠く追放せられ後妙椿のれも亦我妙術にて義成主と大江の胸に狂て素藤
 們を救ひまご実一後う説語りて素藤藤們のれもあひけりと思ひ感て園主のれ
 身の慈善と恩とせむ泣下過は熱い微りる并の小人の本性の園の安危と定ら
 最も大事の所初る小良将勇士のふま。胆鬼と妖怪小奪るよりあはれや君子
 と欺く一陷るるのれも信るとまのれもあはれと奴家の思ひはるか然に又妙椿の那反間の
 邪術をもつて身他郷へ退けより敢又憚らるるに元徒の軍師は做りて寄隊破
 る風を起て沙を飛一樹を覆をその勢に當るるに嘯く虎より烈かりり是も亦
 然の所以あり他の羅龍の玉と持りて玉の腹より頭れも方寶貝へ上古無仁天皇の
 元時丹波園来田郡の人とせむ。羅龍襲が家の飼ける犬の名と足往と喚做あり。

このぬあひひる。立地お喰殺去一おの絡の腹内ハ八咫瓊の勾玉ありけり。羅龍襲の
 よと訴京して玉と朝廷お獻りぬ。這玉今ハ石上の神宮ありとる。書紀無仁紀小載
 られる。無仁帝の元時より。今後土御門院の。小至て千二百許年。世ハ戰國あり一悲さま
 信る。珍奇の神宝も馬蹄の塵も埋れり。有と知る人稀り。一妙椿狸見を見出りて
 只顧愛玩秘藏あり。初羅龍襲が無仁帝へ獻りける東西のれも名つけ羅龍襲の玉と
 ぬ絡と狸の等類あり。穴居と雨を避け。よく風を知る者あり。昔も今もその皮を鍛匠の
 吹草お用ひる。風と出まの理あり。妙椿狸見の玉のれも呪文と唱て勁風と起。素極ゆる効
 験あり。遊莫那身ハ絡お等し。狸見でゆるる心と忘れ足往の大小殺されけ。絡の腹
 より出玉のれも賊徒と資け。寄隊を破る。寶貝ふまぬ。後竟ハ大士お對治せらる。死兆
 ると悟らる。宣ふ嗚呼の所初る。然に狸見の智淺くて野狐及ぶ。是はも由ても知
 られる。身他を對治し。件の玉と獲る。後ハ必用とあはれ等閑とあはれ。妙椿

未歴出処の崖畧を倚る杖又館山の城まうち入る初の度と同か非如身武
 勇どり。素藤の緝捕易くも。妙椿の少知れて他を走ら。争何せん信
 れ敵不知せむ。悄入の妙とまへ。折悄入る地方の館山の城の副門の箇様々の
 目標あり其処の昔の城主が地道と穿ち造為る。一條の脱路の後千史の石とて前後の
 口と塞だち。今開と知れる人罕へ。身が萬夫の筋力あり。命除る容易か。其首
 より入ると欲折箇様々。小做ぬる。毫も筋力を用ひず。出入極めて隨意る
 先後堂も赴きて妙椿狸見撞見。力の征まら。折箇様々。信ふ
 妙椿が邪術忽地破れて他が腹心黄緑くる。玉梓が餘寇解脱せん。然と信
 妙椿が摠身朽木の倒る像。本形とあらま。則是玉梓が臨終の悪念塵も住れ。も
 煙の似滅亡て後々までも祟る。是の證據をんか。併役行者の利を無漏れるより。も
 あり。眞助の仰せあり。あ之餘のの告せも。身の智計武勇の功あり。疑ひる。と

親兵衛とて。且感。且然。勇氣日厲。彌増。腕を憶。扼して。寔は。有縁の
 忠告。機を查。隱微。明告。言皆。意表。小出。と。听。我身。今。富山。在。伏姫
 神の示現。教諭。を。兼。小。異。老。媪。素。是。異。類。と。の。智。廣。大。喜。津。原。者。
 具。敵。地。の。案。内。側。聞。我。亦。大。江。主。後。千。里。と。支。蒼。蠅。の。驥。尾。附。く。功
 功課。よ。天。帝。の。恩。救。と。兼。り。け。よ。狐。龍。の。做。り。信。今。升。天。と。下。界。在。る。も。
 遇。別。の。時。を。來。れ。と。告。る。孝。嗣。あ。る。を。什。麼。狐。龍。と。何。苦。の。の。狐。龍。の。做。ら
 る。や。と。問。ハ。又。親。兵。衛。の。俱。小。眉。根。と。ち。類。草。め。我。聞。龍。の。神。物。之。和。漢。今。昔。世。の。人。々。
 名。知。れ。形。見。然。と。唐。山。の。史。傳。昔。秦。龍。氏。龍。と。屠。り。后。羿。龍。と。射。る。の
 説。中。是。と。抱。朴。子。の。蛇。龍。と。二。種。の。蛇。千。載。と。麻。生。の。の。化。と。龍。の。做。る。い。れ

陸佃の埤雅の非と辨を龍のあつた龍と蛇のあつた蛇と化して做れる真龍を
 龍と亦稱て龍といひ僻言を以て因て我仁按考の人の龍といひ素の龍は一
 物も星を龍と馬も亦龍と稱て蛟蛇蛇蜥蜴といふは種類異なる真の龍と
 去く直の龍といふは蓋星氣とまふ不度勿論形状ありて飲食するのあつた天地陰
 陽二氣の升降雲と起一雨と降一春見れて冬蟄を是を名づけ龍と云和名豆と
 起の義も二氣の發起を取れるの然る世の龍といひ蛟蛇蛇蜥蜴の種類
 の真の龍ありあつたもあれも蛟蛇蛇の老るの形状画る龍に似たり是を直れ
 龍とぬも化して龍と做るとも據るはあつた狐の類も化して龍とすとい説の
 酒家寡聞多しを心知も具教よまほと問へ政木の點頭で現真龍の又説の
 古人未發の明辨也學者の惑を醒まふ足れり奴家龍といひ一名同して物異
 真の龍はゆるる陰陽二氣に従ふて雲を召び雨を行は然るの龍のあつた狐の

その形状毫も龍に似されとて狐龍の説を疑ひあつた惴りから親を信て疎と非とある
 まるる壁言田鼠と如鳥と禽獸の差別ありて状も大く異なるも田鼠化して如鳥
 ると月今たえも死又朽高木と螢火と非情有情の差別あり形の似るものあつた腐
 草化して螢も亦狐龍も亦これと同證文ありて讀むは狐鳥許多と聞ゆねといひ
 徐徐とら咳免て按考も奇事記曰驪山下の白狐有る常山下と驚擾せり人
 祛除と能り一唐の乾符の年其白狐忽一日温泉を穿て自浴まふ須臾の間
 雲蒸り霧漏れ狐の則白龍と化して天を升りて去り後陰晴を折山本此人
 白龍の山畔を飛騰ると見ゆけり如此る事三年ありて忽一老父あり臨夜毎山の
 前を哭けり人伺て故と問へ老父答く我狐龍死ぬ故に哭く余といふ何ぞ狐
 龍といふや老父の亦何の故に夜毎出て哭くやと問へ老父答て狐龍の身狐に
 化して龍に成りぬると化して三年ありて必死す我狐龍の子といふ人又問て狐に何

と能化し龍とされる。此狐の西方の生氣を奪て生れり。因て全身自色
多し。衆と遊ば。近處の狐と居る。驪山下の託き。千餘年後。偶雌龍と合り。上
天を知らず。遂に命と龍と為せり。亦猶人間の凡夫より。聖人となる。且と言訖。滅
此と諸記の随誦する聲。清亮なり。跌を。理義分明。小つえけり。

作者曰狐龍の事。格致鏡原卷の八十八獸類狐怪の部也。又奇事記と援て

これを載り。作者の他り設けし。昔より和漢の博士龍を辨する者多し。其

狐龍及び見を故。借用を看官原文を知るも。亦復これと合見べし。

登時大江親兵衛の孝嗣と共侶。しばらく所果。且羞且然。政木の老媪演

賢者の一字の師を。其の思ふ。汝の素是異類。博識視聽を

敬。我よく及所。及又逢。自の六詞敵。今遇て。今別

れ別れ。遇り。薄縁。慨。不。俱。孝嗣。嗟歎

あて昔の姪母假。王從。又我再生の因。人との思ひぬ。その勢。以て。書

さ。盡る。値遇の縁留。難々哀別の涙。雨の雲を召。龍の身を。果々千

尋底成。大洋。潜る。後長。命。三松。終る。尚。忘れ。春秋の折々。母

訪来。悲。如。政木の。慰難。一霎時。目水。洗衣の袖。と斂

めて。嘯。和子女。宣。非如奴家。在。大江主。從。七個の

俊傑。と友垣。結び。幫助。仁義。德澤。世。稀。那明君。仕。名。成。竹

薄。誌。され。ゆ。家。與。今。と。三松。の後。上。總。團。夷。瀟。郡。雜。色。村。石

降り。石の形。蟠。龍。似。を見。我。成。果。と。知。願。大江親兵衛

主儘。和子の。上。直。過。向。胆。の。心。足。幾。番。叱。懲。杖。を

看。武。夫。の。方。道。才。か。今。の。時。名。殘。惜。外。面。走。り

出。松。枝。を。掛。け。閃。と。立。敷。と。見。れ。蜚。鳥。の。似。く。身。と。翔。ら。程。近。く。収。不。刃。の



八傳九軒卷十五之十四

六九

文英堂藏

ちすの ちすの
池水と巻騰
あゝ異龍洪
雨を降せ



政水茶店親兵衛復與孝嗣態

八傳九軒卷十五之十四

文英堂藏

池へ水と跳入りけり。時小雲湧り雨降そ。勅風天地を裏して黒白と別ぬ震動
 雷電常闇ふ似たるそ。中龍火の光を向上れば白龍雲間を顕れて首を伸つ尾を
 垂れり。卷を騰り池水の雨とるも疾に勢ひ不蓮葉断離れ細鱗放下さる。え
 足下小踊るも身りけり。折親兵衛と孝嗣の狂風暴雨の老媪が茶店の蔭責
 登見茶器もも東西一箇も吹攪れ雨を避る術をければ松の樹蔭自身を
 倚せて俱小雲存りて。小奇の最も劇し大雷雨の只這松の四下の一滴も降
 ざれば幸ひわづ濡もせ。衣も濕吹氣を受されば亦狐龍のあらあつての所り
 べと感嘆も。雙立ち在りける程お姑且一雲斂り雨歇て風雷餘波もかりし長
 四月の天晴りて夕陽西尚残る然親兵衛も孝嗣も狐龍の奇特疑ひ釋て
 送他路を去り路の乾く等程親兵衛傷を治りて喃河鯉生剛才化龍の升
 天と觀る思合事事そ昔年吉吉の聞戦破れ結城の城郭没落の折我老

侯義實朝臣當時尚弱冠あり。里見又太郎と喚れり。送訓後九死を免れ
 氏元貞の主従三騎安房と投て走りぬ程お落城より第三日の黄昏時侯相摸
 團御浦郡箭採の浦お船と討め。津を急ぎぬ折白龍海底より顕れ出て南を
 去り騰り去り。ほる祥瑞おれ義実安房お赴ぬ。幾日もあつて神
 餘ら與義兵を聚合て逆臣山下定包と誅戮し。その後朝夷郡平館多麻呂小五
 郎兵衛信時が約お背けと討夷け最後お安房郡館山の城主安西景連と戦
 克て景連頭顱と授けり。義実安房と平均一四郡の主おるおは這一條の
 舊話の酒家富山お存り。時伏姫神の示現およて粗知ることおる。有徳今
 我們的孝嗣和殿お舊縁お狐龍の升天と目撃も。且その龍を辨論おけ。も
 新舊君臣一致のお。且義実朝臣の箭採の浦お龍の升天をえぬ。吉吉元
 年四月十八日と欽定又我們が狐龍と見。今日文明十五年四月中の二日

その日の聊達へども共中旬之その月は同日夏の暗合是のころは昔年我老侯の討滅
 果さき欲しぬ叛賊甚田素藤の上総國夷瀟瀟る館山の城在り安房と上總
 と異なるれども共館山と喚做たる城の名も亦同裕と思ひ恰をありの造化の照對のふ
 似り事吉兆とるをば秋兩國河を快退れ船を央て上總へ渡え和殿の意見
 甚摩をやと問へ孝嗣再議及るを聴くをば前後同瑞討論合考寔ありや。這
 回も大功疑ひる一卒の俱れそんと東と投しとて立立ける介程大江親兵衛の孝
 嗣を相伴ふ兩國河原へ赴く程那裏雨のゆききける秋大地の乾る隨ゆる歩の
 運び障りるけれ思ひより申す來けり故に日長は四月の天の暮んとし暮れ船で
 這兩國河の岸邊る船公の宿所呼んで憇々と相譚ふ船公答く上總へいんと
 欲りぬの只今の風も強く潮も亦宜しくも意ふは遠真夜半の必追風あるぬ波の

上のりも船で世渡る我れも自由なるぬが常るれば急るとて争何かせんやと形もど
 奥の坐席あり那裏で甘坐ぬぬとの早の商量敷き親兵衛心焦燥て外も船公も
 やと思へ船で立去り又孝嗣と共侶便宜の出船と申す皆の々と相似く困下果は
 亦初の長宿所へかへる魚村の柳風麻酔て蓑衣乾走門の夕日影若屋の煙天の
 滅く友呼ぶ鷗浪浴を或は兼葭の戦々魚と踏む白鷺見れば一葉敷系械の頭
 ち羽を曝き鷓鴣在り長汀弓の像く入江の續は浮洲前似る水濤建の仰て西
 南を眺む夏の富士のまを装と更ぬ遥く東北を省れ翠の波尚霞を殘せり
 武総兩國の都會あり海船多猫と却し商魚那這軒を比せ世渡り易に福
 地あるありけり然る又這河邊の三觀鼻と喚做き出崎あり什麼何れ由米を這名
 ありと原る者官知らる所あり約莫這水際翹て親るとは右富士左の筑波前
 葛西の曠野も杏洲とく障るぬく只一覽を三箇の眺望あり因て土人字しく三

觀鼻と唱へる。鼻の即方言也。猶出崎と云ふ。然り。其の五崎。六千里鏡と云ふ。茶店
 あり。飯と酒と鬻く小店あり。邊鄙に似げ。執闘ひる。折う人許。立取來合。蝘見の
 甘に附く。像親兵衛と孝嗣。今這出崎を過る程。開と那る。と訝し。心も立
 寄て。稠人を極分。找と近。見ると主僕と。け。老壯。兩個似而非。技とて人を
 奪。之。膏茶と賣。欲。逆旅經紀人。を。中。年齢。六十。より。多。ん
 と。東人。年。歳。二十。有。餘。の。從。者。る。べ。王。僕。俱。遠。山。形。多。深。木。綿。の。夾。衣。と。ち
 披。り。て。帶。と。白。榜。の。犢。鼻。禪。と。高。く。駈。系。引。結。び。て。跣。足。を。雙。立。る。地。不。畫。と。土。色。の
 像。り。を。備。ふ。天。朝。抽。力。鼻。祖。野。見。宿。禊。家。秘。神。方。撲。傷。折。損。損。瘻。妙。茶。萩。野。上。風。相。傳
 精。製。の。干。言。と。寫。し。幟。形。る。標。紙。の。招牌。を。真。砂。地。推。植。て。寄。來。人。を。寄。來。人。を。寄。來。人。
 甲。竟。這。逆。旅。經。紀。人。恁。地。人。を。稠。く。甚。る。技。を。做。さ。あ。ん。そ。の。次。の。回。解。分。る。と。聽。ね。か。り。
 南。總。里。見。八。犬。傳。卷。十三。之。十四。終。

南總里見八犬傳第九輯卷之十五

東都 曲亭主人編次

第百十回 西國河原小南客北人小逢ふ

却説又那逆旅經紀人の取來る人を寄來る人。扇子を推啓して。曾下を徐や
 の。うち。扇。だ。々。在。り。け。程。既。没。る。日。見。て。遠。く。扇。子。と。疊。み。犢。鼻。禪。刺。來。て。
 找。ま。出。恭。く。衆。人。の。うち。向。て。東。西。々々。南。北。係。て。恁。ま。辱。辱。光。臨。と。賜。ひ。ぬ。西。方。の。君。子
 連。聲。一。召。れ。よ。鳥。許。が。う。の。ひ。ふ。小。可。の。旅。より。旅。の。世。渡。る。の。事。ひ。ふ。當。所。へ。初。度。の。見
 參。然。も。今。日。より。賣。買。の。用。場。で。は。い。ふ。知。せ。ぬ。ぬ。も。よ。か。る。べ。と。の。う。ち。扇。子。と。拔。出。て。逆
 舟。の。印。く。指。示。し。て。是。小。建。立。る。招牌。を。て。崖。畧。の。知。り。召。れ。ん。小。可。家。傳。の。膏。茶。の。抽。力。の
 用。祖。と。世。の。野。見。宿。禊。の。神。方。也。撲。傷。折。損。損。瘻。即。效。也。と。風。の。塵。埃。と。拂

ふより速く價へ一盒永樂十文貯置せぬ。怪我不慮瘡小醫と招き重宝此より宜く
 死る。又只撲傷のまゝに癰疔瘡を名の腫瘡痺凍瘡刀瘡も用れ亦妙却費
 買の御愛敬あり此も弟子萩野下露と敵も立しと揃力の都合と電覽余款もらん小
 可も其昔年壮より一時の揃力と好むひり小既筋力衰へてのわいあふべいも。あ像を
 ぞの左右も併りいん暑も今我年歳小似てを暮景小及ぶのう幸ひ夕月夜を
 天小一朶の雲もあければかきと急だのさる刀袷達る存在して拙技と亦肉せ先も揃刀の來
 歴故実を聊演速仕りんとらつやと退れて発見小尻とち撰て扇子と竹中ち咳は抑
 揃力の盪傷ひむ。無仁天皇即位七年當麻邑の勇悍士名と蹶速と喚做まあり。その
 筋力角を毀れ鉤を伸へ冉を擧ぐ天下小箇として敵もうと争えり。天皇の美と知
 食倭直の祖高尾市と勅使とく。出雲國の剛力士野見宿祢を召上り
 隨即當麻蹶速と揃力と令て獻覽あり。野見宿祢の煨煉也。筋力も蹶

今馬奴の
 馬を置りて
 不てそよと
 最腹
 相撲の腹
 の大なるふ
 ゐぞふふ
 送れり
 和名タフ
 積鼻禪ハ
 和名タフ
 サキ合儀

速小捷りけん蹶速竟小蹶小れ脇骨骨踏折れて叫びもあま死でけり。宿禰公の
 恩賞小蹶速が地を賜り。そ依皇都小置れ朝廷仕なりぬ。あそその米邑の
 腰折田と喚做ま村あり。蹶速が舊地をう。無仁紀小載せられる本文小據推量
 ろ。當時の揃力の足を抗て相蹶ると言とせり。その後天武天皇の十一年秋七月隼人
 來朝あける折阿多隼人と大隅隼人小相撲と令とく獻覽あり。大隅隼人勝ると亦天
 武紀小載られ。是より後世々の朝廷相撲の節會と引れんとて諸國の力士と召ま部
 領使と唱へり。その力士等小近衛小隼と拔萃と最も小補。次を腋も助も小
 補。多月勝れるを拔ると。後の相撲小推當れ。最も小大関腋も小関脇助も小結
 拔も小即横綱傳受の傳小似と。然る中葉小至りて。最後小執ると関といふ。関を
 所云ち止め。名目あり。あまの。後世轉じて大関の稱呼あり。昔ハ相撲人を分ち左
 右と唱へ。東西といふ。且その為体積鼻禪の上小狩衣下袴を着。劍を挿し立合ふ

況當時の武士も東鑑を檢する正治二年五月二日羽林頼家卿小壺の浦
 遊覽の折常盛と義秀と兄弟臨時の相撲あり常盛既小負んとける江馬殿
 時坐と起推隔々勝負を分至持中てけり常盛衣裳と着る不及賭物小牽
 たる馬ふち跨りてそつ逐電あつと見えり又宗尊親王將軍より時建長六年
 閏五月朔日執權北條時頼朝臣の沙汰とて御前小控々相撲の勝負と召決せ
 ら陸奥掃部助奉行より相撲人左右十名皆在鎌倉歴々の武士なり
 勝る者持る者の御前小召て御劍或は御衣と賜ふ出席の雲客これを執り負
 たる者の堪否と論せ大益とて御酒を賜ふ各三度浮られけり御一門の諸大夫等この
 酌ふるん連れける凡奥あり亦感あり時の壯觀なりと亦是載て東鑑に在り是より以
 降當代まで相撲の賞玩衰へるれも近世の事ハ刀袷達知一召べられ口状ハ是ま
 徳ハいへも小可ハ定ハ筆文七目られ古昔の事を考へく轉る力ハ少り一時従ハ

天朝の相撲
 唐の相撲
 事大相撲
 仁紀の相撲
 後記の相撲
 又唐の相撲
 以來の俗語
 小打掃の
 及緑牡丹の
 又んち

師傳を口と安似あぬの漏るるも錯るるもあふんえをのり既小日の暮ハハ青曾の
 打止弟子下露と敵もふまて立合の御覽入見せれ下露快立と喚れ心と
 答々衣脱棄て立對ハ上風馳て合組て刀袷達も亦尙せ他が徳々の用て推んと
 合組て此其の彼ハ亦其のものと投て起して合組む修煉老相
 撲有かきは身身の動止早ハの秘術を惜まそ其趣を盡る看官憶ハ聲
 合々吐と答る感嘆ハ一霎時ハ鳴も已まり登時萩野上風ハ脱衣と
 又被て又衆人ふち對ひ目今尙せり老人酷く骨と折り願ハ膏茶を
 召れハと問ハ下露も衣被て帯引結び貝龍の膏茶と堆高く積乗る
 盆と合々衆人の身邊ハ近ハ立向ハ刀袷達家傳の膏茶を召まぞ撲傷折
 傷損痰刀瘡ハ奇妙ハ癰疔瘡ハ腫瘡も奇效ハ召れハと呼掛

呼拭而三遍那這とるくら繞りて。只顧小請薦れども。威遠巡を去ぬるの。買んら者
 あらるれば。風望を失ひ。憶せ聲とゆの。彼下露閣ねた。咱們當所へ初
 来。け。生活の用もるれば。殊更骨を折。衆人連を慰め。人の山成。群集も似
 る。繞一。盒十文の膏茶を。買入。た。然り。その情。閣ねた。日暮。今
 宵。旅宿へ。立。明日。他。御。走。蓋。と。吐。下。露。も。腹。立。小。嘖。口。氣。ち
 る。持。稍。退。んと。せ。程。前。より。衆。人。と。立。雜。り。見。て。上。風。が。為。体。を。似。而。非。技。る。ま
 と。感。思。ひ。親。兵。衛。様。を。孝。嗣。小。目。を。注。ぐ。找。と。せ。あ。や。く。と。喚。近。け。我。も。前。より。這
 果。在。り。て。汝。達。が。技。藝。を。觀。る。小。相。撲。の。故。実。も。杜。撰。の。も。立。合。も。亦。法。不。稱。以。老
 人。史。多。く。ぬ。た。修。煉。精。妙。賞。ま。る。猶。ま。り。の。并。と。料。も。見。り。つ。り。空。骨。折。り。只
 我。已。ん。我。の。膏。茶。と。皆。買。ん。む。什。麼。何。なる。の。價。を。と。問。れ。て。上。風。笑。し。け。下。露。が
 答。へ。も。も。遠。く。立。迎。へ。る。も。辱。は。花。主。の。り。ま。け。り。今日。推。力。る。膏。茶。の。百。盒。許。

の。い。ん。價。の。永。樂。壹。貫。文。も。事。足。る。く。い。も。然。る。り。御。用。も。あ。下。維。一。盒
 召。る。も。百。十。數。入。る。這。内。中。も。一。個。の。花。主。と。思。ひ。な。れ。百。目。の。上。や。下。露。一
 盒。ま。り。も。と。を。親。兵。衛。様。の。あ。げ。否。と。その。膏。茶。の。三。小。拘。り。の。あ。り。も。人。御
 覽。の。相。撲。の。勝。者。の。纏。頭。の。平。民。も。亦。賞。錢。を。取。る。と。俗。命。け。花。を。の
 多。その。膏。茶。の。左。ま。れ。右。ま。れ。和。主。が。技。藝。の。あ。り。の。ゆ。へ。花。を。合。せ。と。い。も。懐
 とも。圓。金。一。枚。會。中。と。卒。と。遞。與。と。上。風。の。呆。白。く。左。右。多。く。受。ま。る。又。意。外。の
 造化。の。小。可。一。儒。士。听。も。と。も。士。已。と。知。者。の。為。不。死。女。已。と。知。者。の。為。不。親。と。知
 り。知。已。と。思。ひ。なる。刀。袂。の。恩。賜。と。云。云。と。推。辭。直。ま。い。倒。入。人。を。知。る。者。の。似。て。及。て。を
 礼。ひ。ん。れ。も。其。の。と。ま。り。と。辭。ふ。と。親。兵。衛。推。辭。禁。め。任。ま。り。の。東。西。の。口。誦。要。を。
 君子。の。断。金。の。交。り。路。上。の。人。も。知。音。と。思。へ。蓋。と。傾。け。故。昔。の。如。し。豈。白。頭。を。新
 多。薄。交。り。不。慣。れ。と。上。風。推。辭。ぬ。且。感。且。歎。ひ。を。述。り。ち。り。收。れ。下。露。も

亦欲びる。盆見の乗る膏茶を。終合を親兵衛の遞与えさせ。程の尚立稱する。衆人の内中。一個の大漢あり。忽地訛聲振發し。かをれねいなり。あつと喚禁め。隊をよめ。土苞の身遣の近つ。大家俱の訝り。齊一見り。夕月夜。紛ぶる。あつと。己の。大漢の爲体面。黒く眼圓の鼻の依り。左右の肩の厚く。鬚髯の。包れ月額。延て春山の結縷草より。猶敏系く。鬚毛乱れて。百足の蜈蚣と申す。體た。なる。異なる。身。洗染の栲の夾衣を被り。片襦と叩く。端折の白栲の。積鼻禪の高。已時可き。前垂俗の結。做し。直木理の梧桐の下駄の小肉狙の似る。穿。腰。緋の縮緬の圓括の細帶。右へ斜に結び。左の肩の箕盤絞の。巾。拭し。合。直項の。絞。ねて。揺動。酒氣。人の鼻を穿る。の。半。醉。半。醒。人を物とせ。けり。地方。実生の勢。以て。怒り。好く。争。煩。惱。口舌の。祟。鬼。の。蠅。蜀。二。國。の。城。隍。狄。と。思。ひ。怕。る。衆。人。の。事。り。で。事。ぬ。と。詰。め。も。見。果。れ。ん。も。さ。か。か。せ。立。ち。ゆ。

去りて。そ。存。在。當。下。件。の。大。漢。の。眼。を。睜。り。向。臍。蹠。か。上。風。さ。ら。對。這。奴。甚。大。胆。之。若。誰。許。可。を。受。て。這。里。出。張。賣。買。を。ま。や。約。莫。這。漢。父。街。頭。也。始。て。生。活。を。ま。や。客商。必。先。咱。們。の。樽。を。餽。り。或。の。周。折。を。送。り。ま。さ。う。後。の。生。活。を。ま。や。我。ま。さ。知。ら。ぬ。經。紀。見。銀。賺。ま。ま。づ。も。あ。ら。ぬ。の。故。我。始。り。衆。人。を。敬。言。て。若。膏。茶。買。せ。ば。多。那。國。の。馬。の。骨。や。牛。の。屎。や。ん。知。ら。ぬ。も。見。る。あ。は。足。り。似。而。非。技。金。を。取。る。鳥。許。人。あり。そ。亦。受。る。該。る。快。の。金。返。さ。さ。と。嚼。着。像。く。罵。る。上。風。ゆ。て。毫。も。挽。ま。ま。身。を。構。ら。ち。向。ひ。て。開。き。わ。ら。さ。さ。和。手。地。方。の。老。俠。も。あ。れ。咱。們。の。他。郷。の。旅。客。も。れ。が。知。さ。ぬ。争。何。い。せ。然。る。人。情。あり。と。も。銀。を。賺。て。後。の。を。欲。ま。隨。贈。り。も。せ。ら。然。る。と。和。王。の。外。醋。氣。也。人。を。禁。せ。我。膏。茶。買。せ。ば。非。道。况。那。方。様。の。恩。財。と。和。王。が。差。配。され。い。さ。し。て。返。さ。ぬ。抑。和。主。何。人。を。問。せ。も。果。は。大。漢。の。い。さ。し。聲。と。并。立。て。噫。老。老。奴。が。暗。く。淺。草。寺。の。觀。音。の。い。さ。し。知。る。者。あり。と。誰。我。名。を。知。る。ん。快。垢。合。耳。屎。

櫂櫓と聴聞せし武蔵下総西園河の西の岬畔に隠れる向水五十二天と喚做す
 豪我が事親の時より任田河同し流れ釣漁の生活の志願のまゝに聞諍の裁判色
 情の受授一旦人の憑き事我撮合て成さるるもて我下風立ち乾見乾弟を
 斜りの量り其をりも難るも容易く量り盡さるるも中も特勝れん枝獨鉗
 素衣言と喚做す我肉身の弟也船を馳ひ山を抜く精力を誰を知らぬや約莫
 坂東八箇國の関相撲を二勝あて立合まるといふと克くもあつた口の本銭の没
 らぬといふに隨の長談義乞見相摸の内合の定ぬ沙汰の涯に憐れむ朽惜
 立合て我と勝負せし快立ちと飽すも罵り罵る勢ひ若れて枝獨鉗素衣言古も羣
 集の中より我と親兵衛より向いて阿侍年少より自身もいふを野村乞見相摸
 一両との金花用や酔興より這云只起りも金より復して快く聞諍の側杖打と
 んどと諛を親兵衛冷笑してあつたあつたあつた我も亦行人なれ地方の私法を知

此の我が船纏どりのこの経紀の合さる和郎們の干る事ありとを素衣言吉
 ばあむ金と和主が船纏でも地方の習俗を破りての祟り脱れぬ敵も覚悟をせよと敦
 圍の上風より喚禁めり各云品のりともその方さの觀場見然も少年多の敵
 吸り天人氣中。鄙語の義理の前より道理の退く自然の勢ひ然る發憤した情由
 あり明日他郷へ走る。下露東西皆拾けよ。旅宿へ罷る。とられ井萩野下露も
 立した腹を横に招牌の干かを搦て抜合んとせし程も五十二天透き走り鬼て腕を
 扱て聲高からん這奴も似る痴漢も乗掛る出入の港に尻の帆揚げて逃れを那地へ逃さ
 ん是を吠と栗螺の似る握拳と振抗て打んとまれ下露のさむと捉禁て衝と跟
 へて掖組と素衣言吐きさへる掖仆さんと背より我む上風推隔て受け柱を
 相挑む四巻の山風品の根の藤揺めり小笹を拂き異なるも上風の年老れぬ素衣
 下相撲の修煉あり下露も亦素衣のあつた技を力剛ければ五十二天と素衣言思ふ似



あしな
 三觀鼻小
 上風乱妨
 二

去推着られて克と合と見勿くね。休を雨聲ぬりま。大家坐と喚れ。群集の中不立
 雜りく巻と握り。五十三太門が。大家の破落戸。四十名咄と嘯。三十二不走鬼
 破竹の勢ひ衆人呀阿と駭。怕ま。素破閉諍そ。とるら。めれた。頼れ。立。噪。だ。て。只。蟻
 子の雛と散ま。像く。往方も知ざるのけり。介程。破落戸。們。の。齊。一。五。三。太。素。の。吉。を
 幫助と競ふ。法。の。突。戰。先。不。找。ひ。群。立。鬼。く。西。個。の。敵。を。打。仆。さん。と。憚。る。上。風。下
 露。の。撥。潛。を。巻。と。避。く。多く。打。れ。迹。不。續。は。破。落。戸。們。の。招。牌。登。見。膏。蒸。ま。で。打。推。は
 河。放。下。して。連。の。狂。ま。中。の。素。の。吉。の。親。兵。衛。を。是。逆。旅。の。少。年。を。思。悔。り。生。拘。り
 懲。り。て。頑。童。の。せ。ま。と。火。急。の。情。態。西。個。の。敵。を。多。勢。不。儘。と。五。三。太。目。を。注。し。あ。の
 時。あ。も。自。若。と。考。嗣。と。共。侶。の。勝。負。誰。何。と。ち。目。成。り。る。親。兵。衛。の。近。近。で。鼓。聲。を。被
 け。左。右。より。腕。腕。丁。と。拉。ぎ。推。倒。さん。と。て。け。親。兵。衛。謙。を。振。解。して。左。右。の。机。ひ。西。個。の
 頂。髪。の。脚。を。一。度。の。掃。り。て。臍。と。掃。り。投。ぬ。五。三。太。の。素。の。吉。の。い。ら。く。逆。放。下。さ。す。

何火と落さけ。當下親兵衛聲高き。毎我名と知む。安房の里首の御内。大江
 親兵衛仁る。若們頑愚。非道の真罰。本事を。威懲。入。其。首。を。退。之。と。罵。り。く
 群。立。中。面。も。振。る。走。り。鬼。の。勢。ひ。虎。の。毛。を。駭。の。像。く。當。る。不。儘。と。打。倒。せ。る。孝。嗣。も
 亦。俱。不。找。て。敵。を。擇。ま。白。打。の。精。妙。組。の。投。は。投。伏。せ。て。四。方。不。當。る。這。那。西。個。の。勇
 士の幫助。上。風。下。露。替。力。始。十。倍。と。既。不。怯。れ。破。落。戸。們。を。搦。机。を。打。倒。し。劇。に。四
 個。の。掃。り。誰。う。一。人。も。休。ま。せ。不。允。せ。く。と。る。ら。逃。水。を。や。陽。敵。の。命。を。辛。く。免。れ。て。一。人。も。あ
 ら。ま。り。介。程。の。五。三。太。素。の。吉。の。親。兵。衛。が。鬼。神。を。欺。く。勇。力。武。藝。不。酷。く。懲。り。て。左
 右。も。水。際。の。四。分。も。着。流。不。儘。と。三。四。町。川。下。より。逃。り。け。然。り。又。上。風。下。露。を。走。る。破
 落。戸。們。を。軒。棄。て。舊。の。忍。み。か。る。秀。茶。親。兵。衛。も。朝。の。地。上。の。跪。居。て。上。風。先。と
 ける。其。の。寔。不。慮。の。災。厄。之。敵。も。多。勢。の。脱。れ。か。と。思。ひ。ひ。御。兩。君。の。御。助。力。を。

素の吉と申すと左右小受て投懲りあり折名吉世のふり肇て知ぬ和君の安房の里
 見殿の御内人大江某主を在ると思へ不審なるも因て尋まると依和
 君の猶大甲小文吾大川甚介と喚做する両個の勇士と豫も知れぬと問
 親兵衛も領と然る大田氏の我外小父の七大川も亦我與同因果の義兄弟蓋
 八犬志一人之原来大甲と大川氏を相識る和主の越後も小千谷の御の逆旅主人あり
 家號の慥る右龜屋次因太史のある名と問回され呆るも眼を睜り顔ら長
 觀し什麼のふし我実名も猜のゆけ音也と嘆唱り憶を側を分
 元の下露も亦訝りて面と津し猶左右あるを思ひけ當下上風の次因太史
 又親兵衛も朝ひて這里侍る後生の小可が相撲の弟子也実の名は百堀卿云
 と喚做する心術老実か機密と洩さるわぬ公意も去る就て不審あり
 去歲の夏大田主の我宿所小庵留の程眼病の折をとり特更あ身事と云云

と申出づら不埒ありを知らぬの刀袷大江和子の當時七八才の少年あり
 又く侍の時神の躰され往方知るる目今和君を見れば十七七八の少年あり
 武藝力量九丈あり備別少筋の御舎弟といひ問へ親兵衛合矢と疑
 惑のその以るわも酒家年四才の秋必死の火厄あり折過世の母と系も伏
 姫神の眞助のよき志ありのそのまそれより七今茲も六稔安房の富山在
 てその如く身長丈心術大人備へ仙境餌某の故る然神女示教ふより
 我七犬士の上は又叟のの粗知りて逆らざるもあどと叟の不測の
 穴窮厄あり片貝三嶋郡の獄舎敷糸れとる春正月某の日未見の由縁の知
 助のよき免る死すも皆是神女示教せられ知ることこれ我も亦故の
 近曾出世と許され姑且國主仕へ小後の事を知り知るの尋問へべく
 猶我も詳の解示さる思へも這里も秘密を談下とてこの孝嗣をえと

喃更我俱なみよりわれら。這一路人このみちのひと。犬士いぬしの隊たいありぬる。忠孝ちゅうこうの一ひと筋すぢ士しや。名な孝こう嗣しと喚よび做せる。浮世うきよと潛ひそまり。あれあれの緩ゆるや。あそそ告知あかしする。酒家しゅかの火急ひきゅうの大事だいじあり。今宵こんや水みづ路ぢと上あ總そうる。館山くわんざんの思おもふ。丙夜ひやうやあり。追風おひてと。船公ふねこうの漫まり。甲斐かいの料りょうを。豊とよの遊あそび。悠ゆうの送おく。慰なぐさめ。儻たうの我われ相譚あひあひする。船公ふねこうの宿しゆく所しよに。赴おもむく。出で船ふねと。餘談よごんと。盡つくす。快たく。夜よの。次つぎの。團だん太たいの。美みの。秋あきの。孝こう嗣しの。口くち誼ぎと。舒ゆる却かへ。卿せいと。相あひあひ俱あひあひ。親おや兵へい衛ゑいの。後のちの。程ほどの。夜よの。河か水みづ清きよの。夕ゆふ夜よの。白しろ書かきの。如ごとく。明ある。けり。介けい程じやうの。大江たいかう親おや兵へい衛ゑいの。孝こう嗣しの。團だん太たいの。卿せいと。相あひあひ伴あひあひする。船公ふねこうの。宿しゆく所しよに。赴おもむく。又また悠ゆうと。談だんと。船公ふねこうの。追風おひてと。船公ふねこうの。奥おくの。一ひと室むろの。病びやう人の。次つぎの。坐ま席せきを。夕ゆふ饌しんと。まわ。女めの。誰たれの。在ある。案あん内ないを。女めの。婢ひの。あ。燈とう燭しゆくの。親おや兵へい衛ゑいの。門かどを。奥おくの。坐ま席せきの。請こ請こ。餼けいと。親おや兵へい衛ゑいの。首くびの。孝こう嗣しの。團だん太たいの。卿せいと。和わの。飽ある。ち。啖たんひ。と。蕭せう

中ちゆう相さう譚たんの。程ほどの。親おや兵へい衛ゑいの。身みと。起たち。重おも依よの。透とお向むかの。隣りん室むろを。偷ひそ看みる。旅りよ客かくの。只ただ一人ひとりの。衣いと。被おほひ。臥ふす。髪かみ頭あたまの。才さいの。熟じゆく睡すいの。枕まくらの。行ゆ燈とうの。火ひ光ひかりの。幽ゆうの。余あまの。入い影かげの。身みの。圓まる坐まの。か。入いり。却かへ。孝こう嗣しの。團だん太たいの。卿せいと。其そのの。示しす。送おくの。聲こゑを。高たかく。登のぼる。時ときの。親おや兵へい衛ゑいの。次つぎの。團だん太たいの。師しの。弟あにの。同どう慰なぐさめ。他たの。來き路ぢの。顛てんを。真まことの。知しる。欲ほす。次つぎの。團だん太たいの。亦また折をりを。卿せいと。共ともの。侶りよの。我われの。身みの。來き歷れきの。倭やまとと。詳ある。報ほうの。けり。事ことの。趣しゆを。原もとに。去い歲さいの。夏なつの。小こ文ぶん吾われの。莊むらの。片かたの。目めの。獄ごく舎しやの。數かずの。折をりの。團だん太たいの。單たん敬けい憂ゆうの。極ごくの。合あひ。欲ほす。か。力ちからと。勸すすめ。友ともの。威い德とくの。錢ぜに財ざいの。計けいの。お。る。所ところを。知しる。思おもふ。不ふの。娛あそび。慨あはれ。目めの。程ほどの。次つぎの。團だん太たいの。亦また女めの。房ふさの。鳴な呼よの。善ぜんの。乾かんの。見みる。土つち大たいの。評ひやうの。竟つひの。美みの。里りの。人ひとと。あ。けり。孝こう嗣しの。小こ文ぶん吾われの。莊むらの。片かたの。目めの。獄ごく舎しやの。數かずの。折をりの。團だん太たいの。單たん稻いな戸と津つ衛ゑいの。由よしの。充みつ。奉ほうり。死しの。刑けいの。死しの。或あるの。又また稻いな戸と津つ衛ゑいの。由よしの。充みつ。情じやうの。不ふの。計けいの。相あひあひ肖あやる。罪つみの。囚いの。斬き首くびの。事ことと。濟すまの。件けんの。兩りやう個この。大たい士しと。他たの。御ごの。落おし。遣つかへ。と。其そのの。告つ

るものりか。次國太平信半疑。哀歡みづら判りも。心許る思ふのり。果へ其身も井小隊。既似ら。端る人揚。いふ目。卿がら。歎いて。柱上へ。起れ。便り不。就。誘。み。杖。多。所。因。あ。り。飲。と。今。正。口。の。中。旬。より。獨。情。地。小。東。路。小。枝。と。曳。湯。嶋。多。天。満。宮。詣。折。茶。を。御。座。敷。師。の。物。四。郎。と。喚。做。さ。才。子。不。値。遇。と。料。を。助。助。と。折。り。折。り。肩。谷。家。の。夫。人。蟹。目。前。那。神。社。へ。詣。り。物。四。郎。の。愁。訴。お。よ。り。次。國。太。が。助。命。の。願。い。を。立。地。小。許。容。あ。ら。伴。當。妻。有。復。六。を。火。急。の。使。立。さ。七。越。路。遣。い。り。り。卿。も。開。が。後。不。跟。く。俱。も。越。後。へ。還。り。け。り。却。是。ま。で。豫。より。看。官。美。知。の。る。る。そ。の。線。以。助。と。援。る。の。小。程。小。腹。大。刀。自。息。女。連。言。ふ。中。小。珠。と。鍾。愛。深。り。ける。蟹。目。前。の。東。國。も。次。國。太。を。赦。免。此。懇。望。神。の。示。現。の。よ。う。消。息。町。寧。り。け。れ。も。そ。よ。非。と。多。不。疑。不。疑。不。疑。速。速。因。心。赦。の。沙。汰。を。り。一。日。麻。止。て。肩。谷。家。の。忍。心。岡。の。別。館。より。亦。復。火。急。の。注。

進。り。則。是。別。義。あ。ら。へ。往。る。正。月。二十。一。日。蟹。目。前。那。河。鯉。守。地。の。故。り。自。殺。の。事。又。那。權。臣。縁。連。們。の。物。四。郎。の。大。坂。毛。野。の。鈴。茂。林。ゆ。り。斬。果。され。事。又。毛。野。助。劍。さ。る。大。田。大。川。の。武。勇。の。事。又。信。々。の。義。あ。ら。り。管。領。家。も。那。茂。林。邊。を。豊。嶋。の。残。黨。大。山。道。郎。并。大。飼。犬。村。們。の。襲。伐。れ。敗。北。去。て。高。坂。を。危。弱。の。折。河。鯉。孝。嗣。が。敵。と。柱。て。主。君。と。拯。ひ。り。事。又。五。十。子。の。城。の。折。り。犬。塚。信。乃。の。火。攻。せ。れ。一。旦。落。城。を。れ。も。大。士。の。城。小。據。ら。ざ。り。と。退。散。去。り。事。又。管。領。定。正。主。の。辛。お。て。虎。口。と。脱。れて。忍。岡。の。城。小。在。り。事。且。河。鯉。父。子。の。忠。誠。此。の。至。て。虐。か。る。蟹。目。前。と。守。如。の。夏。修。問。の。錯。誤。を。悔。り。り。自。殺。及。ひ。か。も。毫。も。越。度。を。り。り。と。管。領。肇。て。感。悟。あ。り。先。非。と。後。悔。の。責。を。漸。々。と。告。ぐ。り。那。地。の。急。使。片。貝。へ。着。到。三。番。及。び。小。腹。大。刀。自。駭。に。お。ひ。て。且。その。歎。に。大。き。き。り。死。体。て。由。元。を。召。よ。せ。ぞ。悽。然。と。し。宣。ひ。り。日。蟹。目。自。殺。の。事。那。身。行。き。り。り。と。管。領。悟。り。

せぬいふぞき切てのらるる。是討に大坂毛野助劍考とせえくる大田小文吾
 大川莊介們がらんのか。件の兩個の應心見り去歲の六月誅戮を石濱大塚兩所の
 使者馬加御武丁田豐実們の渡一遣一かけふ件の御武豐実も帰東の途あり
 命と喪い小文吾莊介が首級に腐乱し真偽詳らぬも額藏の莊介が所持する
 西刀の落葉小條ありされ首級も小文吾莊介と姓名同し別人ありと上巻大石
 兩家より意見を演て那西刀と返されあり今思ふ去年這里を誅する必同
 名異人あり。這回毛野助劍の考ある兩人を實の小文吾莊介を然るおも大坂毛
 野助智の就中並難の猛者去歲の六月信濃路を御武豐実と殺果る他が
 所為るんとする者あり今茲武藏の湯島を蟹目前の内意に依り河鯉權佐
 守如相譚れて他が父の仇とせ龍山縁連們を討捕る事情今又思ひ現人
 ありあつるあり是れより再思ふも量表も毛野助殺れる千世の權臣馬加常武及額

藏の莊介們の友我名を殺れ大石氏の陣番丁田町進并中平川庵八郎軍
 木五倍二賊上宮六們が奸詐昔悪任する死後小噂を考るもの乃者尋く證
 据もあれ玉と石とを分別あり。あつ初憎し思ひ額藏の莊介も又大田小文吾も考るわ
 崇るる者あり但他們の豊嶋の殘黨犬山道節が我兄弟也俱謀く管領家と
 危うせの恨む。まのま何と思つやと向れ由元阿とらる。謹て答ふるま。取有
 加はまが辱に御意と承りゆのり。實不賢查るゆ。去年誅戮せれる那莊介と小
 文吾の折も稟上し錯。必同名異人。這回毛野助劍考る。眞の莊介小文吾
 る。今も疑ひるゆ。飲人情考る。ゆ。他們の豊嶋の殘黨は犬山道節が荷
 擔考る管領家と違ひなり。且信乃が火攻考る。五十子の城の聚合一の憎む。似れ
 亦公道を考る。人各忠義の與。他們の都て義士。那常武縁連們と目と同
 考論ぶ。も。我考るも痛む。惜も。惜も。解虫目御前の御落命今

稟も疎函るべし誠也那丸家の毒毒毒。何人縁連們を刈除んとて守如仰合さ
 れて微妙く謀らるる事傳聞の差錯也。怖りて刃伏しぬ。貞烈無二の誠心の
 折小稍見れて管領先非を悔りて後まの御大功と誰う思ひもせざらん。有
 かくの稟を能大刀自り听々涙吐み。然るもその御宗鮮目も東國より來り
 と使价をり。木天蓼丸の御就て久く禁獄の事あり。次圍太もさうも湯嶋の
 神の御示現の罪者者のうり身と神を知らぬ。許さぬ。最町寧か
 書言衣てお母消息此の井の疑あり。ねも。又思ふ。あれ速の沙汰及ぶ。一か
 我程も。五十子の凶妻を。這里も。胸安ら。の。黙止。か。も。
 然も鮮目が生取神の示現と畏れ。命も。那罪囚を放ち遣。去。人の後世の
 障り。も。せん。那次圍太の恙も。て。獄舎に在。其甚。を。問。然。の。美。も。
 稟上ん。と思。の。暇。も。問。れ。も。本。意。も。那。次。圍。太。の。恙。も。あ。る。御。か。り。て

幾番も拷問を遂げり。陳も趣始の差の。木天蓼丸の短刀の船虫と喚ば。賊
 婦が懐小隠一帯を。固様も。の。一。旦。船虫と捕へ折那短刀の次圍太が宿
 所へ送一置たるを。事小紛れ。訴稟。開を。士。二。評。れて。稟解。究。證據。の。され。い
 免れ。と。陳。する。の。ま。い。の。虚。実。を。定。め。難。く。一。昨日。五十子の城内より。東。身。脚。力。の
 雑兵の賣弄奇談と听ゆ。子料事件の實を。那。船。虫。へ。去。歳。の。夏。當。圍。と。逃。去。て
 萍流ひく武藏。司馬濱の邊に在り。積悪の宜訓。て。奸。夫。媪。内。と。共。侶。小。活。き
 ぐ。目。茶。牛。の。角。小。掛。れて。突。殺。され。甘。小。他。們。が。年。來。の。積。悪。を。寫。し。て。あり。是。小。より
 船虫が下野の赤岩小在り。時非義奸曲の支破れて。大村角太郎。追。放。され。更。も。縁。連。小
 伴。れて。下。野。より。武。藏。の。三。俱。小。赴。く。旅。宿。を。縁。連。が。携。る。木。天。蓼。丸。の。短。刀。を。竊
 會。て。走。り。の。ま。で。の。時。初。て。見。れ。ぬ。觀。る。者。都。て。驚。駭。に。怕。れ。て。神。所。初。る。め。り。と。い。わ。ぬ。也
 る。あの。ま。で。の。五十子の城内。歩。く。道。節。們。が。退。去。の。後。守。城。の。頭。人。根。角。谷。中。二

并美田馭菌二門件の船虫媪内首と斬らて高嶽の濱邊へ並鳥たのほほ
 石龜屋次團太の憐む一冤屈の罪を他が屢陳するよりと這那既の啗合せり。又解目
 御前の湯嶋の神の示現より過分く次團太の命乞と做されふ。その返答と那許
 仰遣さる。餘日ありて及て凶妻の報あり。ふ恐れさる。當所の賞罰神佛の宜慮小稱
 至罪なれば民を苦めぬ。心報あり。あつらんと。情地小誑さる。む。次團太を赦免
 あつらぬ。御前の御與。御定は優さる。御追薦あり。む。む。と證と援は道理を演し居
 諫言濃くしければ。然し。雄々たる服大刀自胸の張り弓稍弛と。笠前竹心の直る本性
 思ひ返さ。忍辱の鎧あり。衣の袖を落る涙を堰留難て。現愆あり。あやまち恥しや七
 旬の程遠くぬ。老が身へ解目の貞実賢才。及ぶ。今をなぐ。愚ひ合さる。愚慮。魚目よ
 卒ゆ。次團太。今日速に赦免さ。然れども他が未天其丸。久く宿野藏の措く
 訴より。越度なる罪あり。封内。在る。と許さ。但追放せ。律小稱。ん。這義我を

具から渡。ね。疾々せ。の。ゆ。充。這。愛。言。美。あ。候。の。が。ら。か
 仍ひけり。是も。の。機。密。と。次。團。太。が。知。る。を。さ。り。追。放。の。折。稻。戸。の。若。黨。井。野。井。三
 郎。次。團。太。其。示。し。解。目。御。前。の。御。仁。慈。と。片。貝。殿。の。御。性。直。と。あ。ら。は。る。與。知。さ。る。と
 汝が身を取。過分は。秘密の情由。生涯御恩。と。さ。る。勿。論。御。法。度。と。畏
 と。當。國。の。願。居。り。七。倘。再。犯。の。罪。わ。ら。の。度。へ。赦。され。り。秘。よ。の。美。を。思。は。か。稻
 戸。主。の。内。意。と。と。言。前。條。及。び。次。團。太。听。け。駭。嘆。と。感。涙。の。找。む。と。覚。さ。る。飲。む。を
 述。る。向。も。る。雜。兵。追。立。ら。れ。て。と。約。莫。二。里。許。捷。れ。る。地。方。を。檢。護。の。雜。兵。と。立。別。れ
 片。遠。く。片。貝。へ。か。り。去。り。け。り。介。程。の。百。堀。卿。三。片。貝。の。沙。汰。と。知。り。茶。店。小。嶋。と。結。ぶ。と
 在。る。雜。兵。們。の。か。り。ゆ。程。の。走。り。出。る。次。團。太。と。迎。て。飲。む。を。舒。茶。店。小。嶋。と。携。來。る。衣。兒
 と。腋。挿。の。刀。を。と。遞。與。と。准。備。の。食。箆。と。啓。て。町。寧。の。薦。る。程。却。湯。嶋。と。あり。一
 の。料。も。那。坐。敷。師。物。四。郎。の。帮。助。と。し。る。首。尾。と。告。知。ま。れ。次。團。太。亦。赦。野。井。三。郎。小

きひみり さやまめ のうらうとむる
聞き秘密を耳に示してゐる物四郎と喚做らる大田大川の義兄弟大阪毛野胤智との
勇士より石濱信濃路西所の血戦往日又武藏の鈴茂林にて復讐の事でも那令
上は徳々んとせする随分解知をけし天く胆を潰して原来我思人も大川大田宿因
の武士の隊をとうけり今こそ思ひ合はれ然る縁より頼めども最做らば枝葉を
ひく解目御前の愛の標候と捉へ賞代て身身を救れんやさそくとも良縁
奇遇と感嘆もその終に就て亦憎むに工丈二何嫂との為体箇様々といふと奸淫
不軌の顛末も其の報を次園太思ふ我もさる大阪王の妙術不測の帮
助と解目御前の仁知不遇さる工丈二嗚呼善評られて獄裏の鬼とらん今幸
いふ窮鳥の籠中と成て棲と易るも做さるも阿容々々と這奴們を那終在せる大丈
夫とのばい要をあれと尋思とさる曾の秘密と解目御前と一談及至その義
志とる候へ已も既その意あり情地小千谷立きて共侶の本意と遂て那里へ到

ら箇様々々とその進退を定る解目御前一刀を帯て来ぬれし事足り脱落をせると情
語は謀合とてその曉昏小身装束遠く件の茶店と立去りて烏夜を便り小間
道より連り路次と急だる小千谷と片貝の間にて千々之暇と喚做る一條路を来
ける小夜い三更不過さるけり時高早しと思ふも路傍守る人在野豬菰屋あれ
立寄りと解目御前共侶小夜の深るとさる程忽地小千谷のさよらして伴當張燈を兼
てく這方へ来る者あり又片貝の方より張燈引提て一個這方と臨て来る候あり這那
俱野豬菰屋の邊を過遭ひを他人が張燈の火光を就て相れ紛ふくもの小千
谷のさよらして来た候に次園太が妻嗚呼善評して伴當八と喚做る食客又片貝の
よりかゝる東歸の奸夫と工丈二くれば送ふと張燈の花踊ふと精い嗚呼善先聲を
被て登り主様何と遅かり御里長故老達らち連てかゝる來ぬひも解目御前送され
かこの遅速の料りかるとさる胸の休らぎ立て見居て不嫁て月暮れは顔足

ね。思ひ難く、腕八分袖を俱と迎ふ出立り。この間、土丈二も、馳て近つた立住り。そ亦要きた
 支さるに、知るも、今日、亭午より、猛可片貝の御館へ召出されて、まづ、約莫一响、有餘、
 中、仰せられ、東箱ののこか、の趣、木天蓼丸の盜賊、東路、司馬濱の邊、在り、
 今回その罪發覚れ、那地、身首せられ、任れ、素より、次圍太、那盜賊、か、
 木天蓼の死、短刀、久く、家小藏、措て、許稟さ、越度、故、那身、追放せ、
 衆比、百の、美、を、あ、る、但、土丈二、御用、あれ、姑、且、等、な、れ、を、餘、の、退、り、
 身の暇も、賜ひ、我の、軍、送、されて、俊寛僧都の心地へ、も、れ、罪、わ、る、も、覚、ね、却、り、程、
 ち、つ、下、
 九の盜賊、と、正、可、許、稟、さ、り、次、圍、太、那、盜、賊、さ、り、仕、れ、若、も、疎、忽、の、罪、あ、り、
 付、り、格、格、另、の、御、仁、恕、の、今、番、御、沙、汰、不、及、れ、辱、く、思、ひ、を、り、以、後、と、怕、と、慎、む、
 下、退、り、お、と、叱、り、れて、や、る、年、季、果、れ、も、脾、挽、く、る、小、腹、の、立、が、城、下、の、酒、肆、へ、立、寄、て、

氣附其の諸白の利方を、五六合、塞、
 夜食も一、碗、又、一、碗、飲、り、食、ひ、つ、せ、程、の、憶、も、日、と、消、へ、り、の、鳴、呼、善、い、ち、
 せ、る、好、れ、も、事、あ、り、と、怒、思、ひ、過、し、の、せ、れ、將、有、の、折、の、准、備、を、
 榜、東、め、り、十、兩、金、と、懐、
 里、より、男、子、二、名、俱、せ、る、後、安、く、
 短、刀、の、盜、見、が、東、國、で、招、う、せ、
 う、も、在、る、寤、寐、安、く、
 人、が、倘、當、國、の、
 去、て、
 寔、の、
 擗、捕、

鳴呼善也。土丈二も憶を俱らちあはして鈍りかた何事を宿野へ還りて實中ふ余
 との程ふ風音もあつた。猛雨投石の像く降る。男女二個の女人の敬馬をさう天らち仰ぐ
 見多頭者の日和癖や。降るも星斑點の在り。姑且も必承存ん。この道頭の家を
 濡る。袖を挿頭で見れば。去向の野緒菰屋あり。一霎時那果立取れて。並宿せん衣る
 佛の座五行鴛鴦。某跡躰られて。七草足る。取路傍の存二雨と避る。然らば又次園太の十谷
 へ赴く中途。料も土丈二鳴呼善が。腕八と共侶。この道路傍の立取れ合て。ち相譚ふ
 且那奴們が。ふりよ。所果てて。さ。と深念と。さ。足場と。量り。鞆釘を。濡。身を
 潜して。さ。動静を。規。程。俄。然。と。降。驟。雨。の。慌。る。鳴。呼。善。土。丈。二。們。の。各。先。と

争ひ入る。欲き野猪小屋より。次園太の又出んとあす。迷の勢に猶豫る。憶を撲地
 と撞中の男女兩個の胸前を。左右下と引扱。怒り。無業を。聲。も。劇。く。奸。夫。淫。婦。們
 と。あ。れ。れ。次。園。太。も。覚。期。を。せ。と。い。れ。て。吐。嗟。と。駭。怕。る。鳴。呼。善。土。丈。二。も。呀。阿
 と。さ。り。の。猿。馬。を。飛。く。振。放。え。と。角。ひ。を。次。園。太。緩。を。中。一。中。て。前。面。撲。地。と。蹴。回。り
 土丈二遙ふ。筋手りて。水田の畔へ倒れけり。次園太の。と。披。見。る。を。片。の。刃。の。電。光。鳴
 呼善の右の肩尖を。研。り。て。苦。と。叫。び。も。果。を。颯。と。潰。る。鮮。血。と。共。小。鹿。空。を。扱。ん。て。仰。反。り
 信り。一。程。小。腕。八。ら。土。丈。二。が。跡。小。續。り。て。走。り。入。り。今。次。園。太。と。名。告。げ。る。聲。耳。胸。を
 潰。く。胡。諺。て。張。燈。其。里。ふ。ち。棄。て。足。信。と。逃。走。す。卿。三。透。を。赶。菟。か。て。白。物。等
 と。喚。り。く。近。く。儘。小。腋。挿。の。刀。と。見。り。と。引。扱。り。て。敷。多。甲。斐。も。る。鞆。釘。走。り。と。柄。の。三。鹿
 ち。く。小。残。り。刃。の。前。面。へ。怪。蜚。て。最。裏。小。隊。千。六。腕。八。あ。れ。力。と。ぬ。て。身。と。振。回。り。倒。つ
 寄せ。四。も。身。引。組。んで。積。倒。え。と。を。拵。り。け。る。余。程。小。土。丈。二。次。園。太。太。投。ら。れ。る。



八代傳九郎卷十五

十九

文治元年



慎之慎
之出於
汝返於
汝者也

八代傳九郎卷十五

三十三

痛楚を忍びて身を起し。殪を逃んと思ふ。腰一寸鐵を帯がれに己と云。田畔の
 建、苗頃の小杉木と力不儘、一抜合の程、敵をんと找む。次、因太を寄せ、と
 拂、二生懸命受、柱を挑し、と。次、因太焦燥、物もせ、踏入、と。敵も刃頭、土
 文、二利を研られ、落、杉木も、命も、逃、と。次、因太、走、菟、と。礮、と。研、と。大
 鋭、卷、土、丈、二、背、を、四、寸、研、劈、れ、叫、び、も、果、止、け、り、ま、の、時、腕、八、と、挑、と、た、係
 卿、二、小、角、触、れ、る、背、力、あり、修、煉、あり、腕、八、も、亦、相、撲、を、好、む、身、長、高、く、年、廿、三、
 色、の、技、も、背、力、も、相、応、し、敵、ま、る、ふ、足、る、と、盡、て、左、右、も、推、も、伏、せ、れ、と、速、莫、命、運
 盡、れ、ば、其、頭、の、敏、系、は、夏、草、の、憶、を、足、を、膝、一、く、之、り、と、小、膝、と、突、く、卿、二、矢、場、の
 推、倒、し、て、兼、一、菟、の、胸、前、と、刺、し、と、ま、る、刀、を、引、け、り、の、み、ま、り、と、さ、る、備、も、も、鞠、像、の
 圓、石、あり、と、究、竟、と、合、も、る、も、と、也、腕、八、頭、顛、に、柱、で、續、し、も、不、捷、程、の、肉、破、れ、骨
 由、推、け、り、ん、死、活、知、る、腕、八、頭、髪、斷、離、れ、血、を、塗、れ、り、聲、も、も、る、と、は、る、り、の、け、り、。

第一百九回

來路を説く次、因太、驥尾の附く
 餘談を盡し、親兵衛、扁舟を促す

登時、次、因太、大聲、と、扱、り、聲、も、卿、二、一、霎、時、等、の、并、取、り、の、知、る、引、導、の、法、語、あり、
 生、熟、一、の、ま、で、割、る、と、卿、二、も、飲、り、て、且、腕、八、が、呼、吸、と、拵、る、衰、れ、と、動、く、づ、も、あ、ら、
 後、も、儘、故、と、身、を、起、し、落、る、刀、と、刀、の、柄、を、那、這、と、尋、ね、合、枕、で、小、條、を、折、り、鞆
 釘、も、多、く、鞆、も、收、め、り、背、の、帯、け、り、不、程、の、次、因太、の、深、癩、の、弱、り、土、丈、二、頭、髪、を、梳、き、
 曳、榻、り、と、菰、屋、の、戸、口、の、と、來、り、既、倒、れ、た、片、息、も、鳴、呼、善、が、上、の、推、索、ね、楚、と、踏
 へ、血、刀、と、男、女、の、頭、を、ち、毆、て、甚、丈、淫、婦、們、思、ひ、知、る、今、は、ら、ん、と、蓋、を、似、と、
 鳴、呼、善、の、原、是、我、家、の、炊、妻、也、父、母、兄、弟、も、も、れ、る、我、前、妻、の、不、便、の、思、ひ、と、刺
 縫、の、技、も、習、さ、り、宵、々、毎、毎、教、え、左、右、も、人、並、の、女子、一、匹、の、り、比、我、妻、の、世、を、去、り、て
 内、を、任、さ、り、人、を、召、さ、れ、我、中、年、十、七、八、の、妹、も、も、同、試、の、生、涯、仕、て、洪、恩、と、永、く、復

さえと若き情願然もあつと思ふも推登して後妻も做して世帯を掌らうと又土丈二の我
 所親の孤兒であつれば總角の比より我乾見おして相撲の技を教導を京録會を勸進
 相撲を載らうとせよ抑是誰の庇で有候か素より若們的庸常の妻あはる
 渡世の與の弟子あはると思ひ義を忘れて密通するその罪鏡にせられたる然らるる世
 間似る懸見あはる男女は追ひて地方の住む林のめせし若們不義の情
 然飽う我身と推整し世帯を奪取んとて事と計較を誣訴を冤枉の罪の陷を
 たるその悪越極より尚れをも忍びて孰も忍びざるべしとて皇天后土も這奸
 逆の賊男女を容れぬ真罰踵と旋と目今我の屠らる悪報を思ふ其其廢
 ぞと罵の責を那這とく刃頭とて突けの苦む土丈二嗚呼善の饒しぬら聲
 も霜夜の虫も異るるを繞るる脚を動して息絶々呻吟と次圍太然とと冷笑
 若們今や免れぬ命と惜む思慮を念佛とせと命直と刀と抗と土丈二

二が胸前馬驚と刺串け下布れ嗚呼善を申れ四幼八苦の両も握り眼を
 睜りて共侶の息絶けり既おして次圍太と血刀と抜令と杖と鞭と斂め八
 が什俯らる身邊お找と近て足と頭顱と踏動し中れ敢見も死若塚之
 山の小經紀駝杜ハ獨子とく相撲と好むとて我弟子とあり一近曾若
 二親の世と去りしより生活お親も産と破り邑と追れて宿おる者よりと我と
 師弟の義を思ふ宿所は吸合の意見と示し人お做んと東西に没れて去歲の
 秋より養ひ小素より不実の本性を怨と思ひ存も只その同氣相求の同
 悪と相憐む土丈二の相譚れ嗚呼善折々餌を飼れ非義の利慾を感ひ土丈
 二が誣訴の折若他が證人お做て巧お我を誣するの婢の趣の我身獄舎に在り日
 人憐れさ知ら然今招ねとも若も嗚呼善お俱せられて命を贈らふと來ぬら則
 是天罰も怨る処るるべし親をせと罵りて項を駭しく蹂躪と云とわらふ

てあつち張る。脆くも呼吸の絶ふけり。當下次園太の側を急ふらう。喃卿三三這奴の
和郎の脳骨を推れられ始り痛く弱りけん休まら。その傍十々威を刺さるも又生
くづもあゝか。嚮ふ嗚呼善が土丈二。告るとつて我知れ他が屍骸の懐必全十
両巾し開ゆ亦都々我東西をれ。今も天道鏡一の八人開を盤纏おして他郷へ走
らん探りてあゝ快おね。と卿三三所々。そ勿論のり。這里より小千谷へ速う
お件金の先合せて。情地宿所は立ち有ん涯の銭財を攫ふて走ら身所因を
求る折の本銭あるん。只這奴を屠せしめ。空をまら。といへ。次園太頭を掉て
そ亦和郎のよさ。然で飽く。知る小千谷の宿所我宅あり。那里の東西を
我有んも既罪を蒙り。追放され我身を我東西。我有るを然とせ。あま
かり来て女婦人。婦人怨復。屍骸を送れる十両の金。今も危死の爲。已てを
ゆる所為。多々。怒り。強人。五十歩百歩の間の。天道鏡。あま。這里の片貝

街頭を夜の暇人絶。知れざる。幸い。快く影を躲せ。と。お卿三三有理と
悟りて。嗚呼善が屍骸を探る。項不掛る財囊の内。果して十両許の金あり
あ。と。併合。次園太。遺與。甘ん。多。懐。敏。四下。見返。る。う。は。れ。卿三三且
鬼の。と。辞讓。も。有。敷。系。れ。あり。儀。あり。心。を。う。へ。人。の。道。俱。迷。ぬ。野。十。王。の。鳥。夜。の。潜。ぶ。便
て。路。と。求。め。く。通。宵。震。く。も。走。り。け。却。説。を。明。の。朝。開。ぬ。近。地。方。の。莊。客。が。嗚。呼
善。土。丈。二。の。横。死。を。見。出。して。う。ち。散。馬。に。多。村。長。の。告。が。殺。され。て。も。時。既。お。幾。う
程。り。けん。敵。も。知。る。死。照。驗。を。け。れ。隨。即。事。の。趣。を。片。貝。の。有。司。に。訴。ぐ。実。檢。使。を。京。王
の。跡。に。詮。議。し。遂。れ。誰。が。所。為。と。知。ら。う。は。れ。嗚。呼。善。們。三。個。の。亡。骸。の。由。縁。の。著
合。措。く。べ。し。居。宅。家。伙。の。没。官。せ。れ。て。石。亀。屋。の。迹。断。絶。今。番。購。ゆる。者。の。家。住
替。り。け。れ。怒。り。嗚。呼。善。土。丈。二。們。を。殺。す。次。園。太。が。怨。堪。ぬ。所。竹。中。を。あ。け。め。と。猜。と
い。者。多。う。く。風。聲。片。貝。の。吹。え。る。も。稲。戸。由。元。の。中。有。司。們。の。豫。より。土。丈。二。嗚。呼。善。が

不義不貞の許を憎く思ひて反て次園太を憐れん事の疑ひありといふも今此も次園太の
 往方と涉獵り追捕へ。糾明せんを沙汰の鳴呼善ま三腕八の奥不寛家素
 と欲するのめもむとるれば他が甚淫忤逆の里人夜話のなるとも程歴て灰燼
 えける。同話休題。今程次園太の卿を従へ。晝其躰れて夜を定と走る信濃上野
 武藏を肩谷家の封内も。長尾家の所領も。然るに其方赴る去向の追捕
 心許る。且陸奥へ赴れ。姑且那地の日と弥り夏の定りたる人時侯我投方へ向へられ。と
 めの春二月中旬及びて奥の會津に來りければ。客店に逗留して。卿と商議去後。俱小
 久後のと謀る。路費の統十兩金を卿も貯禄する。長尾旅宿をせむもあ
 る。然るに路費の竭る以前此小の旅行經紀とあり。日毎小銭を給る。あは進退
 其里分り。後せん術る。却何を賣る。更思念と旋る。次園太
 師傳の膏其の撲傷折損の奇方あり。折る人施ける。經驗あり。とある。其材

も亦輒けれ。身いり旅舎に在り。件の某と製衣作を。卿三の賣ある。次園太の
 笠と深く。日毎小會津の巷街を呼ら。徧歴して。賣る。欲せん。其の
 可否とも。知る。あはれ。買者稀。日毎の房錢不足。も。左右
 程小。春と憂かり。旅宿の銷。三月下旬。命の綱と思ひ。十金。路費の
 過半。残る。寡く。隨小。次園太。情思。曩。故御を。追れ。も。五十日
 光陰。麻生。縦追捕の沙汰。も。今。大聚寛。盤纏。匿。る。る。る。
 この地方。日と過。と。巧。る。ん。ん。武藏。赴。湯嶋。天満宮。詣。解厄神
 恩の賽願。致。兼。大阪。犬田。犬川。那。三。大。在。外。と。索。ね。て。再。生。の。恩。值。遇。の。縁
 る。缺。び。を。始。あり。終。る。恩。を。思。ふ。者。似。う。と。尋。思。を。卿。三。の。徳。々。と
 説。示。素。卿。三。所。異。議。も。あ。る。と。心。然。然。去。向。を。急。ん。と。詰。朝。會。津。の
 里の歇店。俱。立。去。り。日。歩。夜。宿。の。武藏。豊嶋。郡。不。來。湯嶋。の

神社と拜とまろり。卿と共侶不黙禱お時の程を覚む。その日の拜殿通夜を。猶
久後の真助と祈る。恩人物四郎の大阪生並。大田大川の両勇士。環會のいねとく。
思ふ涯と祈請。まろり。更去向と思慮。下總の初徳。小文吾が昔里を。豫歩知
正なり。那里。尋問。在処。知る。あらん。秋と。その。旦。卿。不。意。衷。と。示。し。共
侶。初。徳。赴。け。果。人。們。問。試。一。件。の。大。田。小。文。吾。の。猛。可。當。所。を。立。去。り。今。も
六。稔。の。や。る。べ。う。ん。親。文。五。兵。衛。の。故。あり。安。房。の。ま。れ。那。地。で。身。故。り。れ。が。家。の
絶。わ。小。文。吾。哥。々。の。い。ふ。ろ。り。は。星。裏。の。一。ま。か。り。あ。あ。れ。と。や。が。虚。談。と。ん。と。の。入。の。答。不
便。り。と。ら。れ。次。圖。太。望。と。失。ひ。又。卿。と。共。侶。下。總。武。藏。の。封。疆。河。の。西。の。澳。村
ま。で。か。り。あ。あ。け。る。路。費。の。竟。不。使。果。と。絶。ふ。一。日。飲。二。日。許。支。る。ま。あ。る。り。か。と。御。當。の
奥。の。會。津。で。賣。と。修。殘。で。膏。茶。の。百。盒。餘。の。り。這。頭。で。これ。を。賣。盡。さ。本。錢。を
失。お。至。り。ど。く。是。より。日。毎。の。房。錢。を。ゆ。べ。然。り。け。れ。も。先。度。の。ど。く。只。呼。あ。く。の。ま。ゆ。く。

今番も買入稀多。人の心と樂ま。遊藝多。と施ま。衆人取合ふ。れ。も。然。る。助
也。素。よ。疎。本。性。を。争。何。せ。只。年。來。嗜。む。技。の。相。撲。の。外。あ。あ。も。あ。れ。所。詮
老。と。老。れ。羞。と。心。び。て。箇。様。々。の。烏。許。技。と。女。看。官。極。め。ま。る。と。入。然。り。と。の。膏。茶。の
あ。あ。う。う。賣。れ。さ。ん。や。と。師。弟。當。晚。の。歇。店。で。情。地。の。商。量。を。され。も。招。牌。を。の。准。備
あれ。詰。朝。も。亦。る。事。の。這。那。と。く。時。を。移。し。既。未。牌。下。刻。より。三。觀。鼻。弁。の。立。て。替。音
古。相。撲。の。技。を。の。人。脚。を。留。め。立。聚。合。て。專。膏。茶。を。售。す。せ。禍。鬼。忽。地。其。首。不
起。り。一。旦。難。義。及。び。料。も。親。兵。衛。と。孝。嗣。の。助。力。せ。れ。て。事。の。あ。あ。及。び。然。り。然。り。石
龜。屋。次。圖。太。の。這。來。路。の。長。談。脩。話。と。卿。と。迭。代。解。く。と。詳。き。れ。れ。孝。嗣。も。耳。残
傾。け。我。身。も。似。る。冤。屈。の。罪。科。他。が。奇。遇。湯。嶋。の。神。の。真。助。と。思。ひ。け。り。登。時
大江親兵衛。次圖太。あ。あ。ら。向。い。て。適。愛。の。命。運。九。死。と。出。て。一。生。と。ゆ。る。洪。福。の。ま。る
む。淫。奔。の。後。妻。不。義。の。乾。兒。と。然。と。復。と。天。罰。を。示。し。の。多。く。ゆ。る。死。大。丈。夫。の。所。約。と

併 鯉之の師恩を思ひ義不仗り水火裏に艱難を俱りたるは是も亦容易
 なる弟子多かり此就て今又思ふ所は口大阪毛野に救れりやとの人傳ふ事
 知り信乃道節莊介小文吾現八八角の六六士も料も豊の帮助あり一人生さ
 ざり知るべしと云ふ次國大評りくそ亦甚多故いと問へ親任衛然いと豊小豊を
 命乞の事鮮目前の仁怒りも腹大刀自の尚疑なく速更饒一難さふ那賊婦船
 虫が奸夫媪内と俱り司馬濱中牛の角の突殺され開が昔の年来の積悪成
 寫してあり小木天蓼丸と偷合する事を見果るけりやと稲戸津衛由元が知り
 隨即腹大刀自の言上と諫め六六刀自言下の感悟して時を移さば恩赦の沙汰也
 豊が獄舎を坐されこの椿事よりて去る船虫媪内を牛の突りて誅戮まける是
 神佛の所ゆるまその夜女船虫の大田子撞見して生拘れ又媪内道節信乃們の投
 伏られて傳囚の折り折らば莊介現八八角の皆その憤憤集聚合まら六六士相謀ひ

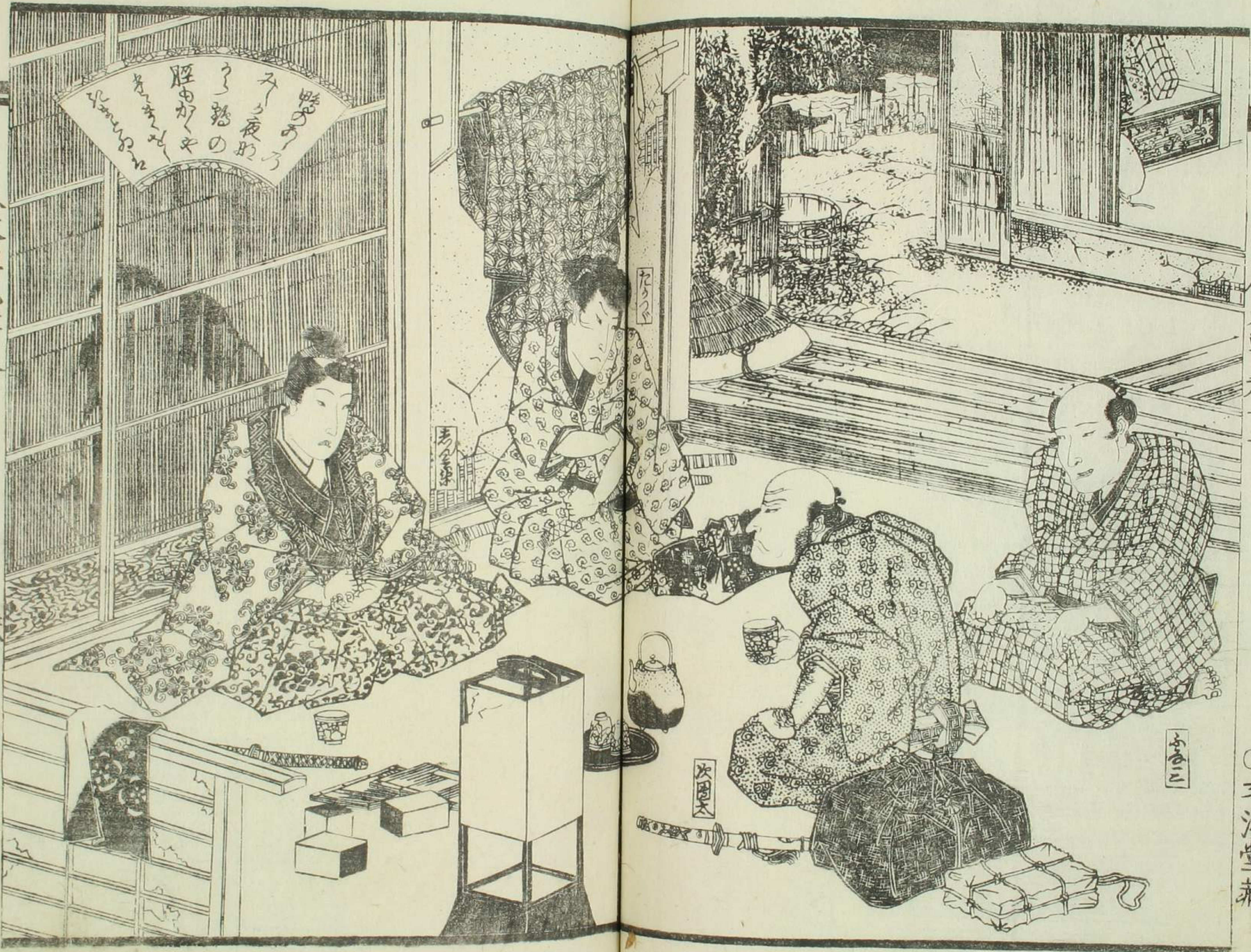
賊僕賊婦を誅す小申夜女媪内を捕合する赤鬼四郎の牛の角の突りて誅戮
 その積悪を世の人知え為り他們の身罪戾敷箇條を寫着けり乱臣賊子と後々
 懲まらその當意即妙共六六士の所為る人知らば濱の堂も南魔の眞罰
 多しと生推量と考るる毛野道節が復讐の事朝の事と正月二十一日の約莫
 尾の顛末の酒家富山に在り時神女の示教とぞ知り有徳の折六六士們も
 豊の與りあつたね船虫昔の寫れ文字を據て木天蓼丸の盜賊正可知りくぞ
 腹大刀自の疑い解け豊の轍魚の江に放され死すこととぞ思ふ是れ由り又と思
 へ豊が必死を救ひ一單大阪の事をも信乃道節莊介小文吾現八八角の六六士も不用
 意のしと帮助ありける中の中小文吾莊介の豊の義侠を敢忘れ折々噂をきけり
 よの餘の四大士も越後史然る者ありと知り却小文吾莊介片貝を死を免れて他擲
 走るとぞ思ふ那由元が昔の與り誠心より出する故の箇様々と事の崖略を解

示て當時小文吾井介は是れも... 別を惜むる為に人を知れ其身々... 累の害怕もその意も久し... 那二天士の心術と人柄を見て知る... 寛家と素も為小磨齒茶と満... 邂逅も其の助命の宿願を果... 路費の與且大阪大田大川門... 此の河原に在り予の窮院を... 似く其趣極め異之正造化の... 必獨邁る是も七物の配偶の... 人公也。卿と更に客今更に...

酒家の轉て注し作りぬ... 神出鬼没涯のもたれを人見... 奇偶を以て然と思ふと解示... 妙なる思ふ思文古耳の耳も... 世もて歎親に疎に推並て八... 直示えもまはあまのものと... むのゆゑに因坐の後よは... 屈の憂苦と忘るまをい... 七天士のりりも大際ある... 具の告ごりかた然いと... 旅客と思へるも更も豫も...

鯉權佐守如の獨子也。河鯉佐太郎孝嗣と唱ふる忠孝無二の後生は是這人の
 心と告れ次國太卿之胆と潰ら顔も目成り。その亦思ひにけり然る方
 様と知らせて太く無礼と仕りぬ鏡をせあへともち勸解を親兵衛禁めず不
 誼の目今の急務あり。這賢才子の事就て又一條の奇談あり始に終に
 箇様々々守如孝嗣が忠あり。且父子兩度の大功の奸黨を醋く思ひ。譜を
 陷れ事因る孝嗣の今日面岡也死罪の約れん。折靈机政木の機変も
 孝嗣を救ひ會り事又那兩個の政木と和奈三の事又根角谷中二の事親兵
 衛の料もその折行會り。那光景と目撃も孝嗣が死を免じ折便直と以武
 藝の本事と試み却意衷と示し。多友垣と錦ひ事政木瓶の瓶籠の傲り
 升天奇特のりもその崖界と解し。孝嗣も亦漏れ補ひて母の慈善と政
 木の恩義且親兵衛と值偶の縁毛野道節們七犬士の忠義の好情あり。

悲しむ或の喜む或の怒む或の笑む十状萬態みま。林を膝の杖む骨ぬき
 只顧感々己ざり。且々次國太の親兵衛の向い顔と衝く。御教諭も。自他
 得失の所以を美知仕り。和君の上の為疎凶。今宵猛可上總。館山と
 へ邁ん。出船。這里の故と。知を。其頭は事も。所
 ぼく。親兵衛領。然る。他事紛れ。解し。暇中。御向。既
 酒家の七犬士先も。不慮の里見殿仕。館山の城と預け。憶
 邪物の障身も。館の覚始の。七犬士們が在処を。送る。今朝
 往日猛可遊歴の暇を賜り。姑且舊里下總。市河の旅館と。今朝
 早天より去り。這頭と徘徊。之を詳説。願末箇様々々を
 墓田素藤が謀叛の事且親兵衛が單身も。館山城。赴。素藤と生拘。



此の夜は
うき夜の
脛をか
かかす
かかす

八世九郎卷十五

文英堂蔵

ノリ作車巻十五

文英堂蔵

たつ

次郎

次郎

兇徒と降と城と拔れ事并素藤を赦免の事且濱路姫の鬼病も館
 山より親兵衛を召まき一々姫上の看病不諫めひの又親兵衛が所藏の靈玉前
 後兩度奇特の事伏姫神の靈驗擁護の事の趣も畧談を是より後那地の事
 洒家知るより多り一々御政水亦忠告せられ上總亦復兵乱あり料を知らざり
 ぬるの故又信と素藤の女僧妙椿が幻術の幫助ありて館山の城を襲累
 事當城頭人あり登桐山八八生拘れ又田税戸賀九郎と甘屋八郎の辛く
 命を免れ他郷へ没落する事其の故は楢村よりて荒川兵庫助清澄が君命を
 稟奉り素藤を討隊の大將中館山の城を攻伐し那妙椿が幻術と破るは
 今全功と信の信折る義成朝臣の靈玉の奇特ありより御向親
 兵衛を疑ひひの怪尼妙椿が反間の幻術ありと信を悟り王の程伏姫神の
 示現ありければ千慮の一失を御後悔大なるも快親兵衛を召返して妖賊を

伐夷ぐく并小自餘の七武士とも招て聚合んと昨日登崎照文と焼雲與四郎
 仰付れ隨便犬士と招會の使の連ありと政水の老媪が忠告の趣と情語を
 妻の綴る路次同かたて兒使們不逢とも量素藤と赦免の折我の衆議を折
 衷し我君も亦東氏も約束の言あり快妖賊を討滅し且民の塗炭を拯ひ
 且館の御心を休めなると思ふも水路を尋るは故ありと小次園太卿三
 心漫小勇れそ亦要む椿事願ふ我王僕をも兒伴召れはか兒部
 助足らざるも空うはさむもあはれ親兵衛推林めり志の然るも
 先度我身いさむ素藤を成生拘り今今人の幫助と借人なれは這
 河鯉生の我亦思ふよりゆわれ御も同伴と饒たり叟の酒家と新百識も大田
 犬川の舊識あり且大阪より再生の恩ありふも一日も多く回會して恩を
 謝し徳も答る理義を思ひて惣酒家小徒んと欲する俠氣ありとも宜し

意に大田大川門我七個の義兄弟の千住の驛より程遠く徳北の御土水
 垣残三夏仍の宿所不在と必結城の城下より大法師の草庵に來會て
 本月十六日の大法筵に預りて欲するも其の明日疾徳北へ仍逢結
 城へ赴はる。十六日申程もる程と諭せし次因太眼を睜りてその宣
 大坂大田大川主の昔恩徳義を今も忘れぬと申すも今日厄
 難と極まらざりし恩義の今番の大事小俱せられ後小自餘の大士達
 るも遅延の枉て饒さるひねと口説けりし時移りて短夜るも三更の
 鐘鐃々と響えけり登時親兵衛の遠く次因太を推禁めり申す彼那鯨
 音の真夜早るらん追風誰何船公向促さんとて立ちせ程小奥の一室
 人ありて大田大川氏等ありと喚ひて此れ是甚る人且下回解介を
 南總里見八犬傳第九輯卷之十五終

南總里見八犬傳第九輯卷之十六

東都 曲亭主人編次

第百廿回

命令と傳て使臣征伐を正くせ

再說大江親兵衛の夜半の鐘の响とて今解纜の好時候る先船公を
 促さんとて躬て遠く立ちせ程小奥の一室に人ありて大田大川氏等
 ありと喚ひて大田大川氏等ありと喚ひて其方と齊一なるを咳けり
 親兵衛の暗と定めて是別人を昨日稻村殿よ
 命せられて大士と招會の使に達せし番崎十一郎照文の照文の日の打
 縹紗の自家の花籠の夾衣と被て深鐵色羊絨の戦袍と披着し宝藍聯
 野袴の青蓮繭細の副帯と締添朱鞋の中刀と佩し一刀と左引提り
 徳而

徐親兵衛們の饒一久と揖讓とまゝ。上坐の着まゝ。親兵衛の席を譲り。恭しく
 朝ひく思ひくは。死後。崎主の程の狭き地。来て。那一室。在。一方。と。向。照文。點
 頭。然。と。這。回。咱。們。と。與。四。郎。が。和。殿。並。七。大。士。と。招。會。の。死。使。の。達。れ。て。昨。夕。解
 纜。と。ま。け。る。よ。り。既。に。靈。狐。政。本。と。ま。り。神。通。奇。特。の。忠。告。よ。り。て。ま。知。れ。疾。所
 だ。れ。今。も。且。不。報。る。も。及。ぶ。と。却。卑。職。と。與。四。郎。の。昨。夕。台。命。と。稟。し。よ。り。日。没。時
 侯。子。稻。村。を。能。出。去。向。を。異。し。相。別。れ。て。各。快。船。の。ち。乘。り。て。武。藏。を。投。て。漕。走。を
 素。昨。夕。の。風。波。暴。る。け。る。而。逆。風。を。幾。番。吹。戻。され。找。む。づ。も。あ。ら。な。い。思。ひ
 中。の。似。洋。中。の。夜。を。明。し。又。時。を。移。して。今。日。夕。晡。の。左。側。に。辛。苦。で。這。兩。河。の。西。の。岸。に
 漕。着。け。り。與。四。郎。へ。の。お。ま。り。船。異。な。れ。知。る。よ。り。も。卑。職。の。昨。夜。通。宵。勅。風。洪。波。の。揺
 惱。され。て。心。神。穩。る。所。故。不。飲。我。船。の。地。へ。着。く。已。前。より。頻。り。頭。痛。眩。暈。し。く。權
 且。も。堪。え。ず。豫。に。船。を。千。住。河。に。漕。し。て。德。北。の。郷。土。に。氷。垣。の。宿。所。を。向。試。て。大。士。に。在

処を撈らんと思ひにけれ。朽惜も病着るより。果。是非。多。船。を。歌。め。さ。せ。り。こ。這。里。の
 屋主へ。安。房。上。總。へ。日。毎。文。加。海。船。の。問。丸。を。我。を。載。は。高。高。の。母。大。累。と。相
 識。し。他。が。坐。席。を。借。り。ま。り。一。霎。時。將。息。ま。あ。と。高。高。の。意。見。不。儘。相。譚。ま。て
 那。奥。の。編。室。を。借。り。久。く。臥。て。在。り。高。高。の。眼。を。取。り。船。を。依。返。遣。し。俱。に。な
 親。兵。一。十。名。と。我。私。の。伴。當。們。の。河。原。の。船。見。矮。屋。留。置。て。這。身。の。貯。禄。の。某
 腹。衣。を。被。ぎ。寝。る。も。知。ら。ず。目。睡。ま。り。既。に。日。暮。ら。有。徳。一。程。不。這。一。室。不。ま。り
 三。四。個。の。客。あ。り。相。譚。を。聲。不。眠。り。覺。て。心。も。う。ち。所。一。個。大。江。和。殿。の。聲。へ。又。一。個
 扇。谷。家。の。浮。浪。人。河。鯉。氏。も。も。ち。餘。の。越。後。の。旅。客。師。弟。此。彼。似。う。冤。屈。の。罪。成
 辛。苦。で。免。れ。亡。命。流。浪。の。顛。末。ま。で。詳。し。知。り。世。の。塞。翁。が。馬。も。う。我。船。昨。夕。順。風。を
 ら。今。日。德。北。へ。赴。け。り。和。殿。不。逢。不。り。ま。り。逆。風。よ。り。病。病。よ。り。料。道。這。里。日。を。消
 去。反。て。ま。君。命。を。傳。時。宜。の。物。不。病。苦。と。忘。れ。て。生。平。よ。り。心。地。清。く。な。り。り。

疾起しやくしつ対たい百ひゃく廿にじゅう思おもけりけりわねわねも各おのづから會あひま話わたりごといと細こま穿すりりけ言ことの果はたるとま程ほど不ふ偷とう
 聞きき佳よ境まがひ入いり河か鯉い氏しの必かならず死し厄やく難なんを救すくりら靈れい狐こ政せい木ぼくが腹はら大おほ刀た自みづか自みづか変へん化くわ去さ
 其その頭あたまの奇まじ談たんいいわん件けんの政せい木ぼくが神かみ通とほりて素す藤ふじが再また叛かへれり支し修しゆと和わ殿だん不ふ告こ
 狐こ龍りゆう不ふ化くわして升あが天てんの為ため又また這こ石いし龜かみ屋や師し弟ていの傳たづな命めい奸かん夫ふ淫いん婦ふ不ふ怨うら復たがひして萍はら流りゆう
 ひくこの地ち不ふ事じ且かつ御ご向むか不ふ觀くわん鼻び中ちゆう五ご十じゅう太たい素す吉きちとと不ふ乱らん妨ぼうせせれて殆たいてい難なん養やう
 及およ折しや和わ殿だんが河か鯉い生せいと俱とも助すけ力りき立た地ち其その崇たか鬼おにを追お拂ほりり事こと且かつ和わ殿だんをを茲こゝ不ふ順じゆん
 風かぜを多おほり上あが總そうへ推お渡わたり素す藤ふじ們らを討う滅めつして那その前まへ言ことばを果はたええ解あ纜かづいいりり鯉い忠ちゆう武ぶ
 畧りやく思おもへ支し皆みな意い表あはれれ奇まじく愛あい不ふ勝しょうの飲い卒そつゆゆ館くわんの御ご証せいを快か快か信しんととりり不ふ
 おろ惴すいれれ倉くら卒そつ楮しゆ戸こと隔へりり喚わひひらら私わが礼れいをを叮てい寧ねい解あ示しるる懐なごりり主ぬし君きみのの
 澤さわ一通いつとほと令しむ牛うし扇あふぎ子ころろ載のて卒そつとと逸い與よ其その親おや兵へい衛ゑいの找たづなて近ちかつつ受う令しむて兩りやう三さん番ばん
 ろち戴たい叶えつ履りふ我わが君きみの御ご親おや命めい御ご向むか政せい木ぼくが忠ちゆう告こりり素す藤ふじ們らが再また度たびの叛かへ逆さか我わが君きみ

仁にを召よかかしし追お代しろの美みを課かせせと和わ殿だん并なら不ふ燒や雪ゆきをを使し使し連れんひひ事こと由よしを听きしし
 王わうの使し使し途と逢あひひ一日いちにちも争まがひひ妖まじ賊ぞくを討う夷へいはは我わが君きみの賢けん慮りよを休やすめめしし思おもひひ惴すい
 子この我わが曾まご勇ゆう士しの本ほん性せいを己おのれにに敢あてて征せい伐はつを恣しにに做な索さく似に識し者しやの
 議論ぎろんあある料りやう今いま宵ゆう使し使し值ち遇ぐして素す藤ふじ征せい伐はつの君きみ命めいを乘のりるる易やすくく車くるまを
 先まづ々々御ご書しょをを用もちんんとと左ひだり右みぎを披ひらきき遠とほくく身み起た立た緑りよく頬ほ淨じやう水すい盤ばんの柄へい松しょうを
 會あひひ抗かげげ幾いく番ばん歎なげめめしし洗あらいい淨じやうきき舊ふる席せきからら多おほくく懐なごりり主ぬし君きみの澤さわを令しむてて徐じゆ小せう
 封ふう皮ひを折して聲こゑ爽すわう然ぜん不ふ讀よむ程ほど大おほ家か席せきを避さげげ謹まことにに齊いっ一いつをを聽き聞きをを書かきき曰いふふ
 論ろん示し犬いぬ江え親おや兵へい衛ゑい可か征せい伐はつ再また叛かへれり妖まじ賊ぞく基もと田でん素す藤ふじ等ら等ら事こと
 右みぎ悔くわい往かう時とき之の愆とが而して思おもひひ今いま日ひ得え失し譬たと如ごと心こゝろ疑うたがいい生な暗あん鬼おに患うれ眼まなこ
 者もの見み日ひ華か惑まど於を是こゝ為なるる甚たゞ獨ひとり寡が人ひと謬まがりり不ふ悟さとりり妖まじ賊ぞく素す藤ふじ等ら有あるる
 反かへ問もん之の術じゆつ自みづか切き遐とほ棄す股こ肱くわ而して復また有あるる螳たう臂へい解あ車くるま之の孽わざ是以ゆゑ以もつ覃たん

重用斧鉞非卿乃不可也。因賜以手書。書屆之日。亟歸寧本藩。且拂魔雲而明天罰。全前功以復舊職。寡人俟卿。一日猶如千秋。餘者有于異日。面談勿違。急急如律令。

文明十五年夏四月十一日

義成 押とそ寫せぬひける。當下

照文の親兵衛の歸參を祝す。御詮佳地なれ。今宵の解纜勿論なれ。那妙椿の勢ひ先度と同か。る。單職が俱く來りける。究竟の夥兵十名あり。他們を和殿のまゝ。河鯉生次國太師弟と俱に幫助せしむ。と。孝嗣膝を找めて。次國太と共侶。照文の初對面の歎いと舒る。就中次國太師弟の照文が執成。討隊の伴を饒る。時宜のく勇氣を増て。又親兵衛云云。その情願を口説ける。程の親兵衛の主君の澤を懐へ。歎め。照文が答る。御詮の趣。兼り。縦晩生一人とも。征伐。頼るべけれども。尚妙椿を走らる。辭を遣ふ。似たり。次國太

師弟の一人も町人多く。數のあはれ。為難く。別れ。見せぬ。加えられ。然る。請の伴。但し和殿の夥兵。素より。晩生一個の與。練させぬ。あり。る。悉く。縦兵十名あり。素藤が幾千百の兇黨。比れ。九牛の一。毛。晩生敢身。い。軍功を貪んと欲せ。荒川氏。謀合。餘賊を漏。不。息。ふ。在。夥兵二人を借。一人。も。足。急病の折。その代。不便。殿臺の陣營。次國太師弟を遣。密議を達。遮莫。御内の雜兵。荒川翁。高宗。逸友。疑。其。期。行。外。所。要。敵。城。入。及。河。鯉。石。龜。の。助。助。中。河。鯉。生。一。人。當。千。の。本。事。是。今。番。の。一。事。我。君。薦。め。一。方。の。杆。城。と。素。より。疑。は。れ。這。美。と。照。文。點。頭。和。殿。の。萬。支。神。々。慮。不。測。知。か。け。開。左。右。意。見。依。る。河。鯉。生。の。忠。孝。拔。群。智。勇。も。然。と。查。せ。ら

侯の死時より卑職招賢の死使を奉りて。関の八州を履歴りて八犬士の外に
 差せる文武の英士不遇たり。料も今かこの忠孝智勇拔萃する人の和
 殿に従ふ。今番の役功あり。卑職薦め稟さすとも。必重用せらるべし。然るとは
 錦の上の花を添え當家の至宝何事亦これ優まらぬ。実公私の幸ひなり。只
 管の愛憎を孝嗣听々愀然と羞る頭を稍拾げて。おと思ひも多き大江王
 蚤崎生さへ分り過る褒賞の當りか。いれ現天道の盈ると虧く果せるを蕙
 蘭敏糸らんとまれば。秋風足と破る。忠臣仕んとまれば。讒侮を覆せり。在下定不肖
 るれども。孤忠と書して容れられ。刺不測の罪とて刑餘の日。陰見あるの思へど
 いま盈ると。虧るこの最。御もいふこと。故主の賢明も。譜第恩
 顧の義も。あつた。他姓不仕へる。忌憚らざる者似。故主の怒と慈と。庶かり畢
 竟我身の仙死時。政木孤の字育れ。今日又那靈狐必死の命と極れる。前後の恩
 義輕くも。今も後名と行ひ。徳を全す。世もあつた。陰徳慈善と昔も。政木
 狐の恥とあつた。今宵も。河鯉佐太郎と改め。政木大全と名告る。政
 木則他が徳を生涯とれ。え。為大全名と行ひ。又虧ると。え。ん。為大江主
 蚤崎主の意。查。あつた。親兵衛十一郎。側聞。次。團太。及。鯉。子。共。侶。賢
 者の用心故あり。その忠信。感。け。然。又。這條。物。譚。い。時。移。り。て。夏。の。夜。の。

深。少。親。兵。衛。頻。り。焦。燥。て。既。不。送。り。の。盡。す。風。の。好。ま。れ。た。ま。れ。

快。多。船。と。ま。せ。ん。大。家。女。の。こ。ろ。け。り。浩。処。の。船。公。店。舗。の。方。も。走。り。来。て。親。兵。衛。

們。報。る。事。乃。祿。連。の。け。の。嚙。唇。昏。の。三。觀。鼻。を。五。三。三。太。們。と。聞。許。し。を。ま。あ。ひ。ま。あ。さ。

件。の。五。三。三。太。素。の。吉。の。地。方。の。名。高。る。任。俠。氣。の。乾。見。乾。弟。多。く。あ。り。甲。夜。の。送。恨。と。復。さ。

ん。と。飲。その。隊。約。莫。五。六。十。名。も。く。長。械。船。竿。を。或。の。借。見。竹。槍。と。引。提。這。方。

投。て。來。り。目。今。悄。地。不。告。る。者。も。各。位。覺。期。の。前。也。是。非。及。ば。あ。る。小。可。



八代傳七郎景十

六

〇八代傳七郎景十



いんせき
五十三太素手吉
夜
船長の家を脅かす

ノ二ノ九車美一

〇ノ二ノ九車美一

とも側杖打れて家三人と損な。翌より渡世の障りあるん快外面立坐て樹々和睦き
 まる免れあぐもあま。益々の吐け。親兵衛所々打矢して然るもえ那奴們が幾百十
 人寄来ると我本事不知らん先度不懲の愚物の本性敵も不足の事なれど
 今立坐て追返せん汝連教習に騒ぐべし。野袴の袴切中束を刀緒引抜
 給祥見お横て西刀腰の勇士の身構外面投て去んまれの孝嗣次圍太卿も身装
 共侶の後れとて勇なる事の異変不照文の推續は立寄程親兵衛は伴當
 病病の安否を問んと前より聚合て次の面在り既事件の趣を知らん毫も礙
 議甚立逆と照文の喚近ては悠々と下知て親兵衛は隸けたり有悠程の舩
 公の宅眷の奴婢も臥房より事の愚劇堪ざらん皆土藏の困龍を細戸引
 音もせ舩公當高工們の幾の面お逃して其頭お在るをり親兵衛の問もせ。外
 面立坐て今後と敵もあつる鐵扇を執れる。左右の従者も雨次圍太卿も器

械をけれ。店前の柱お横する桿棒を脇挟て。寄せむわんと身構。前後の附副影
 兵們のあつと握り持。各先と鬼んを準備お透間あるをけれ。非如五十二天素
 る吉們有ん涯りの伏家と盡して三方より推寄考とも軌く克と合んと亦あるべし
 足えさけ。介程お向水五十二天枝獨鉆素も吉の従者隊の破落戸も六十餘名相
 俱して救急とて推寄考の既中と近。隨お鮮曉の月の隈もきて白晝の似く明らけ
 且。他們が打扮紛ふもあ。其身の漢戸町人るれも。戰國の習俗を近所閉戦
 る毎お落人の武具を剥も多拾ひもあ。各々貯るや鉾見身甲お身と探めもあ
 器械と執らぬ。と苛やくを見えり。然ら五十二天素も吉の親兵衛們が
 外お出。舩公の家と距ると。五十歩許の程お在り。相従者始お増て約莫二十許名を
 依勢いらく猛りけれ。戦き。怯れり。忽地已々と喚禁めて器械を伏せ。頓項巾を
 脱捐て。大地お跪にけれ。大家いらく地上お跪坐。謹と敬ぶ者お似も。親兵衛們はれを

見て必是詭の計るべしと思へば由断せき他們が立つて寺程の忽地寄隊裏より七玄色草絨の身甲の細鐵打る細鋒子の臂縛躰繳まで二尺七八寸の戦刀と九寸五分の匕首と帶る兩個の武士隊と離れ杖と出く親兵衛が身邊の茶きくち朝ひくある大江王恙もまきまき逸時とては景能のよき名生る親兵衛の訝りて晴と定めよく見れば定ふる是別人をも御前館山落城の折賊徒の田を殺脱く往方も知れどとせざる番士の頭人田税戸賀九郎と甘屋八郎をえ親兵衛の飲ばせ勃然と聲高き女達など恥を知らざる身の番卒の頭人を奉りて館山の城を守りて賊徒のちかちか覺きて良干の生拘れ士卒とて殺すも共侶の戦殺を要せ辛く命を免れて萍流いきて這頭が在依欽刺河邊の破落戸の隊小入の氣と使て良民旅人を殘害を僅小口と餉ふをあらんぞんあふ忠義義兩を虧け自許の白人ののりありとも何ぞも疾退して見

一列の鋭も鈍も鋒頭も衝揃束て勝負を決せよ今ゆく躊躇ふらと思ひの隨わ責罵も逸時と景能の听々敢争つとも俱小徐は寛解てのさう喃大江王言一早は如右思るの只傳少依れるん在下們の不似といへも只顧命を惜むの與小城を垂きて向容々々と脱れ去る者あるんや城を預るまの一日も守る由断るためか賊徒の不測の幻術をせり入るまで形體をせき況その勢幾干するや錐を立空地も多り一矢所れも射れども物もせき故は御方の士卒或は落亡或は敷かれて防ぐともあつりければ在下們相謀りて恥を忍び命を免れ俱小他御も走りの異日素藤征伐の御用も達て前愆も償んと思へん小介る不這兩國河原る五十三大素も吉弟兄の逸時と昔縁あれ他們が宿所は富居も御前落亡たは御方の士卒いふるけん逢ふりきければ便直と旋らと賊徒を伐り會替の恥を雪んと欲する五十三大が乾兒們的都て市中の生俠客を軍旅の事も孰され衆

ヨリとも馮心くくせむと思不誤一今日黄昏小三觀鼻中旅經紀の
よる五十二天們が理不盡不聞諍いを表のり。餘然和殿及びくを和殿怒り堪玉
の矢場の五十二太素も吉と左右の抗と投石の合を河の擲ちる時安房の里見の
御内人大江親兵衛仁るそと名告られよる皆駭怕れて逃て五十二天が宿所聚
合然ても和殿の武勇力量の和漢の類稀きよと豫より我們が五十二天弟兄隊下の
者も折々噂あり一他們の和殿の撞見ある本事のく舌と掉して逃還り折徳ら
と我們の告るに登時在下們思ふ大江氏自餘の七武士の招會の與遊歴の暇を賜ひ
ぬとせらる。這頭を徘徊あると必是所以あり。そ來歴を撈らして時宜よら素藤對
治の夙志と告て一臂の助力を頼むと思謀れる意表と五十二天素も吉弟兄の它者
毎も解示して和殿の歇店と惰地を尋ね甲夜より五十二天素も吉が那裏の奥庭の情
入らる事の動靜を偷聞するが政本視の忠生口と素藤が館山の城を籠取らり一とりの

再叛の爲体と和殿敗筆を知らず。然る今宵水路より那地に於て素藤を一個も漏れ謀
伐せんと茲解纜の順風を專ら一路兒們の閑談の事九頭末並河鯉氏と石龜屋
師弟の事その大畧とせらる五十二天且宿所の來て那裏で所寄支の趣箇様々と報
去る我門兩個怡悦堪る時を失つ孰の日より宿志と遂に和殿の對面を
驥尾の幫助を頼むと思ふも然る寸功を左の右の思惟る五十二天素も吉の候
戸を近御隣國都會の地折々鮮魚を推送る快船西之艘と持り且他兄弟乾
兒們的渡海の快船と漕熟て風の好すの管ら十數里の波上より一時歎一時半の漕
走らると易くといふ然らざる船もて和殿と上總へ送らして我門も亦同船共明日早
天の那地に到ん疾る準備せよかと急し船を載る五十二天が乾兒も船を遠早く
漕ぐ者言かり然るぬも今番の伴を立て那館山の城攻の幫助あると願ひる。信
折ら素も吉の登崎氏の憶りる。同歇店來會を則館の御を澤を和殿の逸

與りぬる。河鯉氏に改名して政木大と名告る事。次因太師弟の願ひのまゝ軍旅の
 伴を饒さる事由り所果て走りてかの東へければ然るが急げと宿野を去り齊一推参侍
 ぬるの美海客ありて相伴れる二期の面目の上より先率も喃登崎主の使の威徳とて
 いふが執成ぬと逸時只管ち勸解れ景能も亦語を續て果敢る追口説き
 五十二太と素吉の久く地上平伏す頭を拾て親兵衛を瞻仰り又額を衝か
 ちる陳さす小可們眼あり富吉も筑波のゆき知と流瀨を掖り後悔至極願ふ
 廿廿心のいも饒さるが目今古屋田税の両大人の如く小可毎が快船の俗あり
 鯨舟を船毎船八挺建て風逆波を断る勢ひ玉と滾き像く走ると極て早
 開を四艘艦一廻りと這里の河岸に存り一艘八十餘名或二十名と乗せり我
 死伴仕る天明ぬ程那便路を浦邊の寄せと難く然るに這里の船が船毎
 皆九層の海船を順風を便りも走ると亦速り見事の利鈍を先查ると思
 意不儘とせぬと迭代り小の意を演て直実歸服の誠心の都て言語の見れ側聞ある
 照文の杖を親兵衛の向に揮き喃大江王卑職這回両館の死使るれと敢助
 言とあるあわねと逸時景能の情願も及五十二太素吉とや請ふ趣も有理
 あり然し思ひぬる親兵衛點頭てるも愚意と相似り田税甘屋のありも死
 生に所死せり一且論せがも又存命て做事事わ前に行と償ふ足ん晩生一個軍
 功も負んと拒んや分説を故るあね同船と饒さ下這里の船公高工毎の那地
 けん影系を五十二太素吉の請ふ儘と他船も用ん勿論いも館山の俱
 去かすも何をも安房上總下總掛て千餘城を管領ある大諸侯の沙汰とて幾
 一郡一城の妖賊素藤を討め漢戸破落戸は軍陣におて國ある人るは似
 非如軍功ありて世の胡慮かきん今宵船と獻き明日館山の敵と攻るその義
 異るべもは儘れ五十二太素吉の船便宜の浦敷敷て一人の升陸走る館山の

城破れ細と漏れろ残黨の來り津を求るもあつ捕捕て獻き然そ一人も殺さず那
 城内の兎徒の外夷濶の良民も駈入られて已とせぬを從ふあえんを殺さ不便るを今
 殿臺の陣堂の討隊の大將荒川清澄小森高宗田税逸友們と俱に千數百騎を
 從て敵の壁を破り戦を起し侍れ御方の陣堂謀合を内外より攻め全勝する
 一田税甘屋の入りし五十三太素吉們もあゝの意を以て共軍令を守りと誓言つ
 俱してその船小乗ん然ぞ這里の天を明きも伴ふるも乗るるも答を听ん甚麻る
 理り切る仁者の指圖に誰れ一個も推辞を就中逸時景能の歡び勇て親兵衛の礼を
 做し孝嗣と次國太師弟の名告とされ又五十三太と素吉們も下知を兼言して乾
 兒乾弟小僧も照文も亦扶けていひ思ひ程の鐘の聲淺草の方小乗る
 傳まはる四更の親兵衛天を瞻仰て這夜の月、曉五更も没ん天明て我船上總看る
 進退極く不便の大家船小乗るもあゝの意を以て照文の別を告て事執る親兵衛一名と借ん

い照文異議多しその意不儘しと先竟る兩個の親兵衛と擇て親兵衛不謀けり小程の
 大江親兵衛の逸時景能孝嗣次國太師之と兩個の親兵衛を從て水際の船小乗る程
 照文の残れる親兵衛と伴當と前後不立馬頭上小乗を送りて親兵衛を囑留大江主車
 職も同船して本國に罷りて館への段を穿え上り思ふも、大法師の法定は御代香
 辨れ去向を尋るるも及ばず歸藩の折大功の秋を事度下りて親兵衛を
 とも勿論のゆが和殿尙我義兄弟の再會の日もわが我上り始り、詳不告ぬ申夜よ
 久く船台坐席と借りて及て要する席料は程小心囑まであつねと答も火急の別
 路逸時景能孝嗣も又次國太の鯽之も比照文も向て別を告る程五十三太と
 素吉の言の第一番の快船小案内を親兵衛の同伴五名親兵衛二名と俱に囚りと乗程
 して二間程と坐し占れ皆同五十三太素吉們水練連者の杜伎八名八挺の艦成
 建列して左右別れ漕舟を聲勇多し艦拍子も揃多し月の都鳥墨田河原と背か入

江不續く澳津波揺れをせり程の自餘の伴船兩三艘又五十二天分伏家の社仗
或八十名二千名打乗々々艦と轉らして漕連ねる。武夫の數を其身中傳言の事
ある世に未引潮早追ひ風疾と宛前の像く彼御の看張詰る。彼回隠も
飲水底のよとをれば瞬間の影もあらずなりけり。

第百二十回 天資神祐石門窄戸と劈く 大江親兵衛魔と破り賊と夷ぐ

小程の這夜親兵衛の乗る快船中の快船を等工も覚あ者母多不猶姫
神擁護の眼尾を一回ひひん然と狐龍の真助を疾く走り至る前似天飛鳥
も速くれば船内穩るれ地上に坐する不異る然に戰飯の酒酌をどし五十
三天素の吉準備あり。札と身甲掩膊脛衣短槍も都て人數を合して執容もけし
逸時景能なる親兵衛並孝嗣次國大卿三門の分り與合。軍裝を敷きたる

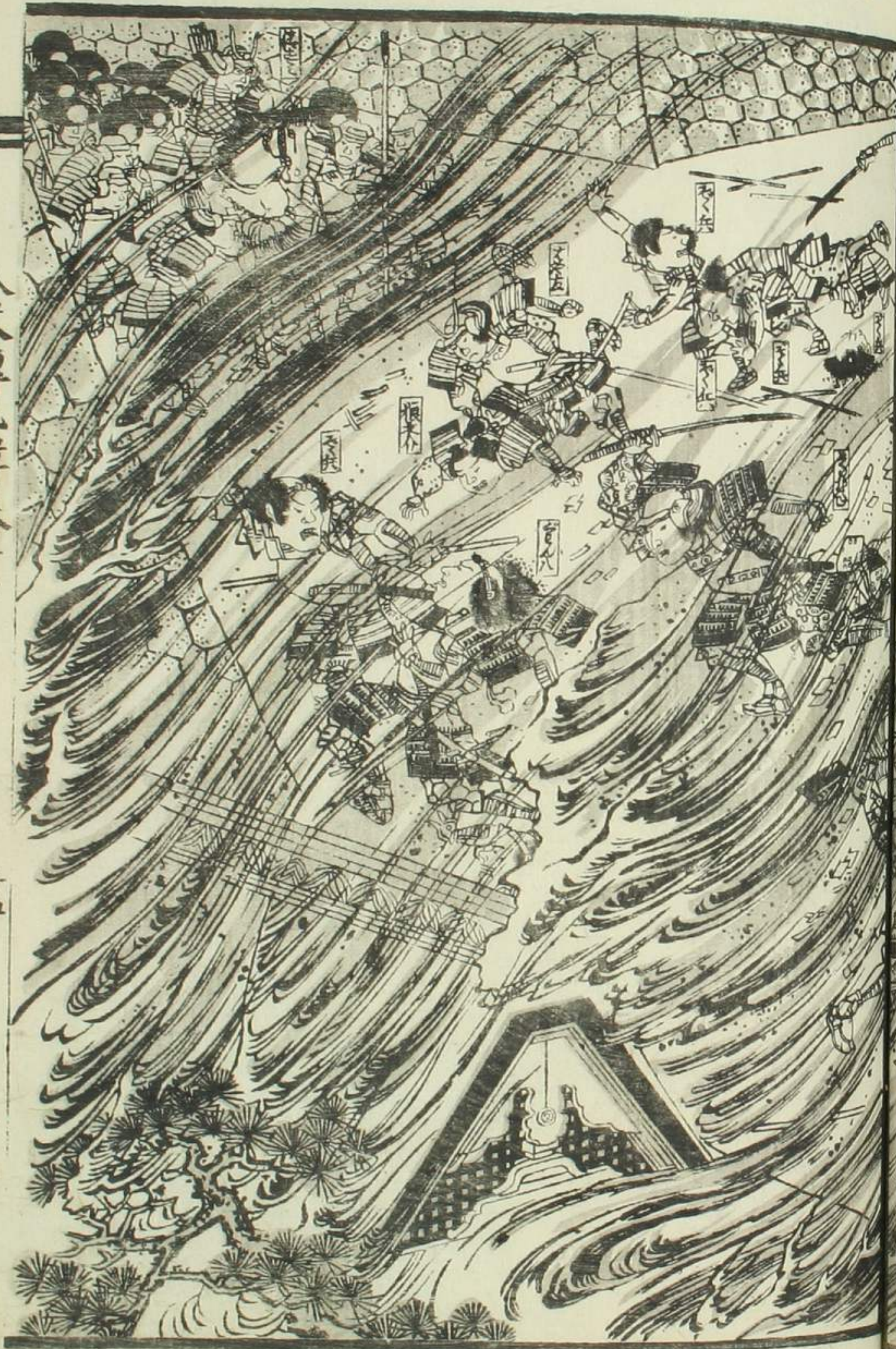
女か兩個の夥兵ハ謀の準備のれが支送る限りけり。却説の曉天の船の上總の夷備
る館山程遠く及便宜の浦の漕着者六十二日月既お波りて天の明ると思し時侯
親兵衛の船を五十二天と素の吉の箇六名を儘に送り置て大家濱邊不
ら登る高個の夥兵ハ當初夷備の莊客をけり這頭ハ熟路ると親兵衛
おれをうち下すの夥兵を先不立く磯山重に捷徑も連り路次といふめら夏の
夜も明る早くと館山近く来れば既かく和明も有悠り程親兵衛の船
中を寫りし書翰と兩個の夥兵不遠與して汝達の殿臺を御方の陣營不赴
死。六の書と荒川氏不遠去。却口状ハ箇様とと密議と具外不事多夥兵の
ある果て別殿臺へおけり是より親兵衛の逸時景能孝嗣次國大
卿と共都六名悄不館山を城の副門を来ける程天の既不明れども後不
思ひ合まれば伏姫神の真助も朝露深く起籠る。肩野干舌鳥夜不似

鶏も晨も鳴る。鳴る。故に館山の城内の四門を成る賊兵の明るを知り
ありけし最貪馳の時侯る。寄隊の殿臺中へ攻代つてもまゝ一は安んず馴て
心怠り篝の焼ぎ背と合して皆打馳りて在りければ敵の副門の道に身を夢中知
者るるに。介程の親兵衛の逸時同伴の士卒五名と徒て政本狐の誨る副
門の邊の來てる小城門より良の方百歩許の岬石連の立る岡ありて岡の平腹の
最大なる石の半分は土に埋れる。昔昔滑らぬ鳥草又那這の生雁も此の邊へと思
お。那仁の字の靈玉ある護身囊を懐も。合中ち念へて徐の伴の石を拵る奇る
るる這大石忽地中より両箇の列女。左右へ開くと三尺許奥の正可の虎中。山洞の
像くそへ逸時景能孝嗣們次固太の胸に胆を潰し立寄り齊一内を差
闖く親兵衛の合笑る。支徳々と耳に示せば大家の感嘆して。原來這里の
昔の城主が作る活路あり。這巨石の塞に藤原の知る後ある。

と。這石を合除くと軌のあ。井と今九角用。面個の列女は。靈玉の奇特を
する不思議。俱の情語。中。親兵衛と孝嗣。政本狐の誨違ひ。傳便
宜と。併役行者と伏姫神の真助。且感。且歡。親兵衛と先
找して列女石の向より奥深く入る程。相従。逸時們五個の兵。每。續。内。找。入
る。洞の高。七尺許。地道の幅。二尺餘。然も。路直。り。れ。各。短。鎗。を。携。下。か
ち。毫。も。障。る。り。の。あ。ま。い。と。圍。け。れ。も。凸。凹。さ。れ。れ。跌。れ。も。せ。ま。せ。と。易。か。り。既。し。て。二。町。あ。り。
亦。復。護。身。書。表。も。拵。る。ま。い。這。石。も。列。女。用。と。初。の。如。く。前。面。へ。出。て。四。下。を。觀。る。あ
こ。こ。這。里。の。館。山。の。城。内。の。第。二。郭。も。高。堀。の。石。垣。の。下。に。け。れ。案。内。知。る。逸。時。景。能。准
備。の。火。葉。の。篝。火。の。滅。殘。す。と。多。程。して。先。柴。薪。庫。の。火。を。放。り。咄。と。颺。言。聞。の
聲。も。城。内。の。賊。徒。駭。味。は。る。原。來。敵。の。ち。入。り。る。大。勢。も。あ。り。下。推。包。も。皆。擊。

捕れと罵らる鎧引提り走り蒐る逸時景能孝嗣次團太卿三們各敵を引
 受てと鎧下小幾人歎伏々々聲高々々群賊知事素藤と復活を捉へん為
 大江親兵衛も在り田税逸時甘屋言能此在りあふあると名告掛る勇力士の
 鎧頭當るるあふあふの賊徒の度失ひて原來大江が又あつるを逃けんと
 る不敵のヨア少朝露の辨りもく辟易して敷る者もヨアの有り候り程小親兵
 衛賊徒を躬方の勇士們あち任り素藤と如椿を疾捉へんと素藤の熟る城を
 其身の口單指し敵と素藤後堂あち入りける然る又登桐山八良干と浦安牛助
 友勝の曩小傳より是時ぞ獄舎在り開とち守る獄卒們的敵のち入る
 志不駭怕れ那地置けん在るもの一と悟りてあち城內猛可息劇き兵隊
 間近く燃せ大刀音人の叫ぶ聲あち合ふとて原寄隊の攻破られて城の口
 今落ちるあちあちんぞん疾這獄舎を脱出て賊徒を敷る會私言の恥と越の雲と

孰の時を期まふと俱あち焦燥も身あち鐵の合もなる且獄舎の堅固も此の
 罪囚を雜置をまの死囚牢在るの口友勝と良干の口は這那一箇もどる兩
 個の間の板壁あち力と勘するもをけりあち程小前面の守屋
 兵火移りて見る間と倒れ掛る柱小獄舎の戸口と柱は八寸角の筒子戸を
 忽地小打碎り友勝良干相執りて天の資と這那俱あち外面へおれも身小
 掛れる械見あち供不栗石と拵合て力と極め権は棄て俱あち四下とるあち
 焼る鎧守屋の邊と建て在りあち合て腋袂と敵あち共侶連り小
 找む路の傍活路を未難けん在りむ兩個の賊兵あち良干友勝があち見と驚
 慌て逃るとけの兩個の勇士奮然と走り蒐る鎧下小件の二賊と突伏せその武具を
 利突刀と奪りて逃るる身と固め御方の勇士と一緒あち做り各あち賊徒を
 敷るんぞと找む前面の賊兵約莫十名許寄隊小趕れとあち朝露の



八代将軍 徳川吉宗

十五

八代将軍 徳川吉宗



館山落
城賊徒
伏誅と

八代将軍 徳川吉宗

八代将軍 徳川吉宗

齊同のさるる隊の頭人の平田張金作與之と奥利本膳の良干友勝
 權勇と先立る賊兵を失場四五名突伏せて良干の金作と友勝と本膳と
 鎗を合ら戦ふ程本膳の友勝の腰に刺れて忽地の醫居の控と依びる程
 良干の亦金作を突伏けし這両勇士の鎗尖の殘る賊兵五六名退んと其後
 寄隊の進んたる路もこれの大家地上の陥れ降人をもける然良干友勝の
 這賊兵の吩咐尚半死半生の金作本膳を搦て牽きて先推卒
 は、馳、速時景能們と一隊の做らうと告る景能速時於て和殿們的の始よ
 了とされるふあわねと眼と涙と一幸あかると相祝し俱賊徒之攻伐も介程
 礪時願八浅木碗九郎奥利根之众們的思ひ大坂親兵衛の士卒
 徒へ襲ふ城の入りぬと呼る聲の驚慌て武具固めてそれ朝露深く尚
 聞け敵の線五六名多ると知りし周章草ぐも然然の賊徒の

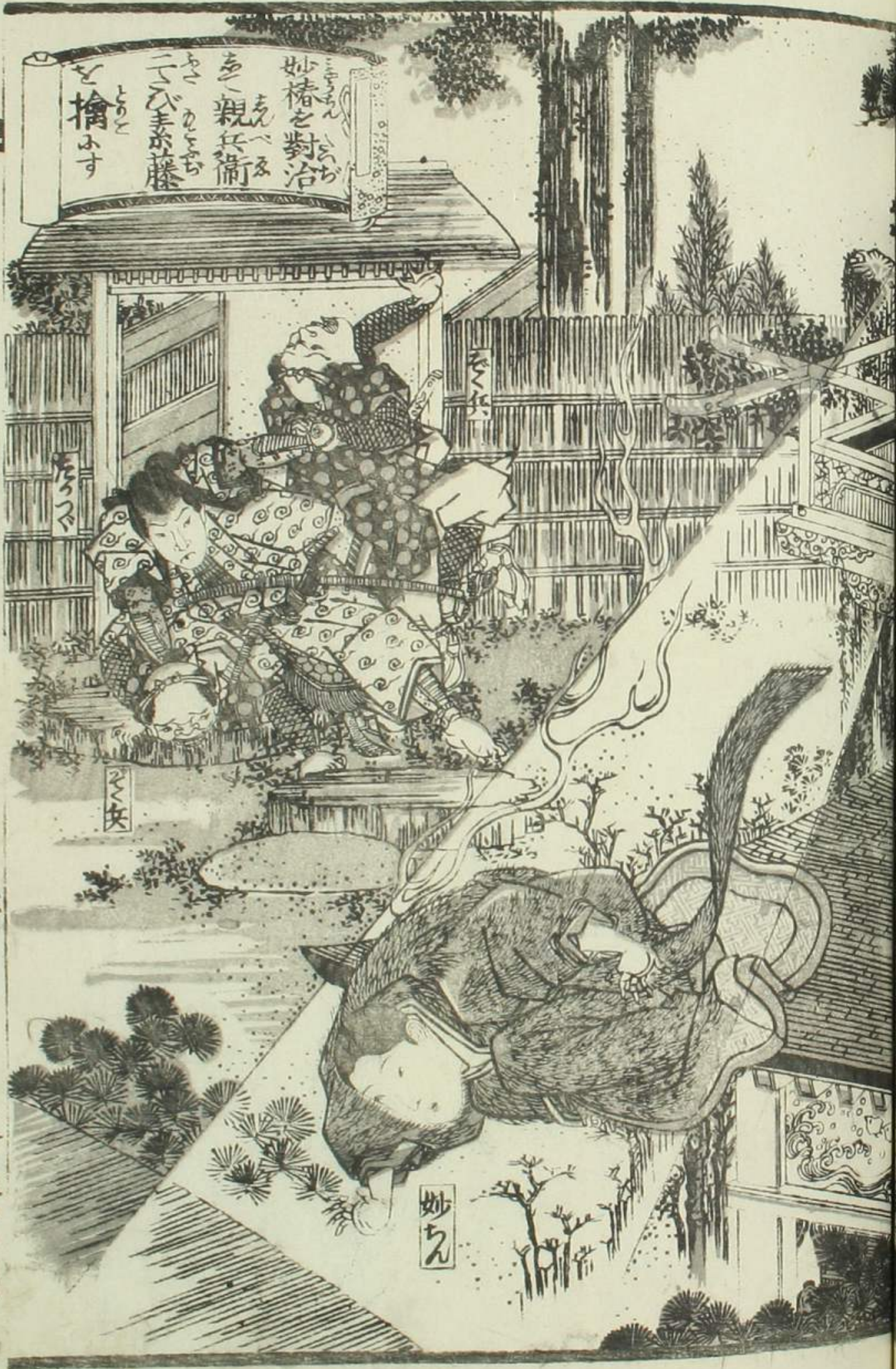
大江の一字づら雪より胆落て防戦と思ふ擬勢をけられ路も與同士
 殿もと麻の葉の或城の恥入れる勇瀧の良民生拘れ守隊の牽る者も
 く、房も残れる賊兵の兼んと思ふ堀を向上して命を免れんと欲する者も
 殿臺の寄隊の陣營荒川兵庫助清澄並小森但一郎高宗田税力助逸友
 們的の朝憶の多く大江親兵衛が謀状とて然と大坂を移す士卒を率
 錦山推寄の程忽地敵の城内の火光發り煙中天の沖り清澄とこれ相て原
 来大江親兵衛們の既の城内より入り暗晝の煙の颺を兵每續けの隨の一千餘
 騎を二隊に分ち正門の清澄逸友七百餘騎を推寄又副門へ小森高宗と大将
 を五六百の運兵を授て同時の攻伐しむ勢に死脱免の像を馬を走し塵埃を蹴起
 事折る城内の賊兵の徒大頼の崩立て或正門或副門便宜儘し城戸を開
 けて脱れ去ると外面を攻寄寄隊の軍兵の聲を颺を垂して透向のあ

自ら欄入るは賊徒の進退を城戸と閉んと欲されば後身躬方柱を以て門戸と動さ
 くもあま訓門も亦かくの如く前後の敵を交れど撃つ者も數ぞ知る屍伏累るはと做
 去鮮兵流れて泉の似たり有徳一程の逸時景能友勝良干孝嗣們並み次園太卿より
 思ひの隨に殺靡ける大刀風刺はけられ名も賊の頭人を或撃み補り或生物の降参を
 城の長兵を前後に卒相從て逃ると趕頼り推包て漏る緊く攻まける井の中も若
 嗣の軍後堂ら入る親兵衛が幫助を思へ敵を趕棄て宸も家も程も素藤
 之近習兩三名既が寄隊のち入るは知るはも倭とて未報る未進まけれ身と脱れんを
 して東邊を考嗣ゆちと走り鬼の矢場を二人を斫け一人を生拘りて隨即此御導の
 幸の樹柱間の奥庭の檜の面折らと蹴開けて書院の邊這り入るは是も先大江親
 兵衛の案内知る城を以て素藤と妙椿を走らせしと思ふを敢餘賊の機念せし躬
 方小を逐れて逸早く身軍後堂へ赴け素藤と素藤と素藤の下の夜勤の女

房の西三個臥さあり起らん程今親兵衛が来ぬと見て吐嗟とを駭けて聲を
 立てり欲する皆戦れ齒も合を親兵衛他們を信と睨へて若們毫由聲を立て片端
 よも皆首を刎れ我大江親兵衛と素藤妙椿が那里に在る疾告知其甚麻とて急通
 く回れて阿とをり怖れて速るは合難る年中半歳年あるの女あり頭と拾ひ
 かも親兵衛と瞻仰するは僅か上を指せて頭の殿の処臥房の這樓上をけり
 か天助屋公も那里に在る昨夜も亦以酒宴不酷く更闌たりかざり覺さるる
 らの賤妾們的夷滿の民の宅着せゆりと理るも召合もれて給事表はれも逆謀
 あり干らるる鏡さむのひかるとと親兵衛うち所々好々も是もあらざる今一霎時
 音もせむとせむと階子ゆひの偷歩する登る樓の第一の間の素藤が臥房で次の
 間あり之之間ありの朝素藤の昨夜も刃三過る時侯酔り臥房へ入りし妙椿と
 枕を並べ天の明らと知りし妙椿と急搖驚きて屋相公も覺る城内失火

あつゝ煙這方へ吹靡る秋衆人噪ぐ聲きき。意も寄隊も籠れて。攻破らるるをわづ
んぞゆめを喃々と喚覚せ。素藤岸破と身と起し。その安らぬ久く敵の
寄せざれば火も放られ。歎きあふ失せぬ。うげん。うげん。掌拍鳴り。誰う在る疾
病よと喚ぶ。心もなげに心の焦燥。遠く枕方。腰刀と搦合。身と起えさせ
程小階子と登り。来身者。素藤を聲と被て。其首へ来ぬ。誰を。同ふ詞。のり
え。果ぬ程。屏風を托地と堆開く。これは別人。大江親兵衛。素藤吐
嗟と駭怕れて。逃竄れ。欲まらぬ。外面皆縁頼。榎干高。連り。縦一時。小戸
障子と蹴放り。その翅を身の脱れ。果露路。刀の柄。拭て。寄せ。研んと。疾視
たり。又妙椿の親兵衛。見し。横と頭。被り。狩場の野鶏。草小隠れ影。驚く。東
駒の藻。小竜。異なる。戦く。随錦。綉の夜被。脊筋。波打ち。生死。海。息の。吻
あ。何。阿。瞞。の。身。され。名。跡。の。六。字。の。出。九。字。の。印。は。断。ず。珠。數。数。術。の。縮。む。

て。脚。解。入。る。穴。飲。一。思。め。智。の。機。関。絶。て。拵。く。も。る。親。兵。衛。公。二
そ。と。冷。笑。ひ。て。素。藤。を。忘。れ。秋。衆。裏。面。主。の。仁。慈。と。若。們。を。思。敵。の。折。我。亦。以
後。と。復。び。て。猶。復。叛。く。と。あ。の。人。も。借。を。我。身。單。り。誅。戮。ま。し。と。期。と。推。す。の。る。我。を
甘。ん。下。美。る。が。那。妖。尼。奴。の。哄。誘。され。再。叛。忤。逆。の。小。利。を。以。て。城。の。據。る。と。絶。し。十。餘。日。天
罰。踵。を。旋。ま。す。今。又。我。の。捉。ま。る。み。つ。ろ。招。け。悪。報。の。使。る。と。思。ひ。ま。な。れ。妖。僧。奴。の。這
里。半。若。の。老。狸。の。精。と。と。非。理。の。怨。の。邪。術。と。憑。と。反。回。の。幻。術。魔。風。の。咒。法。聊。驗
あ。と。我。明。君。と。言。う。て。謀。り。我。を。遠。離。ま。し。一旦。寄。隊。と。敷。破。り。衆。と。資。て
功。の。り。と。思。ひ。誇。り。の。夢。の。間。や。靈。玉。を。我。身。復。り。取。若。不。測。の。邪。術。と。賢。君
虞。臣。と。欺。た。り。も。我。靈。玉。と。欺。た。り。今。も。我。の。敵。也。人。畜。を。差。あ。め。若。們。の。皆
人。面。獸。心。假。の。形。貌。と。装。ふ。頭。顱。既。に。這。那。共。覚。期。と。せ。と。詞。激。し
罵。れ。素。藤。休。を。抜。敷。む。向。膳。研。と。閃。め。刀。と。親。兵。衛。踏。踏。と。逃。ん。け。は



八尺傳二冊卷下

二十

文楽全集



八尺傳二冊卷下

文楽全集

其の碗九郎と喚做る賊の頭人の大江主伴れる孝嗣主小敷れある人那人さるを
 始より好敵するも斬棄れし。首級を捕るるより一六小可る惜く思ひてあはれその賊
 徒の首級の後の標識せん。與小卿三小吟付て片耳と熟しひひた素ねあつて分明あると
 公と清澄うち听てその用心と嘆賞あり。隨即雜兵幾名お下知して件の耳を首級成
 素心てりて来よと遣う。却次團太の孝嗣が来歴素生と向ひ。次團太の親兵衛小
 听方趣箇様々と政木狐のりまでも。崖略と報るるを清澄の之感嘆して。あはれ
 那人の宣定小義士の勇者不徳も故主の與ふと。功名を貪るる今の世の易易ら
 去因てあり。お汝達も大江は由縁あるんと。公と逸時景能の。恥る面色を。御粟水路を
 事折親兵衛小解示され。他們師弟の義侠の顛末及五十三太素の吉がる。身は来
 路徳々と告て先非と。陪話れ。又友勝と良干の不思議小獄舎と脱出。兵火の奇
 特を訴る異聞。清澄駭嘆して。和殿兩個の。先と極におさんと。思ひて。あはれ。

ぬがう。中獄舎と申の。必是伏姫神の。真助と疑ひ。備ある。破り。幸ひ
 わき。和殿の獄舎と共灰燼と。今ゆ。思ひ。御方の得失。皆是神慮。依る
 の。然。昔。田税の前。行。今。番。軍功。鮮。小。わ。償。小。足。又。這。次。團。太。卿。之。是
 北。越。の。市。人。も。義。侠。の。南。弥。六。出。東。介。と。伯。仲。を。況。大。士。小。縁。あり。功。あり。異。日。恩。賞。多。く。是
 と。討。め。られ。て。次。團。太。師。弟。が。不。勝。の。鉄。ひ。の。ゆ。え。然。る。逸。時。景。能。も。又。友。勝。も。良。干。も。面。を
 起。し。心。地。を。本。意。ある。言。と。思。ひ。け。有。徳。一。程。小。雜。兵。們。の。耳。と。熟。れ。賊。徒。の。首。と。玉。を
 十四五級と。申。恥。て。実。檢。小。入。れ。け。孰。も。名。ある。兎。當。多。く。果。と。碗。九。郎。の。首。級。も。并。が
 中。小。在。り。何。人。の。所。為。を。見。燒。殘。る。築。垣。の。重。牆。の。音。竹。を。左。の。耳。より。右。の。耳。まで。刺。串。は。て
 在。り。清。澄。憶。つ。ま。嗟。嘆。して。這。淺。木。碗。九。郎。嘉。俱。の。故。城。主。小。鞠。谷。如。滿。が。諸。第。の
 家。臣。を。け。り。小。の。主。如。滿。が。素。藤。小。謀。れて。終。を。截。逆。小。合。り。折。與。利。本。膳。們。と。共。侶。の
 雙。言。小。降。と。恥。と。せ。媚。を。献。一。逆。を。資。けて。重用。せ。れ。惡。報。靚。面。を。死。小。至。て。竹。槍。に

刑小笠原の真面目。是天誅にあらずと。公の大家有理と悟りて俱の嘆息をうける。浩
 然。這城内の良民の折をうける。と相欽びて或の部と兵火をうけ滅し或は落る賊徒を
 捉へて寄隊へ献する生口の中より素藤の囚牢司海松其軻遇八と名多の獄卒七八名あ
 り。清澄隨即軻遇八を牽出きて御前野幕野幕又名幕小作。あせがん。ふ。沙雁太が首をとり。南弥
 六が首級代。事情を尋問す。軻遇八答て然し小可い故城主小鞠谷如満が時より仕
 たる囚牢預でひり。甚田が僭立及びて勢ひ仕まるとも然し職分卑くて性も亦愚
 らし。那人の兇暴本者侵ふ干りするゆひに。常の冤屈の罪囚を情地を憐みひり。往日南弥
 六が首の靈ありければ後の祟の害怕し。面親聊相似る。躬方の戦歿見沙雁太の首を
 とり代ひり。國主をえ為と思ひもひり。甚田を辱す。思徳もゆる。只那死靈茂
 鎮んぬ南弥六が首へ。情地獄舎の北の方。悠々の地。埋其井を。表小松と我ひは。尚
 疑多く思召さ。世敷して亦肉世相違ある。うもひり。といへ。故老の莊客們。為清澄を告る。

 甚田が政虐あるより罪を公民を虐げ捕へて獄舎小敷糸をこすりて軻遇八情地を憐
 愍。答を緩くあひひら。の友勝良干の然んと。心て共侶の清澄を報る。這軻遇
 八の母は素藤を赦免の折舊職を復され。素藤が又叛て重て這城の據る
 及て亦逆賊の徒。頻逆向背の理と知らず。最愚魯なる者。れども天性婦人の仁
 ぞ。罪囚と憐み。その受の我獄舎在りて甘んじ。所といふ清澄點頭て現
 軻遇八がる。所御方の與せられ。御前の南弥六が首級と瘞め。良民並に和殿們。慘
 く當らゆ。殊勝の事。獄卒們も共侶の頭項を續き。あはせ。とて。郷縛の素糸を解
 きて。罷立ね。と饒されて軻遇八を獄卒と。俱に額を衝き。欽び。兼。ち。連立を退ける。
 軻遇八。その下の話。是より先の清澄の親兵衛。又素藤を生物。り。り。と。知
 して。扱ひ。あ。て。對面。い。そ。先。殘。黨。を。追。伐。し。七。城。内。平。定。せ。り。士。卒。小。四。川。を。成。り
 きて。親兵衛を。あ。り。時。移。る。ま。て。あ。り。ま。せ。今。も。る。月。書。院。の。庭。に。在。り。と。い。ふ。

清澄即便高宗逸友逸時景能友勝良于們的六勇士と俱に次因太卿云を従
 へ。その里に赴きて親兵衛は對面。且孝嗣が功を譽めて妖賊伏誅の勢を舒るを
 當下清澄が心を大江主前言違ひを玉歩も旋りて復素藤と生物の
 老武術勇畧今昔を雙獨素藤の事を賊徒も送る討捕られ做その事を一惠
 老之聊画と起す。似する皆是和殿の賜の宜不智きり。この親兵衛は晩生
 何もの徳ありて然る褒賞預らんや妖賊一時勇げられ當館の御盛徳并賢老
 諸勇臣の寛と守り功を尊んで事のおま及ぶ。那見ある素藤は晩生樓上の投降
 老政木生を捕捕し。又那妖尼妙椿は我靈玉の光を撲れて樓より滾落し。那地
 鬼けんたを多し。尚那奴と走り。又妖辭を遣はせ。鬼心の安らね。野兵衛は
 吟て政木生と共侶庭面と幾番妖漏を隈り。涉獵去程の憶も時想りて和宗
 對面還歸及及びは。ある世の常言の燈臺及て下階。この恰似るゆゑに。

清澄は下の大に安んず。右の淨の盤の指一示を。那妖尼奴の樓より是の内へ陥り。死
 きて本形と見られ。底深ければ心屬る。樹の蔭草の裡との。幾番とく。索の可
 惜暇と費して方僅憶る。見出さ。と。邊く淨の盤の頭を立て。城
 さ入れ。項を抗して引提生。大家い。く。ち見れ。最大なる牝狸の既死。う。あ。有
 け。事の奇怪。是の。背の毛。焦縮れて。模様。壁言。焼画の像。如足。玄田生
 發菩提心。と。八箇字の見れて。鮮明。讀れ。人。人。訝る。井。が。中。親兵衛。も。亦。這。八
 ト。字。と。の。筆。と。見る。の。然。然。驚。驚。氣。色。を。清澄。們。向。向。て。晩生。昨日。野の
 原。中。政木。老媪。ふ。安。ん。ず。と。あ。り。件。の。妖尼。妙椿。む。八房。の。犬。を。守。り。ける。安房。の。富山。の。牝
 狸。それ。那。毒。婦。玉。梓。が。餘。怨。その。身。を。残。る。と。て。國。主。御。父。子。を。恨。ま。る。と。素。藤。と。哄
 誘。遂。に。兩。度。の。兵。乱。と。起。り。て。今日。至。る。の。故。箇。様。々。と。那。玉。梓。が。怨。心。火。昔。年
 八房。の。犬。と。俱。に。役。行者。の。利益。盡。て。既。に。解。脱。と。い。れ。も。當。初。這。狸。兎。も。黄。縁。と。他。

餘然の尚耗ぎと在りけるを鮮示きて又いふ。是亦由て思惟る。今この牝狸の背毛の
 焼縮れに我靈玉の光を撲れ跡ありて自然と文字おされる。んを所以を什麼と推し
 昔の八箇の靈玉如是畜生云云の文句見れより八房の犬を佛果とて後又仁義
 八行の文字は愛のぬと傳へてあつた。牝狸も靈玉の光を撲れ死まふ及び。又靈玉の
 初の文句如是畜生發菩提心の八字を鮮示さる。と狸兒と俱小玉梓が餘
 怨の折解脱。菩提心に至るを明々地知りぬ。是亦亦只役行者の神
 変不思議の利益益奇く尊く惶々也。又この狸兒が勁風を起して寄隊を
 破り、雍尾龍の玉を持れど抑件の奇玉、往古無仁天皇の時丹波國桑田郡の人
 民に、雍尾龍の家を飼ける犬の名と足往と喚做さる。昨殺者、貉兒の腹より出ける八尺
 瓊の勾玉といふものも亦政木狐の妙知ることなる。のまをさる。あつた。御前妙椿を
 捉へ折那身の裳脱て樓より滾落り。衣と項襪の護身唐表をば依咱們もあつた。

第一輯の
 桑田郡の初
 輯の八天
 縣村の後
 筆士
 桑田郡の初
 輯の八天
 縣村の後
 筆士

方纒命降々用はけ。果と件の勾玉あり。是を愛と懐と。玉と半の由来を鮮く。と
 叮嚀せられ。清澄と首を。高宗逸友逸時。景能友勝良千の。又次國太の。卿三の
 兩個の親兵の餘の士卒の感愕然と奇術。馬の靈異の感せらる。事皆大江親兵衛
 が神助智慧の徳も。世も人も提れ。亦今。この。一嘆賞を。り。先
 生の口。皆珠數。数。格。半死。半生。の。日。今。妙椿。が。為。体。見。る。も。あ。り。え。る。の。あ。り。

去。這。里。不。在。る。寄。隊。の。士。卒。も。及。願。人。の。元。黨。の。後。中。限。を。知。り。然。り。又。親。兵
 衛。の。高。宗。逸。友。友。勝。良。千。の。再。會。の。口。誼。陳。を。軍。功。を。讀。り。良。千。と。友。勝。の。兵。火。の
 奇特。獄。合。を。事。修。と。告。る。と。當。下。清。澄。は。又。親。兵。衛。の。考。嗣。が。功。を。あ。り。て。敵。の
 首。を。合。り。心。標。の。愛。を。并。と。次。國。太。が。の。惜。と。耳。を。熟。て。表。標。も。あ。り。その。用。心。の。便
 利。を。と。云。云。と。報。知。す。孰。も。要。る。毎。入。就。中。政。木。生。の。大。吉。の。亞。流。と。い。ふ。一。定。の。心。

且の願賞讃よりか。親兵衛満面うち笑れ。然る今番の亦神と人の資助と。
 とあり。この城内昔の人の知らぬ活路あり。政木老嫗告げて。情ひ入る。
 去る折地道の石と立地不辟。大奇事あり。靈玉の神助。裕と云恰ら。事毎小君
 侯御父子の御洪福に依れる。素藤既捕捕られ。妙椿も亦か。如く。晩生が仰受
 たる一椿事の果。明日未明立きて。自餘の太吉在外を索ねて送る。俱とかり来ん。
 とら。清澄空あけ亦太く性急。和殿今番も大功あり。館見参入せし。那地へ
 て遣られん。先素藤。林獄を。為強黨。捕捉入。是這方来。多誘ひ。素藤
 們を獄舎送り遣。妙椿裡の亡骸。皮と遣。燔棄。と隊の兵。毎吟。親兵衛と共
 保。當坐の勇士。相傳。と郭内。巡檢。那地道。の邊。來。畢。竟。清澄。們。
 と。活路の奇。又甚。麻。話説。ある。開。卷。と。更。且。下。回。解。分。を。聴。ね。か。

南總里見八犬傳第九輯卷之十六終

南總里見八犬傳第九輯卷之十七

東都 曲亭主人編次

第三百二回 勲功を譲りて親兵衛法會へ赴く 賞禄と後めて安房侯寒御を温む

却説荒川清澄。們。大江親兵衛。と共。侶。館。山。の。城。の。重。郭。と。那。這。と。巡。檢。は。
 那。活。路。の。奇。又。甚。麻。話。説。ある。開。卷。と。更。且。下。回。解。分。を。聴。ね。か。
 是。地。道。の。門。戸。石。二。片。不。裂。さ。り。と。所。け。る。毫。も。の。跡。多。り。一。か。清。澄。們。
 疑。ひ。の。元。親。兵。衛。孝。嗣。逸。時。景。能。次。團。太。卿。三。們。の。五。六。名。俱。は。這。地。道。よ。り。城。内
 入。り。毎。の。訝。り。思。は。る。も。く。倘。そ。の。地。方。の。違。つ。秋。と。枝。と。近。つ。て。件。の。石。と。は。ら。く。と。又。と。
 る。不。列。表。の。處。か。の。づ。舊。の。如。ふ。合。合。け。ん。石。の。真。中。筋。筋。あり。才。の。迹。透。り。一。か。親。兵。
 衛。急。次。團。太。と。卿。三。を。走。り。く。御。入。り。る。城。外。の。地。道。の。石。と。を。け。る。一。霎。時

ありかゝる多し。却親兵衛は報もせず。那里の石も。這裏の石も。裂きや。処愈合ら。又入る。うもい
る。との系親兵衛領。清澄们。うち向ひて。既示。し。後。石門。裂開。け。て。
嚮ふ。出入の自在。より。我。靈玉の。應驗。も。畢竟。役。優。渡。塞。と。伏。姫。神の。真助。
る。ま。い。這。石。又。昔の。如く。片。合。ん。と。い。う。あ。ら。う。も。い。ん。と。備。列。衣。れ。る。俵。も。わ。ん。賊。徒。
あ。ら。う。脱。出。て。網。を。漏。る。も。ま。う。ん。と。然。る。便。り。を。と。ら。う。則。御。方。の。大。利。也。神。助。眞。福。
ま。ま。奇。せ。お。復。治。易。か。ら。う。ん。と。い。ふ。大。家。然。ん。と。心。て。存。一。感。嘆。ま。り。け。登。時。親。兵。
衛。又。の。や。う。這。活。路。の。ま。り。改。木。机。の。忠。告。を。昔。の。城。主。作。り。と。後。お。這。巨。石。を。め。く。
寒。だ。い。の。知。り。な。れ。も。何。れ。の。故。か。寒。だ。い。も。あ。ら。う。漏。れ。け。れ。今。は。送。感。動。か。
と。是。時。徳。入。る。者。の。や。あ。ら。う。隨。從。の。雜。兵。們。を。召。近。づ。け。て。尋。ね。し。知。れ。り。と。い。ふ。者。も。う。り。き。
ゆ。め。荒。磯。南。弥。六。弟。阿。弥。七。の。夜。南。弥。六。が。館。山。の。城。へ。入。り。て。素。井。藤。の。旗。を。肩。へ。て。
那。身。の。來。介。共。侶。の。戰。死。の。事。の。風。聲。を。も。も。傳。へ。り。よ。り。素。井。藤。が。出。宗。と。怕。れ。て。家。を。
棄。宅。眷。と。俱。殿。臺。を。寄。隊。の。陣。營。身。を。寓。て。下。を。告。て。愛。顧。を。請。ひ。清。澄。
肇。て。南。弥。六。一。個。の。弟。あ。ら。う。と。阿。弥。七。二。男。増。松。を。南。弥。六。が。養。嗣。お。せ。し。と。約。束。あ。ら。う。
ら。ま。の。詳。し。さ。知。り。と。仔。細。お。及。び。妻。も。子。も。を。俵。陣。營。に。留。め。て。杖。持。た。せ。し。た。の。日。
阿。弥。六。の。雜。兵。ら。ち。交。り。清。澄。が。隊。に。後。で。俱。に。城。内。へ。入。る。と。浴。て。伴。當。の。中。に。存。在。の。件。
活。路。の。濫。觴。を。方。僅。親。兵。衛。が。向。へ。及。び。か。さ。も。く。報。る。中。小。可。が。曾。祖。の。時。ま。と。這。夷。
瀟。郡。を。普。善。の。乙。接。の。村。長。を。い。ひ。大。父。の。時。より。家。衰。へ。寒。民。お。做。り。ひ。へ。と。も。
些。々。の。舊。記。も。残。り。家。の。口。碑。も。傳。へ。る。と。い。ひ。を。自。今。お。尋。ね。よ。り。て。思。ひ。出。し。は。抑。
あ。の。館。山。の。城。の。昔。上。總。介。平。廣。常。主。の。別。館。を。い。ひ。一。年。這。頭。の。平。山。より。山。
屋。脱。け。今。の。副。門。の。外。面。を。固。ま。り。出。く。海。へ。入。る。路。約。莫。二。三。町。あ。ら。う。洞。お。做。り。
け。れ。城。内。より。情。勢。活。路。お。宜。か。る。べ。し。と。當。時。の。家。臣。們。愛。懼。が。一。單。廣。常。主。の。
妙。と。せ。ま。二。の。老。黨。お。宣。お。せ。し。世。お。武。士。と。する。者。の。敵。お。攻。め。て。笠。城。を。命。運。其。首。お。

八犬傳正統卷十七

二 笠城軍藏

窮乏潔く戦致し。然と豫より城内の活路を為れる命を免れんと欲するも準備
 乏。躬方の出る便あり。敵も亦入る便あり。出沒素より安定する。山賊の住る洞を
 然る準備あり。武士の家要る者。これを開と悉穿崩し。埋め。元益の
 事。小民を勞多。雜費も亦尠。下。這四下の岡の邊。大なる石。殊に勝れ。と
 擇。奥。前後の洞。口。塞。下。その世。世。人の疑。と。若。せ。夫。役。の。農
 夫。を。誑。め。秘。風。聲。を。と。叮。寧。命。を。一。二。の。老。當。と。近。習。の。外。の。の
 意。と。知。ま。ひ。小。可。が。遠。祖。の。當。時。介。殿。常。を。り。の。近。目。に。け。れ。知。る。と。い。う。と。え
 介。殿。諱。死。ま。ひ。より。先。祖。の。乙。接。村。へ。退。隱。し。て。子。孫。小。可。每。至。る。ま。で。十。四。五。世。も。り
 ひ。の。大。父。の。時。兵。火。の。為。に。家。系。焼。亡。ひ。ひ。具。知。る。う。ひ。の。と。い。う。と。親。兵。衛。ち。所。て
 そ。の。治。り。に。異。聞。に。廣。常。主。の。別。館。に。脱。路。あり。と。嫌。ひ。の。我。義。兄。弟。犬。山。道。郎。即。火
 道。の。御。書。を。燔。棄。し。と。目。と。同。く。を。語。る。と。今。向。弥。七。微。り。我。疑。ひ。と。解。く。う

あ。ん。ん。定。小。珍。重。々。々。と。顧。嘆。賞。あり。清。澄。の。亦。然。の。感。し。神。佛。眞。助。の
 不可思議と畏るる中。清澄の親兵衛。亦。徳々と阿弥七。素生。その子のゆ
 さ。ゆ。る。隨。解。示。せ。親。兵。衛。屢。點。頭。現。那。兄。弟。て。這。弟。も。南。弥。六。を。義。使。を
 り。館。の。兒。與。戦。致。する。後。々。ん。送。恨。の。ゆ。然。と。豫。任。増。松。と。養。嗣。の。約
 束。甚。妙。に。宿。老。清。澄。と。凱。陣。あり。その。を。守。え。上。の。必。恩。賞。あり。と。い。う。と。て
 清。澄。仔。細。及。び。そ。の。巡。檢。且。濶。に。妖。賊。伏。誅。の。趣。の。注。進。を。い。へ。と。い。う。と。
 這。方。へ。來。ま。せ。と。ら。連。立。本。城。へ。赴。く。程。に。友。勝。良。干。が。龍。置。れ。と。獄。舎。既。に。焼
 亡。の。開。が。遠。より。遠。く。走。馬。場。の。敷。陰。新。に。壊。れ。小。高。く。裝。て。雜。松。を。裁。る。土。饅
 頭。有。り。親。兵。衛。を。を。り。那。海。松。并。軻。遇。八。情。地。に。埋。め。り。と。い。う。南。弥。六。首
 塚。の。茲。る。べ。と。思。ひ。清。澄。を。吸。住。め。城。の。良。民。を。尋。る。知。る。者。あり。と。答。て。云
 々。の。塚。の。野。暮。沙。雁。太。亡。骸。と。瘞。り。を。と。賊。徒。へ。思。ひ。と。實。の。猜。あり。と。い。う。

軻遇ハが情地ありのせ。荒磯が塚あり。余親兵衛點頭て阿弥七と名近子。是汝
 兄の塚之冥是と祭るべ。我も廻向とせ。先阿弥七の梓まて。然而清澄と共侶小
 楯して目礼してれば高宗以下の士卒ハ次國太朝ニ至るまで俱々の塚あり朝
 良民之威感激して鼻も梯れ老も弱も涯もあれ。竟不逝く身と忠義の與ハ徳ハ
 命と捐てそ榮と見孫小貽まれ死映ありと思ひ。徳而荒川清澄を親兵衛と共
 侶有功の諸士と領て城の正聴小集會を登時清澄ハ親兵衛小席と讓んと。町
 寧々請找め。親兵衛敢從て。詞意迫り論を。燕毛も。序を。我ハ九歳の
 給角也。荒川王ハ大父也。又尊卑の。荒川王討隊の大將。即館の
 御名代也。我ハ臨時の副將也。然ると小功あれ。席と犯さ宿老。獨茂如。做々の
 是君侯ハ大不敬。楮稱是も甚。決て從て。推辭ハ清澄推

禁めて。理論ハ定然あるを。軍旅の序次ハ非常也。功者ハ上在り。功者下ハ
 在ると。那剛臆の坐の如。後軍ハ金戰の。開と尺齡と職分の等否も。序次と做さ誰
 又命と惜ま各王君の死與ハ後の戦功と励ん。愚老ハ賊徒誅伐の仰と。稟これ
 寸功を。因て重て館も。和殿ハ征伐を命せ。立地ハ大功也。信ハ主客地と易。今
 日討隊の大將ハ大江。則和殿也。愚老ハ當ハ副將也。信ハ席と讓ると。和殿ハ
 干て非礼也。誰ハ楮稱と。いん。然と謙退せ。始愚老と羞殺さ。我
 意ハ儘。親兵衛美引。不云云と論。争ハ果。高宗ハ逸友。雙
 方と推制也。相和解て大江氏の謹慎ハ臣者の本。荒川王の謙遜。辭讓
 世の家宰の龜鑑と。我我門證人ハ枉て且同席也。事と議ハ益。益ハ
 辭讓ハ時を。不便ハ。友勝良干。及逆時ハ景能也。共侶ハ勸。一
 親兵衛。竟ハ。得清澄と共。在。是。高宗ハ逸友有功の

獨仁が上にあつて願ふ賢老輟翰の危窮を救ふて上の仁政を並言く民小知る玉
 へと詞を盡く諫めく清澄言下の感服して遂にその議を儘く良干逸時景能
 當時城附の米穀金錢の多寡を問ひ勘辨多く倉庫をうち用餘財餘分の米
 穀をも賑給送すめりて阿弥七並良民の天の徳に地小喜びく擔ひ運てそかり
 白く舊所小安堵もあけ然又親兵衛の是等の事小管らして憶も逗留三日及びて
 四月十五日小あつてめりてけも尚事の多くて退くをゆるり小あ日晡時の左側小向水五十
 三太と枝獨鉆素吉の生拘の賊徒二十餘名と乾兒們は牽き俱小館山の城小來て
 親兵衛並干逸時景能小報る事小可毎小約束の事小船と那這の浦曲小歌て大江を
 駕なり小大前の夜より今日まで這城類の落人の津と求る者多ければ欺て船小
 乗せて毆伏せ擲捕り二十餘名小の餘剛て小達と矢場の海推階して
 投る方小の親兵衛逸時們のの擲を讚め勞り清澄も告く清澄

則雜兵們の生口毎も受令して其本来の責問者他們の都願八盆作小
 兵と年來虎狼の威を借りて良民を虐ける暴悪分明る日親兵衛を送る事小
 敷せけ然又清澄小向水五十三太弟兄が日親兵衛を送る事小の趣
 既干逸時景能小今又賊徒と生拘と多く牽き献き任使宜く賞金
 と五十三太素吉乾兒們の賞米五十石合も言示して二十餘足の馬乾と
 浦邊まで遣りければ五十三太の能り親兵衛急小返上
 我の又投方小復汝達船小乗りて舊路還ると欲を恩給の米小乾兒們船小
 分ち載て家路か遣りね汝達の舟船と歌て必よ我をなるかといふ五十三太素
 吉們の果を退ける當下又親兵衛孝嗣次團太と商量多く却清澄不
 別を告ぐ立去んといふを清澄制りて談さる御向ものことと和殿の這回も
 大功ある館の見参入れそ那地へとち放ち遣ん且改木生の賊の頭人浅木碗



大坂の陣
 諸將の陣取

大坂の陣
 諸將の陣取



清澄寺の諸士親兵衛
 と共、地道の石門及び丸石の首塚を視る

あらし塚の石門
 廿回中の條々
 を合して一
 面なる故に
 首塚を視る

大坂の陣
 諸將の陣取

大坂の陣
 諸將の陣取

九郎と殿補て素藤不索と撰るその功和殿の亞あり及次國太卿三も俱不是軍
 功あり和殿縮村へ伴ふてゆえ上る重用あり去の長と思ひぬる事とて親兵衛ら守て
 政木石電們がまへも晩生只顧薦めたる他們七武士先ちて仕途不仕立欲せ
 ちのよりも理りえれ姑且折を承ふの且晩生の身比七武士と招會具仰を稟て縮村を
 退して逆旅不赴に不更不又妖賊對治の御教書と成下されその使番崎氏不料
 ちも西國河を相逢ふとゆえに隨即征伐を先ちて賊徒と討も夷けさる邊莫七太
 士と招會の先命の傳果さぬ不并と照文與四郎不任せとある仰の傳え且御向口王書言と
 りゆの美とゆえ上るがその因にねと仰きとも七武士們と共侶不歸參へ我宿望義兄弟
 們不先ちて恩賞とゆき欲せ意不餘の七武士に必結城不來會まで大法師の
 菴不在るべし本月十六日の法會あり今日より只一日の途遙ちて期不値ざともその路次
 ちも出迎へて君命を達せ妖賊既不對治せられて當城無異不民安けれは晩生茲不在

らとも殿見老正不上在り且諸勇士の羽翼異言れば事缺るもゆいとのひは、應龍衣の
 玉と合を出て清澄これを遺與して去の玉の後不又用るをあらんとしつ政木楓の誨あ
 せよの美をゆえ上るいね晩生へ一路兒們と俱に解纜といそぐべし願ひの海容おれかと詞
 急迫しく本意と舒く住るべもあらぬれ清澄連の不感嘆して連愛を忠魂義
 胆誰う九歳の童子といふ然も不主意決り今ゆふ争何のせ七武士と相伴ふ
 歸參し今より參んのこと忘る一霎時退して却高宗逸友と共侶不來參折乾金
 十兩と寫したる三裏と親兵衛は薦めてゆさる大江主あち為義をから老拙が餞別
 ちの二裏の大全氏と石電屋贈き欲ま和殿のゆえ那入々の戦功稻城へゆえま
 賞禄莫大を承ふに下知と違ふけれは只この私情を表するものと公間不高宗逸
 友のその三裏と推找めて俱に別を惜むけり當下親兵衛は三裏と曲り受戴は一
 裏と推返して清澄に答るち美情辱くはとも晩生の身比縮村より首途の折上の

賜り一かん金あり路費遣く由ひつゞき是の終預けまゝ人俾大全と次園太と浮浪の身も義士といへるを輒受へたる然とく是も返りまゝ長者の好意を破る不似し因て晩生收め措て折をせし傳達まへ去向をいそがへ餘談を異日歸參の折の然も聲あてん身の暇もなれといと遠く応答する件の十金三裏を懐小夾め退いて程よれ処お第一考嗣次園太卿云より告げ伴ふ立去んとせし程お清澄高宗逆友の赴携りて袂を掖るいそがへ理りるれも留別の不意を候るごとく薦めんと欲せし一乘時住りあかといふ間逸時景能も共侶お走來て浦邊の船まぎ送んとて前お立後お携りて放るくもあがりしと親兵衛聽き頭を掉りて平安を異の折るら柳と執ね水と流し送るの姿も致さる妖賊俘囚なるをいそがへ残燼のまじ冷る願ひ各宿老を幫助て當郡と理りて私情の今之急務かあざと論じて毫も後を卒とせり考嗣次園太

卿云の邊へ清澄の別れの礼を盡し果てて外面お立出て後れを親兵衛と赴々俱に從ふる吉最酷う急迫し清澄並に諸士們も徒然と目送りけり愆而大江親兵衛の考嗣次園太師弟とて多々館山の城を去て浦邊と投るいそがへ程お長は肆月の日甘春果て望月の影隈ゆるれ磯山借ひ迷ひもせし既しと船も五町許のありんと思ふ程お素も吉が蕉火と振照して迎ふ事ある逢ひの登時素も吉の伏家の船三艘お恩給の米を分ち載て剛才か下遣と告てそは先お立て故の浦曲も案内をま大家他と勞ひていそがへ路次をいそがへ夜西半刻の左側お寮片一船お乗ふけり船も五十三太が心と用ひ夕饌の設ある程お五十三太の今戸火盤お柴折り焼く乾兒の笠高士と給事お達して親兵衛以下の客人お飯を差置るどせし程お親兵衛の五十三太弟兄お這里より水路と結城へ赴く遠近を問試しお五十三太答て然い江戸より結城十六里ありおの浦より西園河まで既お知せぬか

一夜まゝと到るべ。渡莫兩河も還りての迂遠と路損あり。因て行徳浦赴
 荒河を溯り関宿より陸路と走ら。結城まで八里。荒河を漕入れ船の扱むと
 遅く候はれ有敷。不覚なるやあらね。這八個の者毎が腕の涯り拵て明日亭午
 下總なる関宿へ漕着て。最も自長は時候なる陸地とせせむひ。結城へ到着疑
 ひ。この親兵衛致してその譏む。然るも下總の隨小菅工們の舟を
 建列してその通宵漕せ。果して十六日の曉天。行徳の浦へ來り。越お姑且船を
 歇て菅工們の早飯と炊き。登時親兵衛の孝嗣と次因太們の清澄の立意を信
 へ。贈る金三裏と命を出て分ち薦めり。金の少ふあれども。窮民賑給の
 東西あり。又我君の賜あり。只那翁が各餞別とせられ。その折折告知。必
 推辭せん。然る言數多くて人の志の空ある。と思ふ。預り置ぬ。唐山前
 漢の韓信の身負かり。時漂母の食を受る。世俗のよく知ら。金の本

意あり。漂母の飯勝る。願ひの收りて明日の路費の用あり。と諭され
 孝嗣も听て。思ひ。我々と殿の從。附驥の小功あり。國王の忠を盡
 奉あり。又荒川翁の與も。只義の一字と思ふ。和殿の幫助あり。那翁
 より贈ら。東西あり。受て。和殿の意を猜り。受て我々贈ら。則和
 殿の財物も。人々推辭せり。辱け。心を備え。孝嗣か。つ。次
 因太も亦辭ひ。演受戴。俱に金を收め。徳而早飯果。五十三太
 素吉高工も亦復船と走ら。荒河を漕入れ。現瀬る船。勢ひ始。て。各
 ら。渡莫伏姫神の眞助あり。思ひ。早く。午。因宿の邊。小
 東に。親兵衛の。勒肚。圓金十兩。合。五十三太。素吉。與。て。わら
 ち。瑣細る東西。折周。合。這回。和郎們が。幫助。思ひ。隨。幸ひ
 更。その。折。志。異日。船路。安房。逸時。訪。折。再會。せ

尚又用るこあふ必館へ受て恩賞の功依らま。いさよ袂を分る。とあふ五十二太
 素吉の乾見們の皆額御美方。その中五十二太の金のうち戴はく。噫慚愧
 館山で昨早れ丸米。意外過分の造化る。今又信る。丸金を受る。その本意
 をね船の乾見們の漕かへて小可と素吉の結城へ宛伴仕ると。親兵衛のあ
 へま否水行を汝達の補助より。便宜とされ陸地の伴の決して要る。口誑時の程り
 やせ大義をそと旁て刀を引提て身と起せ。孝嗣次圍太卿も亦五十二太の別を
 告て俱船より出てもと。禁め難る五十二太素吉の乾見も齊一目送り。徐船と
 返りけり。話分兩頭介程の館山の城内の親兵衛們が結城へ。立去りて幾程もる。
 範内兼四郎詰茂喜加橋并の親兵衛が使介の連る。兩個の親兵衛と稲村よりか
 来て。隨即荒川清澄の下知状一通と。三家老連署の奉翰と。渡與て首尾を告
 けり。是より清澄の有功の諸士と聚合して俱ある。書と披見る。第一條中を大江親

兵衛が大功と讃さる。七犬士招會の使。照文與四郎あり。親兵衛の清澄們と
 共侶の稲村へかゝる。参る。尚性急を立去り。その意不儘して。赴かば。はとあり。是よ
 ら下の三四條の夷瀆の周民賑給の事。又館山城の小林高宗田親逸友と番士の
 頭人として士卒五百名と留て守らる。又清澄の友勝良干景能と共に素藤藤以
 下生物の兇黨を牽りて徐に凱陣矣。但一礪時願八平田張金作。與利本膳。與利
 狼之介の外稲村へ牽りて。誅せ死者これを誅。追放らる。追放ちて。民の煩はる
 らる。後木碗九郎仙田麻嘉六の外首級。右同断る。を。とあり。清澄即使
 高宗逸友們と兵の詮議。次の日賊徒の兇暴を。誅戮する。餘鳥合の難兵の罪
 輕に追放し。有り。程の素藤が暴虐。堪難。隣郡走り。夷瀆の富屋豪
 民の漸々交り。又那梶野葉門の諏訪兩社八幡の神主。稲村より来て。各職
 就に。夷瀆の浦波静也。館の山風枝と鳴き。郡民安堵も。五十七日と歴る。

清澄の更に入馬を整へ。友勝良干。逆時景能。其の稲村へ凱陣。素藤。宗徒の兇賊。檻車より乗。旗羅羅。真先。勢ひ。巷街。入の山。成して。觀る者。処々。元満。任而。次第。清澄。稲村。帰城。義成。朝臣。見参。大江。親兵衛。大功。の事。趣。政木。孝嗣。石龜。屋次。團。太師。弟。向水。五平。三。太弟。兄。の事。及。孝嗣。舊縁。中。政木。親。忠告。の事。頭。末。又。荒。磯。南。弥。六。が。弟。阿。弥。七。の。二。男。増。松。の。事。及。南。弥。六。の。首。塚。の。事。又。親。兵。衛。が。靈。王。と。も。城。の。地。道。の。石。壁。に。兵。火。守。屋。柱。倒。れて。獄。舎。の。篋。子。と。推。して。友。勝。良。干。の。出。る。と。も。本。膳。盆。作。と。虜。不。あ。げ。為。体。又。親。兵。衛。が。仁。の。字。の。靈。王。の。御。大。母。妙。真。許。罪。能。出。て。船。不。乗。ま。思。折。忽。然。と。蜚。返。り。來。て。親。兵。衛。が。懐。入。り。又。照。文。の。兩。河。原。を。料。親。兵。衛。不。逢。ふ。と。して。御。書。と。遞。與。仰。と。傳。う。那。身。の。結。城。赴。け。事。又。親。兵。衛。の。自。餘。の。干。大。士。と。相。迎。へ。共。侶。の。あ。ら。ま。り。と。して。兼。四。郎。門。が。還。る。と。も。十五。日。の。下。鴨。孝。嗣。次。團。大。師。弟。

俱。水。行。下。總。へ。赴。け。心。標。眼。前。見。一。の。り。又。傳。う。け。る。事。も。の。崖。界。を。上。り。妙。椿。狸。の。奇。は。皮。と。薙。尾。龍。の。玉。と。を。ま。わ。せ。て。這。狸。見。の。箇。様。々。と。昔。年。龍。田。の。近。邨。を。八。房。の。天。と。子。養。け。る。事。の。始。り。玉。梓。が。餘。怨。那。身。の。貴。縁。を。當。家。の。出。宗。と。做。し。ま。り。政。木。親。が。親。兵。衛。不。告。う。と。の。奇。談。の。頭。末。开。も。靈。王。の。威。德。の。り。玉。梓。が。餘。怨。解。脱。し。妙。椿。狸。の。即。死。ま。け。る。と。亡。骸。の。毛。の。中。の。如。足。畜。生。發。菩。提。心。の。八。字。見。れ。事。是。の。先。の。政。木。親。の。上。野。の。原。を。狐。龍。化。て。升。天。の。奇。特。な。漏。ま。る。と。告。白。を。も。義。成。主。の。事。毎。の。驚。奇。感。嘆。大。々。々。と。身。邊。の。三。家。老。近。習。の。俱。の。側。聞。し。て。駭。嘆。せ。ま。り。の。事。耳。新。あ。く。を。思。ひ。け。且。し。て。義。成。主。の。清。澄。不。真。や。妖。怪。賊。徒。一。時。不。亡。び。當。家。主。兼。泰。の。至。る。則。犬。江。親。兵。衛。が。神。の。實。助。の。名。を。よ。め。る。も。亦。汝。の。敵。を。厭。ま。る。實。の。一。字。守。る。あ。の。名。を。よ。め。る。と。士。卒。と。損。れ。て。の。全。勝。の。事。有。る。龍。田。の。り。條。々。と。又。詳。不。真。上。と。然。し。て。然。ら。ば。先。友。勝。良。干。逆。時。景。能。を。召。べ。と。召。さ。し。て。見。参。を。饒。一。と。い。ふ。

杉倉氏元奉りて即便仰と修りて武士者時運より勢ひ竟不究と敵の為不擒ふ
 れる恥あはて取らるる浦安牛之助友勝登桐山八郎良干の神火の真助獄
 舎と名ある賊徒の生拘りて會秘言の恥と雪め一事本奇特と思召ま宣本領城
 安堵と又田税戸智九郎逸時若屋八郎景能の城を命免れ罪を他御に避
 たる饒されぬ越度るれ今番大江親兵衛小從と敵城に入て火を放り且仙麻嘉
 六を相敷ふあけるも又その前夜西國河より親兵衛を送る番折平天們と相計快
 然と東の向敵地近のるるも御親兵衛の手書不沙を恩免と請ま依り
 則這男の忠戦をりて那先非償ひぬ先館山の城の頭人を罷れての餘の舊の原小園
 は清澄未從と備田まあぞ老侯の礼を景上と仰渡まをり友勝良干逸時
 景能のかそく恩命と拜と退りあけり介程の荒川清澄の私宅とて件四
 士と伴りて馬を早め備田詣て義実朝臣を見参大江親兵衛が大功素藤藤們在

誅都々稻村殿の事と一事も漏ま告景上妙椿狸の奇治度と雍薙の王の
 由米と解て憲賢の備へる義実王の缺ひと又教馬の大王と皮と亦肉して原來那妖
 尼の昔八房の犬と子類け富山の牝狸であけり那折我の尚壯年と件の犬と愛るれ
 狸と字の大は從り里小後下りあけり里見の犬と前兆ありと賢達と戲語と意ひれ
 悔しく恥に批言定不疎幽るれ狸の古字の身小從り犬小從り後の事今も猶通
 用を況玉梓が餘怨賞縁りて當家は崇と故と神を身身の知るり亦我口の
 過るれ今玉梓が餘怨解脱の折をりて狸見も其命然りる亡散の毛の中か經
 文の偈句見れり正親親兵衛が持る靈玉の奇特也畢竟役優婆塞の方便利
 益をん狐龍の忠告違ふと然る洲崎の巖室代香の使者とまあ又這
 妙椿狸の皮の逢坂の関のあると采花物語の卷小あるれ那関寺の半佛の例もあれ
 華慢ふ為らる大山寺へ寄捨せざる死後方小ゆる小湊目と鮎船貝六郎を

きて未を令るの。有佐れ親兵衛が帰城の折も姑且沙汰を及ぶる。其の末に
かく御示しね但忽諸おをる。夷瀕の民の艱難。他們の年来素藤主僕の奢
侈淫樂の為お責合られて食ひ子と賣の妻と鬻鬻に富る。財宝子女妻妾と奪
まより。分鏡の全う。御の清澄の館山也。大江親兵衛が薦めら
那里の民の賑給とゆひ。然るに秋實も支る。不足を。因て夷
瀕一郡の稅斂と之稔免まへ。下知を高宗逸友の修下か。と仰せ。四家老們と
兼執ひ。後のて。功ある士卒の理義と感。恩賞。望を夷
瀕の民の枯。苗の甘雨。ある。秋の長。夜。常の如く。献
んと。願ひける。然るに安房上總。かの如く。善政。愛。なけれ。結城の安危。い。ま。空
え。大法師の宿願の法。延。那里。成就。ま。八犬集會。あ。や。不。や。分。教。あり。
昔年開年。結城。城。秋。月。春。花。幾。十。四。又。白。妙。の。木。綿。城。の。庵。の。雪。の。年。歴。て

第百二十回 小兼樓の一僕故主の謁せ 大庵の十僧法筵と資

むま垣のうは花。の詩歌の意と。知。欲。せ。且。下。回。解。分。を。聴。ね。か。
話表。姥。雪。與。四。郎。の。四。月。十。日。の。暁。昏。一。個。の。伴。當。と。後。へ。照。文。們。と。共。侶。小。稻
村。の。城。と。能。出。一。折。近。港。口。よ。り。船。の。乗。り。下。總。の。市。川。と。て。連。り。水。路。を。い。そ。死
あ。の。夜。猛。可。風。波。暴。れ。て。幾。番。と。吹。戻。され。十二。日。の。曉。方。小。辛。者。と。上。總。を。
木。更。津。の。船。と。歌。留。り。更。順。風。と。等。り。け。る。日。も。終。陽。海。暴。れ。渡。海。の。便
宜。と。の。心。の。焦。燥。陸。路。を。走。ら。め。思。ふ。高。工。毎。今。中。も。あ。れ。風
だ。不。復。ら。船。と。遣。る。目。易。く。て。ん。開。と。懸。り。怖。り。あり。弓。と。強。る。壁。言。漏。れ。又。徒。小
五。六。宿。の。日。數。と。費。い。る。ん。尚。一。霎。時。等。ぬ。ね。と。諫。る。言。の。理。り。の。日。と。ま。不
消。去。一。個。の。伴。當。の。昨。夜。通。宵。狂。風。逆。波。の。搖。惱。され。り。一。の。苦。と。被。病

臥く。巫の役も達ぐもあまぎ。左右も程も黄昏時候より漸く風軟だて且追風も
 るうんとまざるも與四郎が伴當の心地死ぬ覚ると。飯の準備の茶と薦ら
 まても甲斐るは延不果敢々々飲さうければ只得陸の杖登しく。這津は客店小留
 め将息させて下總へおくも。管高工們が還る比まで。他が病着稍瘥く。稻村へ送
 かせま。店小二小保を委ねて又與四郎の邊へ。船に乗る程既にして日の暮る
 くてある。候より。風いよく宜しき。管高工們の船と漕出しく市川を投て
 走る程十三日の朝船果て這里欲と。思ふ市川も大江屋の河岸の来れば。與四
 郎の管高工們を労ひ。那伴當の事や。あつらふら。初裏と。自ら提ぐ船より
 出れば。管高工們のそつ。漕戻して。安房を投てい。程の當晚又上總る。木更津
 船とよせて。管高二兩名陸の登り。那客店へ赴け。與四郎が留め置。伴當の
 安否と訪ふ。巫の瘥り果ぐるも。然れども。幾まも。候てある。延不果敢々々。駈けて

出しく。船も載よ。安房へ還りんと。のよりの。杖けて。駈け。次日の曉天の安房の
 宿所へ。歸着。あ。隨即。稻村の城へ。よ。と。告ぐ。伴の病人の城内へ返り。是れ
 與四郎の風波の障りありといへども。恙も。市川へ。昨日。着到。あ。の。稻村の城へ
 告えけり。然れ。伴の伴當の約。莫一句許。稍起。出。と。は。れ。も。時。日。通。麻。井。け
 ま。又。與。四。郎。が。迹。と。赴。く。下。總。へ。く。ぐ。も。あ。び。有。司。們。も。亦。與。四。郎。が。幾。ま。も。市
 川。在。る。ぐ。ぬ。伴。當。を。又。那。里。へ。と。遣。ま。も。益。さ。う。と。推。量。り。と。始。り。と。そ。の
 議。及。び。只。瀧。田。の。音。音。們。の。水。路。の。障。り。も。恙。さ。う。り。與。四。郎。が。上。齋。様。と。具。お
 せ。え。知。せ。ぐ。音。音。也。の。單。節。們。の。敬。馬。等。且。歎。び。て。日。數。程。経。旅。る。市。川。上。りの
 後の事。夢。ま。ほ。さ。還。る。日。と。待。ぐ。く。を。思。ひ。け。問。話。休。題。介。程。不。與。四。郎。を。那。日
 依。介。が。宿。所。へ。赴。け。姓。名。と。告。ぐ。對。面。と。請。ひ。折。り。東。人。依。介。の。荷。船。の上。乗
 きて。江。戸。へ。赴。け。女。房。水。澆。の。香。華。院。へ。墓。參。ま。と。せ。ま。留。守。吏。耳。の。と。疎。る。新

炊の老媪のまゝして高工一個も在ざりければ何を問ふても外々あく己がふるのまゝと
 與四郎の親兵衛の這里から来るや不男と目今知る由もて心頻り焦燥も東
 人の妻の還る来るまで待つ外は術あまを尋思と考へん其首と漫りて
 復たそまめと期と推し退れて去の御の神社佛閣を拝んと欲する差す都會の地
 あらね火場古跡の親るをみる。只我番も大江屋の門邊と過りて觀入る小老
 媪のまゝして寂寞う。左右も程小亭午のころの時亦復たて問ふ依介が妻
 水滲の方絶歸宅の折られ遠く出迎へて先與四郎と客房へ請登一名對面
 きて茶と看めるとあはる管待特小浅く六稔富山は親兵衛と衛字れ値
 遇の縁せざる隨ふひ出でその款ひを演る程依介も亦かゝる考へ思ひける定賓客と
 與四郎と字より船の揚荷を笠高工門の任して衣脱更對面を迭の口誼果
 るに款ひのへうあつりけり登時又與四郎の東人夫婦もうち向ひ。今番稻村殿の

仰より照文と共侶親兵衛と召復たる使を奉り送ふ去向を異ふと水
 路とあふ素來ぬその事の端より風波の障り遅滞の支の地の親兵衛が舊
 軍を立去りてともあへん然と思ひ量り事の情と云と告知る依介も亦
 親兵衛が裏あふの地から来て數日逗留の夏趣且昨の朝未明の辭と當
 所を立去り隄地の結城の大森と訪り必七犬士と逢ふのあんと去向成
 いそがしむまでも報れ與四郎款び考へん便宜と考へ恨の我船の始より
 順風を浴て昨日早旦あふの地の對面輒あへり一期の値するを悔いけれ非
 如結城の七犬士の來會せよとあへん大江の和子の十六日と那里に在る疑ひ
 亦既去向を知りてあはる長坐の益る今より結城へ赴くべとの依介推察
 めとぞと又酷く性急今日の中三日の朝立あふあふも十五日あふあふも
 那里に到りぬらん定ぬる定賓客と只あふの依介還りぬと和子も知れぬ何

せん風波水路の疲勞ありんか枉て一宿留らせぬとさ回水渡が準備の餌を
りく来て推居く時分既小過たる物欲くそとあそびた疎飯おゆれと先箸と
合のあへ給侍あ中酒の盃箱三竹葉魚の塩炙竹筍の齒小稱と與中と杓を
摘一徳食店町寧あふの届たる手長艱然し魚米も富る御の貝の柱小初胡
瓜那這株と柱分る今と葛西の新茄子根芋のまご子のあぬ夫婦右より左
より屢差蓋めく已まのけ人の好意お與四郎の今ゆ推辭むとゆき目下も話説
も長うもて伏姫神の冥助靈驗親兵衛お世お傳お文武の才学大功の支の趣
又孫等ごの音音がの曳も單節がゆまの身の幸富山る神と君との恩惠
そと有來一方説誇る依水渡の親兵衛が這里お旅宿の事の顛末又妙
真が上やゆいゆ出听ゆあつ百多日銷一長も思ふ暇もあ時程りて黄昏近
る一と與四郎只得意見儘して明日と契りて去向をいせ先結城への便

路と回系依介合てこの地方より那里へ十七八里もひん井と船を関宿まで利
根河を淵らふ足を勞せとて倒れと近り小可送りまおせん任用いぬのふ
與四郎然美々今宵のあ明けの徳而次の日の曉天の依介の管高工面之名と
喚覚し出船の準備と做ま程水渡の亦與四郎早飯と差ゆると是より
先お與四郎の臥房を出漱せ身装束家廟と問き房八沼蒲が水玉お朝
ひ一垂時廻向をある折昨々準備の金壹兩を分ちて二裏おあより悄悄お賻
贈て退けり事情と原るお與四郎が肚裏お東人夫婦の好意と感とて昨日よ
け今朝も酒飯の管待大なるお刺船りて遙々と関宿まで送る報ひを
做さでいるまんや然かそと錢財の那人決くと受て今番の猛可の旅をい送
裏おせん東西もる要るもと尋思とある賻贈の一事两用とて件の金を送
措はしその折水渡の心もつぎ程經て肇て足出けるお裏お寫せる姓名もて疑ふ

八代大車巻一
十九



八代目大車巻十一

八代目大車巻十一

五

八代目大車巻十一

依介水
行小
與四郎
送る

へくもあつた心單に感と己まき。當晩良人の還ると告ぐ事任々と告るゆ依介も
 亦與四郎が大大く誠心を只顧感佩あつた。是後の話余程與四郎の
 いそぐ水邊別を告て依介が儲の船から乗る折の尚暗けれど兩個の篙工も依介
 も力と勤し漕ぐ程舟落て鴨の啼け明き天の河の潮りも舟を
 三挺舟の十町あまりのや来ぬと思ひ東をなぐもさけの徳而る日の下暗
 船の関宿不果一と與四郎の依介の然び演相別れ。獨陸地をいそぐも絶不
 一里許りと。焔燭時候あり今宵の塚の驛る客店小杖を駐めて明る邊
 へと立ち出り連り小路次といふ結城まで七里身の老れも尚健歩の運こ
 撓るる。その日未牌の左側の結城の城下小本にれば、大法師の草庵と里人
 向ふ方知れりといふ者あり。且訝り且問ひ。最長なる城の町を去る不候と程
 忽地後方人ありて。開の燒煙主として。住りの後。嗚々と聲高き喚被

是を與四郎言ふ。是則別人を。豫面善れる照文が。今回の伴當に。其の
 與四郎心鉄び。遠く菅笠を脱て引提ぐ程も。那僕も走着て小腰を
 折り。茫然と與四郎の告る。主として十一郎の這城の町に。客店に在り老爺は
 過らぬと。吸まわす。見迎する。先立り吉又の
 便宜と與四郎の車も。旁にて仔細と越え向ふ。及ぼ案内儘して舊路に立
 復ると一町許。照文の宿とせ。客店に在り。来て。店の白壁。小泉屋と寫
 たる。矮樓の一座棟。倦而與四郎の草鞋と脱捨。胸を濯ぎ。引れて店の傍より
 躡て矮樓から登れ。照文の這里に在り。宿の姉嬢が汲り。来る茶を與四郎薦
 ゆる外。同宿の客も。次の間。照文が。野兵伴當の。居る。登時與四
 郎の合笑る。照文が。向ひ。最早。番崎主在下の首途の折。那船の無
 事より。幾程も。風波暴れて。既危窮。及び。絶不免。上總。木更津。船

歌留。次の日の那港口に在り。只一個の伴當の病臥す。陸に登りて其頭の客
 店に留め順風と多て十二日の朝市河を大江屋に赴きて依介夫婦に對面す。親
 兵衛主の往方も知れ那人の數日那里に在り。結城の法會の値んも十二日の朝未
 明に立去ると報られ長談會話の時移り。東人夫婦が留められ只得那里に止
 宿す。昨日の船りて依介高工に宿を送り。昨夜の頃の客店に明くと七
 里と走一走の未牌の時候に這城の下に來り。來るも來るも大法師の菴を知り。結城
 索難々氣さへ脚さへ疲労す。まて困り。あつちの憶りもあつちの死身あてられて吸れぬ
 這便宜なる。死身の又幾の回かやの地來ぬ。大道徳の逢ぬ。一秩大士と
 來會せられ。彼と向を照文推林。然りと且听我も亦往る。十一日の夜艾より。
 勁風劇波が漂され。船の杖も危ふ。辛を十二日の下晡に武藏下總の封疆
 なる。兩國河を漕入れ。風波の心地と損れ。我身安ら。ゆり。那河原を船公の坐

席を借て臥す。在り。その宵料を大江に相達せしめて。隨即館の御説を
 傳へ。御教書と遞與。あつちの故の箇様々。徳々の時宜けの。親兵衛が一路人
 河輕佐太郎孝嗣が事。及靈狐政木の事。並に孝嗣が改名の心操。又石龜屋次圓大
 と并が角触の弟子。卿三が事。又那河原の使者と傳え。向水五十二天弟。並に田税
 とがく。九郎逸時と苦屋八郎景能が五十二天許寓居の事。都てその日の吉の顛末。一事
 も漏さず。解示して却親兵衛。是等の便宜。快素藤と對治せんも。十二日の曉天。
 逸時。景能。孝嗣。次圓。大卿三。と照文が。親兵衛十名の内。中才。兩個と借從へ。那
 五十二天。素も吉が。準備の船。ふち。乗りて。上總と投て。漕走。一。舟。事の光景
 今見る。像。くも。做。と。多。耳。生。れ。與。四。郎。所。々。笑。局。入。て。奇。也。と。感。嘆。も。
 登時。照文。又。然。咱。們。の。大江。の。船。出。て。河原。を。自。送。り。果。し。更。か。去。向。の。い。を。
 る。れ。疾。立。去。ま。く。欲。す。の。宿。の。船。公。高。工。取。婢。們。の。前。夜。の。息。劇。小。駭。怕。ま。す。

那地也れん在る者るけれん開と辭せざる慌しく出てもんはさる人の瀬留守とて
 憶も天と明と程の船公夫婦奴婢們も那里より秋出ても朝の炊か又時程も
 日の日印を升りし時候稍早飯とて果なる野兵と伴當們を立て却船公別を
 告大江並一路人們の房錢までも迷と還して千住の方へをたし豫の穂北の御
 士とせり水垣夏初許立よと七個の犬士們的のや向ん思ひ申斐る不知察内の疎さ
 十町許の過と始て人向せよとるの通前後とるる悔し思へ且試し伴當を走
 りく下とせせんとて咱們と以下の兵毎の路傍る茶店小總ひて在り心利を伴の若
 黨直塚紀二六と喚做る小意表と示し使と課て水垣許遣しける小等といはるる平响
 るる紀二六等くる來て那里の動靜と報るや小可那御士許赴てお使のよと
 言示し那七個の犬士達の今も逗留するやと問試し不知と答て左右多し事の実を報
 べらもあつたけれん小可精しと毫の礙談せむ則里見の御内入るる藤崎王の使るる

詳し解し去る那毎の疑ひ釋けん水垣の家は老僕も世智衆と喚做さる
 去関の立出て小可うち向ひ情を報るや藤崎王の御姓名の豫知のひく
 去るもゆる尋めぬ犬士の春も久くあゝの処逗留と在せり結城を大庵の
 法會のいで値んと今朝早天四月十二より立去て那地へ赴たひ折る東人
 残る猛可中風の大病も半身不遂ひ餘之七も那人々と俱結城へくと
 ゆる只小生們一兩名犬士達と一里ありの送りて方僅還るると紀二六ある
 去て開胸苦し御病危早の平愈祈るる昭文の君命を伴の法會代持し
 去向といを旅されしとて御安危と向まわすも克んがさる犬士達と俱必
 訪ひまらぬもの宜く稟しぬ却大庵の結城也那方へをたし問へ世智衆
 ひの比小生の犬士の使を兼りし那草庵へ請かも故めて大道徳の面談仕
 らる本意をかりあはけれん事朦朧の似るものる伴の庵の城下ある乾浄

茂林中むかし締つむぎ掛かるたけ柴しば門かどをのこ那な精せい舎しゃをのこみるれ地方知しる者稀ひられの索難なんを
 ありん遮莫もく城じやう下したの西の約莫もく十じゆ町ちやう許もとを以那な嘉か吉きちの古戦せん場ばうと同せるる
 紛まれあるとのふ紀き二ふた六ろくの果て走りかるを。任まりとうを咱われ們ら報ほうへ亦復ふく言げん
 便宜べんぎとゆふ。任て這夜やの糟壁せきを客店てん明あきらく。次の日早はや旦たん宿しゆくを連り路
 次つぎの程不ふ時じの比及および。あの地来き着く。件くだんの嘉吉きちの古戦せん場ばうと人と同せる
 る紛れもある既すで中ちゆうと誨れる茂も林りん頭かぶの来る程。料りやうを一個いっの法師ほうしに遇せ。因て
 我われ又またの法師ほうしに大庵おんと問試もんし。法ほう師し答たうて。開て這里こゝの遠くもあらぬ。樹枝じ
 深ふかけれ迷まよひぬ人ひと馬ま僧そうも那里こゝへ。這方こゝへ来まさと先立まて。道と三町ちやう許もと
 果はてし樹じゆ枝しの間ある処ところを締る草の女弁おんなありの登時のぼり法ほう師しの咱們われを尋る。索るふ
 大おほ庵おんに則這こゝ里こゝではる。今咱われ們らの歩を早めて找たね近つて飲ひを演る法師ほうしの
 樹じゆ枝し陰かげに入いるとも人ひとの忽地とちをさる。あの紀二ふた六ろくの呼門かど

我われ找たね入るふ縁えん頼らいの障子せうしの間にある坐席ざせきの方九く尺せきを過ぎ。前面まへ六む尺せき許もと
 る佛壇ぶつだんの笈佛あぶの中央ちゆう一いっ個いっの地炕ぢこうに席を敷き。五枚ご布ふ儲たくわけ庵主あんぬしと佛
 壇だんの邊に端坐たんざ。大おほ塚づか大おほ山さん大おほ川がわ大おほ田でん大おほ飼かい大おほ村むらの七賢しちけん士し面めん識しる。識
 るも左ひだり右みぎ二ふた側がわに坐と占て在り。閑談けんたんの時に我ら俱に咱們われを尋る。今咱われ們らの初對はつたい面めん
 口くち誼ぎ互あひを疎る。又大おほ田でん大おほ飼かいの就中しゆうちゆう大おほ塚づか大おほ山さん大おほ石いし木き以も来きた恙やらず。再また會あひ
 祝いわい。祝され却今いま番ばん當たう精せい舎しゃの法會ほっかいに就て瀧田たに稻いな村むらの御代ごだい查しやを仰付おんづけ。参
 向むかひの事ことの顛末たんまつ瀧たに田でんの老侯らうこう羊やう来きたの御本ごほん意い不ふ稱せうの趣と。大法だう師しの傳達でんたつ
 去い供くわう頼らいの時日じを問さす。公こう私しの話説わ及および。王客わかくの喜悅きえつの趣もあらぬ。余あま程ほどに七犬
 士し大おほ阪はん大おほ山さんの復讐ふしうの事及および。水垣みづかき殘ざん之夏の落船らくせん餘あま之七有しち種しゆの素生そうせい義ぎ侠ぎやくの
 事ことの趣又また河か鯉い守しゆ如ごと子こ孝かう嗣しの事亦また賊ぞく婦ふ船せん虫むし媪おきな内うちの事善ぜん悪あく成なり敗なり箇い様よう々々

信々ふゆにたてその崖略と鮮示されて、大法師と共侶別後の動静と問れり。咱
 門則大江の奇談那人富山は老侯の危難と拯いなり。その事の始より伏姫神の冥
 助靈驗和殿夫婦兩個の娘姉連再生の天助善報兩個の孫三出生の奇異洪福又
 那神餘満呂安西出来介復五郎九三四郎南弥六隊八們が帰服の事兩館の仁
 政四家老の良佐言の素藤が叛逆義通君の窮厄妖尼妙椿が幻術に至るまで都て
 大江が智勇大功君臣の得失素藤と恩赦並に再叛の為体且妙椿が幻術の親兵
 衛と遠離る反間の事の趣清澄討ちの大將を奉りて館山の城と攻伐とも全功の
 だあざる事又友勝良干逆時景能們が浮沈の事南弥六出来介が戦死濱路姫の
 二度の厄難と姫神擁護の示現の事館の疑ひ解させあひて々々親兵衛を召か
 り且七個の犬士們的在処を索して彼を来とて和殿と咱們的招會の呪使と命せられ自他の
 去向と異ふと水路をいそぐ事の崖略約是までの數箇條の既和殿の知る如く

一事も漏さず告知らる。さて又咱們的兩國河原を大江が逢ひけるその宵の首尾孝嗣次郎
 大卿云事靈孤政本が奇特の忠告又向水五十二大素も吉逆時景能們的來歴の箇
 様々々恁々と鮮示大江の素藤誅伐の御教書と賜て孝嗣並に次郎大卿之逆
 時景能們を相伴して暁天五十二大素も吉が準備の快船を乗て館山に投て
 漕走する。あ別路の終末言詳告を庵主は七個の犬士とく駭嘆く感
 佩せるとり多々大江の上和殿們の事死中お生かすも伏姫上の神恩灵感我君御
 父子の賢明武徳と今うちふら仰ぐ教びありて感涙の技むを孰も覚ぬを不歎唱
 涯り多りけり。當下咱們的、大法師の兩館の御説は且七個の役傑の御教書を遞
 與しければ犬士們俱不受載に。在下們の年來貴命を尊びしより一時至る故
 りの凡宿因齊一義兄弟はも是足せられぬ。春に至りて大阪毛野逢逢と
 して七名を六聚令かも。獨大江親兵衛が存亡死活を知りては世に慨し涯り

あふそり。かひくまふ。きひのき。ききふ。よーら。かたね。よめら。あふれ。り
 あふそりや。那神童。伏姫神の真助。世四郎。音音を。娘。皆他。守
 傳。六総。富。養。心。樹。身。長。大人。備。の。君。侯。御。父。子。仕。ま
 正。莫。大。の。功。あら。ん。と。思。ひ。多。多。柄。我。們。七。名。六。総。以。来。百。折。千。磨。の。窮。厄。艱。苦。故
 凌。浚。て。恙。多。り。皆。姫。神。の。真。助。を。と。感。激。の。外。は。な。れ。も。芳。き。の。も。と。を。い。ま。ご。一
 介。の。功。あ。ら。ぬ。孰。九。歳。の。總。角。親。兵。衛。恥。さ。ん。や。開。明。君。の。垂。木。を。今。又。御。書。と
 賜。り。招。き。の。大。倒。面。目。似。て。面。伏。之。身。兼。當。感。任。の。異。口。同。様。お。ら。陪。話。と。咱
 們。听。々。尉。也。然。る。宣。ひ。そ。窮。達。時。の。采。辱。違。違。の。も。八。個。の。大。士。甲。乙。か。り。そ
 中。大。江。生。仁。字。の。玉。と。い。ふ。甲。斐。一。仁。進。て。餘。の。七。行。道。道。道。道。の。自。然。の。道。理。老
 侯。の。美。を。感。悟。の。當。館。亦。御。同。意。也。今。大。士。と。い。ふ。ま。か。の。如。突。功。あり。八。大。の。お
 取。合。の。関。の。東。敵。や。あ。る。と。い。ふ。も。一。日。の。二。秋。の。異。る。ま。か。の。美。を。思。ひ。の。ま。か。の。い。い
 庵。主。の。俱。の。謙。を。登。崎。生。の。意。見。を。理。り。松。僧。行。脚。十。餘。年。辛。く。七。忠。孝。七

初。の。玉。を。綴。り。ぬ。れ。も。尚。關。外。仁。の。一。玉。大。江。の。在。外。を。知。り。る。を。う。ら。か。ん。て。の。ま。在。り
 ける。那。人。既。に。安。房。在。る。松。僧。他。の。導。引。も。伏。姫。神。の。引。接。也。君。の。御。用。の。連。た
 且。我。お。て。ま。り。し。小。異。を。ま。の。理。り。と。推。した。素。是。分。身。同。因。果。も。八。士。前。後。輕
 重。わ。ん。ん。井。も。今。ゆ。ふ。功。あり。功。あり。と。て。原。原。大。江。の。大。功。の。賞。と。て。そ。く。城
 主。お。さ。れ。か。の。敵。の。反。回。中。ら。て。遠。く。他。御。退。け。れ。一。旦。孤。客。と。り。一。日。始。ま。り。と。功
 あり。ま。る。と。を。思。ひ。け。ぬ。事。い。ふ。と。君。侯。の。疑。心。解。れ。も。口。さ。さ。り。各。と。是。同。日。の。死。沙
 伏。死。各。々。と。違。違。造。化。の。默。契。か。の。如。く。人。智。小。量。の。な。ら。ぬ。恥。の。要。多。と。あ。り
 ぶ。と。諭。其。七。大。忽。地。胸。豁。け。俱。微。笑。て。現。行。て。の。あ。ま。ら。ぬ。親。兵。衛。大。功。是。我
 們。の。用。の。ま。の。と。ま。推。並。て。虎。名。の。勇。士。と。い。ふ。の。意。も。亦。這。回。も。親。兵。衛。復。素。藤。を
 生。拘。り。館。山。の。城。を。拔。く。べ。と。い。ふ。俱。小。貌。を。改。め。誠。意。兼。の。なり。法。會。果。を。道
 徳。俱。し。安。房。へ。ま。り。て。年。來。の。恩。招。と。謝。し。ま。し。今。ゆ。仔細。に。と。齊。一。畏。の。を

宜定珍重々々と祝しと具告すも長談脩話を長しと思ふ耳と教はる。與四郎屢點頭を
 頭々听果て鏡を更む且欬び演じて言腐爛くいふ。今番大志招會の死使を命せ
 られい死身を下るもの。死身の團王諸弟の御家臣在下の亦道節の舊僕に新
 故る身との差を察せ且死身の年來大志を招はる所を水火を避け諸國を徧歴
 度糸泊び。這回在下先も大江も逢ひ六七の大志御説を聞き死身の才御代香の
 一役のまゝ本意さうん事皆序次あり階級あり是も亦伏姫神の神謀をいひる在下
 死使に奉りて大江の逢逢に死身は後れて大志面會をある。いひもく鈍は似れ
 る異日道節們は相俱して安房へ還ふ此上竟面目望足てい謙退する誠心と照文
 連の感嘆して餘餘談を及びけ。活外信乃道節莊八毛野大角現ハ小文吾們的七
 大志共侶のかりを階子と徐ち登り齊一坐席に入る折道節の逸早く與四郎を
 死のてあせ四郎飲恙もある好をあるれ幾もを向く照文不揖讓て信乃們俱

坐と占れが餘の天士信乃莊八現ハ小文吾の荒莽山を相識する。いも認らる毛野
 大角も姥雪とさよは是はくとも再會の情義を演或初對面の欬びを舒き
 る。與四郎の只願慥忘て集感涙の找むと覺照文をその意を猜して先道節們の
 悠々と與四郎の亦水路を風波の障りあり。却市河を赴て依人夫婦親女衛去向を
 ち地とさよ路次をたて来りけ。照文を公へ招はる。大志們俱旅宿の事の趣
 又親兵衛たるまの解示する條々と告げ道節餘の天士們の便宜を欬びける登時
 與四郎の頭を拾けて茶を先道節の朝にて絶て久し見参る恙もある。いも
 欬び短詞を聲をさすもいも小可音音兩個の媳婦們の再生の吉の趣の蟹崎手
 告ありて知召れあす。いも言省はけり左も右も伏姫神の眞助を生る身の幸と思
 ふも只心苦しい君先ちもを。富山を公へ始り料は國主御公見参入り身
 して御杖持の下召措れ刺今番蟹崎手共侶の傳大事の死使に奉りいひ。鄙語

のり瘦馬不遇る荷炭の高なる猶も重なる嚴命の免れを承りて故大江腋子不俱して
 世世の那日もの敷るねも我通稱の世四郎の世與改めて與四郎と喚れははる怕る君
 が名衆與の與の一字を賜り心操を以てはれは君が御名代自身は逸早く安房に在り世
 四郎と名君が名の一字を戴く名頭を故と忘れぬ愚僕が本性の多きを饒ませぬか
 いとくと縁返まじ道節所々感嘆して通愛を忠義の用心我名の一字の所為を信せん
 その左も右ものさき同ぐ與四郎の與を改めて代の字の做す即我代の義あり又與の字も
 捨る今よりして姥雪代四郎與保と名告るねが保則措平の措とは這那同訓の共の
 昔と忘れざる誠心と後々を識者示す足るぬへ信のへも今いも我和老も里見殿の
 仕へまれば朋輩況我一人名を招きぬ副使を寄け上座置置該我も御誼並御教書只
 量義の蟹崎生の賜と美り後る今又席の高低論せぬもぬへ蟹崎主掃團の
 折の受と以而館の執成と願ふとる然與四郎の面目の身其餘も感涙を復集

めのま照文とれをちてのり趣誠小介と都てあるはと心とま六六士も東断愛を
 道節が意見と好とを諾むけは然は是と與四郎の通稱の字と改めて姥雪代四郎與保と
 名告るのり道節と主僕の礼儀と失は親兵衛並餘の六士もいもま之敬けり却この
 折小文吾代四郎を慰めて荒芽山にて曳る單節と軒失の折のり又親兵衛と他一家の
 六稔富山神の加護所る隨ふ云云といふは莊介の次團不る考嗣る舊の語の新し死
 言の交り果もを信乃の制めく道節と俱照文と告るや我今自も大庵を赴け
 庵主の勤行暇ある折は一霎時相譚ひらち所いふと不思議のゆい知る如く大法
 師の今番の法事他の施主と未定當地の寺院に報て宗門の補助と借んと欲せしは獨
 坐一念の稱名看經の外他事多し昨日の黄昏時候の年二十有餘る法師の徒第八
 九名と從へ来て大法師と談するや拙僧は這結城を某甲の院の住持へ聞ふ庵主の嘉
 言のむ當城没落の折戦殺する大將士卒幾方の忠義の靈魂菩提の與の春とて

大士來會
 文の第
 百二十
 四回の
 下茶
 又之

大
 庵法
 延代
 香使
 及七

奉為見治部補源基朝臣
 光明遍照十方世界
 念佛衆生攝取不捨
 法名義烈院遠藤大禪師善提
 行脚沙門
 大造立

八犬傳九章卷下

九九

八犬傳九章卷下



八犬傳九章卷下

八犬傳九章卷下

數十日常念佛間斷多。那諸靈魂の亡日。本月の十六日。供養と遂め。おぼせ。松僧微力
薄学。あれ。おぼせ。灰。おぼせ。の。飲。び。て。寝。れ。ば。供。養。の。式。を。帮。助。し。與。小。推。て。愚。直。と。告。ま。る。
本日。供。養。の。石。塔。波。婆。の。什。麻。せ。せ。の。お。ぼ。せ。の。准。備。の。事。を。其。の。庵。の。西。の。ふ。相。心。に。巨
石。あり。昔。其。頭。の。細。流。あり。時。土。民。の。架。去。し。右。橋。多。か。今。埋。れ。て。土。中。の。在。り。是。等。の。主。の。智。死
石。を。れ。ば。造。り。て。石。塔。波。婆。を。做。ま。す。耳。召。俱。一。徒。弟。の。内。中。の。石。工。の。技。を。做。め。り。任。用。し。ぬ。ね。
と。最。町。寧。小。來。意。と。示。し。て。石。の。処。に。赴。け。持。來。身。鋤。秋。金。の。と。穿。起。ま。と。三。尺。許。果。し。と
土。中。の。長。八。九。尺。の。青。石。と。四。面。五。六。尺。の。石。兩。三。隻。あり。徒。弟。們。是。と。穿。出。し。て。水。と。汲。て。土。を
洗。流。し。て。通。宵。塔。波。婆。を。為。す。速。多。の。と。の。う。も。あ。る。も。曉。の。時。候。の。文。字。を。送。り。多。く。彫
果。て。隨。即。庵。主。指。揮。を。請。ふ。樹。立。際。の。程。と。此。外。の。件。の。石。塔。波。婆。を。立。け。り。其。の。細。子。の。精
妙。の。只。一。夜。分。の。成。成。の。奇。特。の。庵。主。の。敬。馬。に。感。て。衆。僧。と。勞。ひ。其。本。と。廣。く。お。ぼ。せ。の。事。を。以。て
と。め。ぬ。喫。も。供。養。の。折。の。復。し。を。來。れ。と。告。別。し。て。皆。共。侶。の。と。り。か。り。の。去。り。と。ぞ。大。道

德の件の奇特を我々解して。建石塔波婆をせぬ。小実。是凡。作る。意。小。權
者。の。所。為。る。也。因。て。我。毎。商。議。を。す。今。番。兩。館。の。寄。り。を。ぬ。り。布。施。物。の。遠。路。の。故。の。代
金。を。一。庵。主。の。素。も。慈。然。の。と。せ。が。然。る。に。東。西。の。要。を。も。た。ん。然。る。に。半。分。を。と。り。其。甲。寺。の
師。徒。十。口。の。是。を。施。去。り。又。其。半。分。を。と。り。米。の。易。錢。を。免。て。り。施。物。の。布。と。は。則。是。本。願
主。の。功。徳。に。も。多。く。以。庵。主。告。旨。を。回。試。し。大。師。軟。び。大。さ。る。を。も。た。ん。其。の。美。宜。に。も。た。ん。一。登。崎
生。商。量。す。て。多。く。相。計。ひ。ぬ。ね。と。い。れ。り。餘。日。な。れ。ば。米。穀。經。紀。と。錢。鈔。を。見。る。肆。店。の
立。上。に。信。を。と。吩。咐。し。其。程。を。事。す。と。の。事。を。相。計。ひ。ぬ。ね。と。い。れ。り。且。其。照。文。諾。し。て。嚮。咱。們。大
庵。主。赴。く。折。奇。の。法。師。の。案。内。を。も。た。ん。其。後。の。後。談。誦。け。れ。ば。代。四。郎。の。奇。と。稱。え。て。來。死。經
紀。の。事。を。程。の。目。の。首。を。那。錦。然。店。より。昨。日。七。大。吉。詭。言。暗。の。衣。裳。と。刺。縫。て。都。て。り。來。不
け。り。又。米。穀。經。紀。の。見。錢。見。の。大。吉。指。揮。を。從。て。主。管。する。者。各。一。名。小。厮。張。燈。と。兼。り。來。け。れ
照。文。又。六。士。們。と。商。量。と。布。施。物。の。代。料。百。金。を。と。兩。個。折。給。て。却。五。十。金。法。會。の。幫。助。を。ん

とい。那法師の布施を乞ふ。残り五千金と分ちて。千金を施米の價に遣し。千金を銀に見て米
 の錢を明の朝辰牌の。大庵を送れ。那庵のあ地方を町寧の誨をけ。兩個の注管のあ。銀を
 金子と受合も。実を寫し。呈請して。俱小宿所へ退り。當下又照文大士と相計り。施の儲
 好といふ。事退迹不知せ。詰る。と巧る。とと。猛果。五寸の紙牌百枚許。施の。を
 寫さる。人言。け。時。種。立地。寫果。照文。隨。即。伴。當。親。兵。行。中。吟。吟。の。宵。件。の。報
 條。路。備。樹。の。幹。を。と。或。町。の。門。柱。貼。り。の。餘。の。明。見。晝。餉。と。店。小。さ。る。あ。る。ま。ま。て。言。は。れ。

夜。短。く。て。寝。る。目。の。あ。明。あ。け。然。而。照。文。大。士。の。俱。浴。湯。一。梳。り。早。飯。果。て。千。餘。個。の。主
 僕。飲。店。を。立。出。て。大。庵。を。赴。け。畢。竟。金。碗。大。法。師。の。千。餘。年。の。宿。念。成就。先。に。追。福。大。念。佛。の
 結。願。供。養。の。光。景。の。出。像。と。あ。不。載。れ。猶。詳。不。知。ち。欲。せ。開。り。又。這。下。の。東。解。分。る。を。聴。終。り。

南總里見八犬傳第九輯卷之十七終

南總里見八犬傳第九輯卷之十八

東都 曲亭 主人 編次

師命を守りて星額遺骨を齎せ
 第百二十四回 殘捨を受て癩僧禍鬼を告ぐ

文明十五年。癸卯の四月十六日、大法師の宿願成就し。下総國結城郡城西と云え
 たる古戦場の草庵に。嘉吉の義死の里見氏。幼の春王。安王。兩公。連城主。結城氏
 朝を首とて大塚匠作。茂井丹三。直秀。們。當。日。戰。歿。の。忠。將。義。士。の。諸。靈。魂。の。菩提。の。與。り
 獨坐不退の常念佛の結願供養を遂んとせ。則是五十年忌の前修。於て。嘉吉。元。年。辛
 酉。の。今。あ。至。て。四。十。三。年。念。佛。修。行。の。其。創。より。八十。許。日。及。ぶ。る。本。日。即。那。諸。將。士。の。祥
 月。亡。日。を。念。入。程。の。大。塚。信。乃。大。山。道。節。大。川。莊。介。大。飯。毛。野。大。村。大。角。大。飼。現。八。犬。田
 小。文。吾。們。の。七。犬。士。の。里。見。殿。の。代。香。使。蛭。崎。十。一。郎。照。文。副。使。燒。雪。代。四。郎。與。保。と。共

侶。照文の伴當と八個の親兵を相從ふ。その旦辰の初刻に、大庵へ参會を折々那某
 甲の院の住持長老九個の徒弟と相俱して寺々來りて庵中在り。庵主と副けて
 經卷讀誦の最中より、照文と大士の持し來り圓坐を庵邊の樹下小谷
 分ちら布を坐して讀經の果を等程の昨宵照文が吩咐る經紀兒們的精米數十
 苞と永樂錢七八十貫文を俱に數輛の車子積りて連の推さきてて來りける。照文と
 是を見て伴當們の受會して經紀兒が去りて、施の八人別米一斛と錢百文と
 相定めて伴當們より示し、その目為の準備ある。白麻の幕七八張を、大庵の檐下
 より真直供養塔の頭まで左右の樹木と片合々透間もく張且、且西道の席
 幾枚狭長く中央の布一を、準備送る。整ひて八個の親兵を身甲小各々
 肱着臍甲も、押棒を衝立く。分れて非常の警言ゆる。勿論侍品の礼服ゆる。照
 文の長袴大士の肩衣半袴も、俱に細の夾衣暗か小腰刀と帶さけ、然るに曉霞

代四郎も麻社袴を被れ、施の折の頭入る。錢を傾ち米と料を配り、その
 は直塚紀二六宰領より、約莫の美相與る伴當都て立拵りて、準備暇ありけり。
 徳而已牌左側、草朝廻向の讀經果一、大法師の衆僧と俱に徐草庵と立坐
 石塔邊と距ると六七尺、儲の胡床を着せ、身の小栲の夾衣、香流の法衣、黒
 綸子の袈紗衣披て、小拂子と合さしりける。その容素朴に似る。松體竹心、骨見
 最も尊く足えり。相從ふ法師們的十口都て一樣に、長老沙弥の差別も、皆細
 衣被て、白紗綾の袈紗衣を、左右兩側は排立て、更供養結願の讀經あり。梵唄
 和讚の妙音、聽者齊一心耳と澄。木魚鉦聲の响、呂律の叶。天樂花を雨を
 るの祥瑞あり。宝器云不足り、其式を失ひ、衆徒実小匡り、深信猶餘る
 ち供養の讀經復一時許、既ふ讀果一、大法師の宝座を立て、過去七佛を
 唱名膜拜を、遂に諷誦の願文を聲聲爽々諸讀を、その文のへり。

薦んとて義実灰之を聞く相懽て寝れ也。因茲涅槃經三部孟蘭盆經五
 部隨求陀羅尼三卷を捐寫し奉り使臣蛭崎照文等齋して以供献焼
 香の眞礼を祈り呼佛弟子の功德廣大を量迷津慈航の資を爲す所胸月
 眞如虚一を其善念の投す所上有頂天小窟さぐ下い金輪際融通一と
 弥陀勢至觀音の三尊俱降臨し五五の諸菩薩天部善神肩を比へて影向
 あら異香馥郁とく金蓮葩と降し天外の音樂節奏の妙る鳳蕭龍笛
 睡蛇を覚さ慶雲忽岫より起り鬘鬘とびらととびらと然らば則數萬の
 精靈必是之惡の火坑を長く脱離して衆生量壽の寶座遷り二十六天の仙
 室向坐して常寂光の樂邦遊人乃至二閻提普く八正道赴て受と介の事
 由を本願の大檀那前治部大輔里見義實朝臣安房守兼上總介里見義
 成朝臣代り奉り浄場修行の沙門、大行香使臣蛭崎照文等敬白とす

誦し登時蛭崎照文の七犬士們小揖をり徐々身を起して塔前
 找む程不代四郎紀二六あるゆて安房より西侯の寄さるり經卷と香奠を西
 へ小捧け相従ふ照文が身邊措くと照文をり受合々塔前小具程不代
 四郎と紀二六も舊の樹下へ退け然らば又照文の塔前朝端坐して且石塔
 仰て看る小細工の精妙いづもあむ第一の石壇あり義実王の先考妣の神
 主ありその傍水二三鉢を装束可る壺の網裏表内容ありある何もの東西る所を
 知るむ次の壇の左右あり花を供へ水轉の水盤あり下壇あり香爐あり塔の四方
 多樹枝あり四箇の楮幡を吊し掛て諸行を常是生滅法生滅々爲寂滅
 爲樂との涅槃經の四句の偈を寫し照文隨即懷より伽維一裏合々出
 去茶く焼香あり額衝に并々黙禱し身起り退け大塚信乃立替り
 找寄り焼香を信乃が大父大塚三成及外祖井直秀ハ忠勇義烈拔群ゆ

昔年結城落城の折戰殺の譽ありあつて大士の中。信乃を第一番の焼香也。達
 せける信乃の懐舊の涙と俱に再拜して。空しく退りける。次は道節。莊介。毛野
 大角。現八小文吾。們立替々々次第と追て拜し訖。照文。二。び。找。出。て。代。四。郎
 と共侶。私。の。焼。香。也。介。程。小。大。法。師。の。本。処。小。退。坐。して。連。の。木。魚。を。う。ち。鳴。り
 傳。十。個。の。衆。徒。と。異。口。同。調。念。佛。數。百。遍。唱。へ。る。聲。清。曉。と。澄。旦。て。現。寂。滅
 為。樂。の。偈。句。盡。か。く。思。の。後。若。る。ん。り。け。る。信。而。諸。士。の。焼。香。果。一。然。大。法。師。と
 衆。僧。と。俱。唱。名。の。聲。を。歌。り。て。合。掌。して。念。き。く。南。無。歸。依。佛。南。無。歸。依。法
 南。無。歸。依。僧。三。宝。請。誦。一。奉。る。追。薦。真。福。の。諸。精。靈。故。鎌。倉。の。管。領。持。氏。朝
 臣。の。兩。公。子。春。王。君。安。王。君。法。號。某。院。某。大。童。子。二。唱。里。見。治。部。少。輔。源。季。基
 朝。臣。法。號。義。烈。院。忠。慈。賢。山。大。禪。定。門。孺。人。鳥。山。氏。貞。心。院。慈。德。如。峯。大
 禪。定。尼。當。城。の。先。主。故。下。總。判。官。結。城。氏。朝。朝。臣。法。號。某。院。某。大。居士。春。安

西公子の小傳大塚匠作三成法號訓山栄后遺壁禪定門夫妻其子大
 塚番作一成法號知命達德速逝禪定門孺人藤原氏諱ハ多東法號節
 操如竹似松禪定尼信濃園人氏井丹三藤原直秀法號當覺自證以
 真居士の它主嘉吉の義兵忠戰陣殺の列將士卒修善伎の妙典及念佛の
 功德の依。一蓮托生永劫極樂土子孫後宋施主敏系昌南無阿弥陀佛南
 無阿弥陀佛十念訖更亦結願の偈を唱て曰
 圓輪如輪歲月流 個中名利等浮漚 漫勞計較分兵林楚
 且任稱呼作馬牛 世事看來從理順 人謀怎似所天休
 要知弔滅酬恩訣 念佛勤行成就秋 南無過去未來見
 在三世諸佛菩薩 唱訖れば幫助の長老も亦偈句を誦して曰
 願以此功德 莊嚴佛淨土 上報四重恩 下濟三途苦

若有見聞者。悉發菩提心。盡此一報身。同坐極樂國。
十方三世一切佛。諸佛菩薩摩訶薩。阿耨多羅三藐三菩提。

唱訖。從僧都て低頭して供養。於是果承けり。登時庵主、大法師、拂
子と合身を起して。照文の坐邊に來て。西館より寄ぬ。經卷並に香奠の款
びを演る。七武士の口誼。却那壺を携て。幫助の長老師弟と俱。照文を
誘引立て。草庵を退り。這庵極め。陟れ。十僧と一客の。這宅ハ膝を容る
処。故ハ七武士。縁頗。席と布して。肩と比で。俱坐。幫助の長老。對面して。飲
け。獨大江親兵衛。這小集。闕。送憾。且孝嗣と次。團大。門の。噂。有り。あり
ける。照文ハ。大法師。今日。石塔。婆。具。措。壺。の。を。問。け。大。答。て。然。と。件
一。義。の。問。れ。も。疾。告。を。思。ひ。ま。る。暇。を。給。り。大。士。達。も。听。ぬ。と。佛。壇。を。え
か。り。て。那。壺。ハ。今。朝。這。長老。の。携。來。て。贈。り。ぬ。先。君。季。基。朝。臣。の。送。骨。ハ。長。老。ハ。這。近

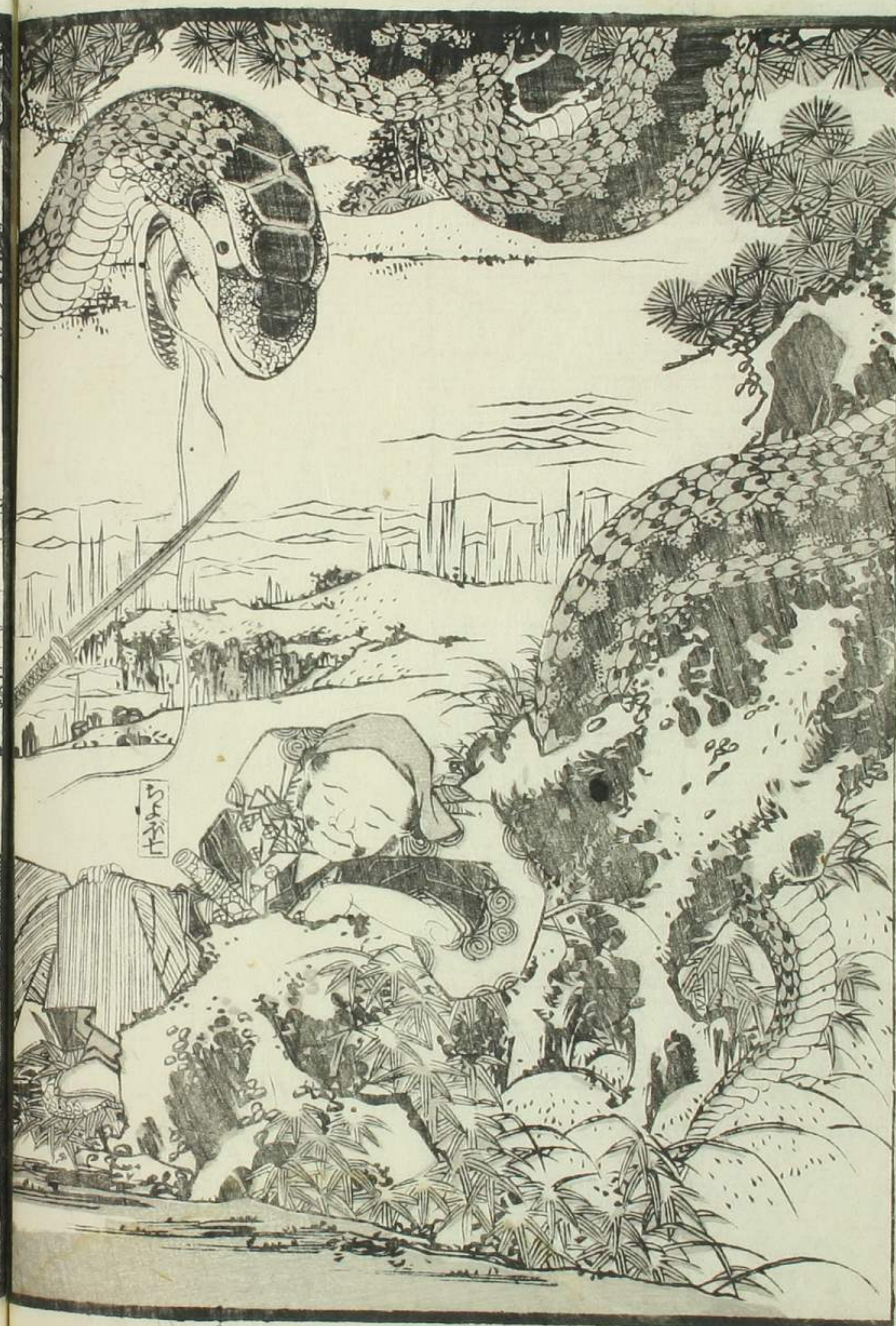
邊。能化院の住持。法名の星額。先住宝珠和尚の法燈。と續。給。ゆ。り。も。
今朝。肇。と。咄。知。ぬ。あ。る。師。父。宝。珠。和。尚。昔。季。基。朝。臣。と。方。外。の。交。り。あり。あ。を
り。季。基。陣。歿。あ。り。折。首。級。と。命。會。隱。て。亡。體。と。共。煙。火。做。ぬ。然。と。思。ふ
と。あれ。と。壺。の。藏。り。秘。措。せ。後。々。も。葬。ら。せ。居。る。年。と。歷。て。宝。珠。和
尚。遷。化。の。折。今。の。長。老。星。額。師。父。送。教。あ。り。季。基。主。の。朽。骨。ハ。那。人。の。後
なる者。贈。ん。と。思。ふ。と。あ。る。年。未。秘。措。せ。是。より。の。後。年。の。序。癸。卯。丁。卯。比
必。仍。脚。の。僧。有。て。姑。且。あ。の。地。杖。を。歇。て。住。々。の。林。原。ハ。其。并。と。締。む。と。あ。る。ん。と。里
見。の。舊。臣。あ。れ。汝。情。地。ハ。我。意。と。告。て。件。の。送。骨。と。附。屬。せ。然。と。も。正。に。證。据。を
く。疑。む。と。あ。る。ん。我。始。り。如。右。思。慮。の。季。基。陣。歿。の。折。素。も。隨。身。の。大。刀。一。口
あり。と。送。骨。と。共。秘。置。け。開。祖。公。と。命。け。那。家。の。名。物。を。知。り。て。あ。る。ん。と
ら。ん。汝。の。名。を。と。せ。と。叮。寧。小。送。託。せ。れ。て。送。骨。の。壺。と。那。名。刀。と。合。さ。て。遞。與。

多うとそ徳而今茲の春よりして拙僧の地ふ并を締めて常念佛を修めたる
 ける事情を多ふとて狹星額長老の知りて御當の徒弟達を相俱して我為不
 石塔婆を一夜の間造り立て法會の莊嚴を幫助ある今日亦早旦より師
 弟共侶の這里の來まで始て件の來意を示して先君の御送骨と那名刀を拙
 僧に授賜するの事結願供養の讀經をも助聲せられ洪恩徳義何事殊
 又これ勝た拙僧這地の來まで始より季基公の墳墓のありやせんと思ふて普
 く里人は尋問ひ小竟は知るよりありて歎かすのありける小料も善知識の徳
 義に依り御送骨を造りける歎かす物も信じて是併我兩館の御孝感の致
 せ所拙僧が所以出ある先や件の名刀を拜見せられ我言の錯ると知れぬとい
 傳躬て祖公の名刀と命かけて照文の邊與せし奇談の敬馬く照文の俱あり
 所く七武士及縁頼の片隅の尻をうち撰て在りて代四郎も感嘆せざる者も

宝珠和尚の智慧廣大る未來を知る送囑の趣又星額師の徳誼老實
 共の難し得てと一唱三歎異口同様に一垂時稱えて已まのけり當下蛭崎
 照文の祖公の大刀を受命て面三番うち戴て七武士もせんを縁頼の邊に
 膝を打ち皆共侶これを見る小刀の長二尺の過ぬるその表装はなるけん鍮
 漆の多く鍮朽れ靴糸失て鞆破れも恥く後放りて内を相る小刀の毫も鍮
 らも夏る不寒に稀世の名刀小鍛治が小烏干將鎧邪が太阿龍泉とて是の優
 きたと思ふ可の鏢十六言の記文ありその文に依り馬之力不料所得祖公之刀
 源季基と鑽着てありければ疑へども皆共侶嘆賞し照文刀を
 鞆に收めて大法師返してはさう這名刀の來歴の口碑に傳へるは道徳の
 知のありや七武士連の不知なるべし星額長老も聞召れよ卑職総角より時親を
 輝武の夜話も听るにありむ先君季基朝臣上毛の御館不在に比有一日近



名刀名將
 暗小
 狙公と極小



習四五名とて射獵の爲遊山去る。其頭を蕃山の麓、底不知と喚、池
ありて老る松、兩三株、池畔に敏系粒、その樹下に祖公と名づる漢子、株を任、
身單、睡俯く在り。季基朝臣、蕃山より、麓に馬を找んと。迥、其方を見、目玉
ふ、件の漢の頭の上、最怖る、蛇、蛇在り。其軀の太、千載の松、異なる、件の
池より出、るる、頭、松の杪、在りて、尾、水中、隠れ、る、其長、推て知る、眼、百
鍊の鏡を、雙、掛、る、像、く、口、血、装、り、盆、似、て、長、舌、古、火、焰、然、と、疑、る、那、漢、
の、飼、の、猴、駭、怕、れ、逃、ん、と、ま、れ、絆、援、れ、て、同、擡、く、程、大、蛇、不、吞、れ、け、然、も
大、蛇、不、飽、也、又、祖、公、と、吞、ん、と、那、松、枝、より、頭、下、を、口、と、張、り、舌、と、吐、け、既、く、近
く、程、不、怪、む、祖、公、の、帶、さ、け、る、腰、刀、忽、然、と、脱、出、て、是、れ、升、て、件、の、大、蛇、を、渡、り、制
め、り、听、ん、と、大、蛇、の、不、勢、ひ、撓、ま、り、松、の、蔽、系、茂、不、敷、れ、て、出、去、他、退、げ、刀、亦、自、然、と、鞘、
返、り、入、り、ぬ、一、霎、時、あり、と、大、蛇、の、頭、を、伸、け、と、吞、ん、と、ま、れ、腰、刀、亦、鞘、と、出、て、御、座、聞

ふと始の如し、季基朝臣、一町、蕃山の脚、馬を駐め、這前、未、聞、の、光、景、と
ら、長、觀、て、在、り、俱、駭、怪、と、伴、當、と、え、り、若、們、他、と、え、り、狄、刀
劍、の、身、を、衛、ま、る、素、より、その、徳、あり、と、又、那、漢、子、の、腰、刀、就、中、世、稀、る、神
宝、を、あ、ら、ん、ぎ、り、然、と、過、さ、慥、隱、の、情、を、似、し、極、み、て、ゆ、せん、と
と、宜、ひ、ら、上、挿、の、獵、箭、二、條、抜、合、て、箭、路、を、量、り、馬、を、找、め、ら、前、刺、ま、
る、大、蛇、の、猶、も、祖、公、と、吞、ん、と、又、頭、を、伸、き、季、基、透、さ、彎、固、め、る、矢、聲、を
發、て、彈、と、射、ぬ、寬、錯、る、件、の、大、蛇、の、右、の、眼、を、比、深、く、射、れ、一、霎、時、堪、え、仰、互、
と、季、基、前、刺、速、の、燬、煉、を、二、箭、大、蛇、の、咽、喉、と、射、と、共、裏、決、窮、所、の
深、癢、弱、と、松、の、杪、より、撞、と、墜、ま、死、で、け、祖、公、の、响、も、驚、駭、に、覺、え、既、蛇
毒、觸、れ、舌、強、り、要、立、ま、介、程、季、基、朝、臣、の、伴、當、と、祖、公、の、件、の、よ、を
告知、して、开、が、身、邊、馬、を、找、め、腰、附、の、葉、籠、る、解毒、の、丹、茶、を、賜、り、祖、公、の、稍

様牽の
各刀の安
房の置の
重宝多
よ白石
先生の筆
記不見え
たるを借
用者官
原据ある

即便其刀の價とて金百兩を合せしめ朝暮七の辰を
欽び望の外に生る一期の福德の上と受戴は重宝多
且て生活の便着ありと慨き思ひいふ然る東西と云知ざける刀の價は這樣
蒙色百枚を賜る御恩御恩と重宝多を合せしめ是れは是れは候牽く
技を生活おせむとも且夕安老と送り這御慈善の餘慶とて家長久御
子孫敏目日千秋萬春萬々歳と壽詞を囀り欽びを稟し酒を賜りて前も徳
正者十二分醉し盡し退り朝暮七の辰の下話る徳而季基朝臣の腰
刀の表装を改め思ひの隨に造らし祖公と名づけはめて愛玩して一日も帯ぬべしと
るり一季基轂のれぬ折祖公の名刀も何人の手も落しけんあとも知るるは候を
龍田の老侯二の功臣杉倉堀内に見覚えたれ君臣閑談の折々不送おの美をいひ
いと惜しむいと今居るの年と麻生と名と不知るの稀るん先君の御送骨と

共不件の名刀の料も又世不出す正不共菴主の家裏ふるせぬ一犬奇事之両
館のれ欽び然アそと推量考そまれば我門さ不面目あり併宝珠星額兩大徳の
賜て菴主の功德あ不及り有るは辰子に妙造化をいひるれと一五十一と解示
を送刀の末歴分明るれば大の欽びいひはし七士大士們も信の耳新る心地と
貌と改め膝を找め照文と共侶又佛壇する先君の送骨を齊一梓とけり當
下照文の大法師不商量多五千金と布施として星額師弟不薦め與る不君
侯父子の年の年来施を好むありと送骨送刀の欽びを町寧不演る程不大法
師由而館より奇きまのり經卷と香奩を合寄て俱不星額長老不贈りて
やう松僧へ一所委任あり今番故御還りは是等の東西にせん方る願ふ長
く貴院不留め先君並不先亡の為不廻向を做めらる幸ひるんかかと憑むと
星額うち所て出家の無慾を心と一鉢の齋一領の衣饑を凍されが足れりとまへ

加 恁れは是等の財宝の拙僧も亦要るはと貴捨とゆけは推辭之かり。又思ふより申
 あれは姑く與りひんと答て件の五十金を財囊の俵不項不掛て懐不楚と收め又香
 眞と巻軸の両箇の袱兒不分ち裏と徒弟們は通與けり。浩処不小乘屋より二
 四個の小厮們が最大は多麗兒二荷不椀家伙までも合納する。蔬菜の晝饌とて
 來不ければ代四郎紀二六立迎て庖福不擔ひ入まると。會出て主客十一口の法師們と
 照文と七武士これを差め次不代四郎夥兵の毎及紀二六以下の伴當まで送中
 るくころへ果一又椀家伙を鹿兒不收めて持して馳て小乘屋の小厮們を返しけり。
 介程不這頭四下る窮民乞弓の昨夜街衢不揭示さす。施のよりと今朝少知
 して時分と料り。陸續と、大庵(東)者蟻の甘不附く像く幾個と不涯を知
 らる豫期しころの代四郎紀二六兩隊不これ。伴當們不米と料り夥兵と錢を
 合ふる不絶不半時許の程不漏さ施したければ残る錢米の一人不合まは可不

るりけり。恁り一程不個の衰老法師の鼻の損ね足も癢さ。竹の杖不推りて辛あそ
 來不ければ紀二六みづう立迎て招きも。左見右見て和尚の脚の不便を諸事
 遅らければも。はるる果報あり。施行の目今晝処まで。一兩人分残り。定よりヨメけ
 まども餘さま合せん。表裏ありと向ふと衰老法師へち。南無阿弥陀佛を造
 化より方便を。然あふ不賜らんと。麻の紬附る。茜染の頭巾と合出さ。啓
 くと奴隷が。あるて残る米と一粒も漏さ。梵と料り入して。錢三四百文残り。と卒
 とそそ。俵合まされ。衰老法師の笑ひ。不錢も一緒不推勝。はと拾駝。と亟あへ去る
 なる。那這と。と紀二六。詠り聲。苛立て鈍。這と巧坊が施。と不受。の要
 うら不疾。らむ。と叱ると。聞き。冷笑ひて。洒家の左。右もあれ。刀祢連。を。疾去。で
 幾まで。不這里不在。せる。知。ま。這城の。下。通。奇山。逸。匹。寺。の。住。職。と。徳。用。和。尚。と
 喚。做。し。ら。あ。る。今。番。這。里。る。庵。主。が。法。燈。供。養。不。他。們。を。請。で。恁。る。施。の

少えあれ。徳用和尚怒り不の堪む子院枝寺木御示一城内一二の権臣を檀越不許
 へ。大勢を以て推寄る。搦捕んと隊配を信れば僧俗數百の大敵。今目前不起らん。
 開を避む。七敗と等。此柴薪の上。巢を造る。燕を以て鬼心魚目をまき。その下と庵
 主の施主達も疾稟一。施物の報い。告げり。疑ひ。ひそかに捨て。又杖を携
 して。脚を曳か。か。怪し。と目送る。紀三六代四郎。胸安ら。ね。なら。連立て。そ。そ。其。并。不
 注進。々々。大照文七。大士。們。不。事。候。々。と。告知。ま。と。大。大。の。所。々。眉。と。頻。卑。め。て。開。を。の
 ろ。ぬ。か。約。莫。今。番。の。法。延。供。親。の。我。獨。力。不。做。ま。の。る。當。城。の。先。主。房。結。城
 氏。首。と。て。嘉。吉。不。陣。殺。の。列。將。士。卒。の。喜。提。の。與。不。ま。る。好。事。と。非。如。那。里。生。也。も。
 歡。る。死。筋。る。不。開。と。の。不。罪。と。て。搦。捕。ら。る。と。と。理論。照。文。七。大。士。們。も。共。侶。不
 點頭。大。徳。の。意。見。理。り。も。不。必。信。の。錯。誤。不。そ。あ。ら。ん。と。め。と。の。を。星。額。長。老
 推。林。不。め。と。さ。る。宣。ひ。そ。善。惡。邪。正。の。君。子。小。人。の。取。る。所。の。用。心。同。く。も。抑。逆。匹。寺。の

住持徳用。便。便。一。と。世。智。不。長。り。是。と。り。て。ま。る。佛。学。の。不。あ。ら。ね。と。俗。の。視。聽。を。傾
 る。談。義。説。法。の。口。才。あ。り。加。旗。出。家。を。相。応。一。か。ぬ。武。藝。と。好。ま。て。且。其。替。力。角。を。も
 折。く。一。信。れ。む。の。辨。慶。も。他。が。右。不。か。ん。と。か。ら。一。と。人。み。る。思。ひ。遮。莫。小。人。の。癖。を
 且。その。仍。狀。正。一。か。ら。常。不。他。宗。と。誹。謗。し。て。已。不。勝。ま。る。憎。む。と。雖。敵。不。異。ま。る。と。ぞ
 る。當。城。主。の。香。華。院。也。の。地。第。一。の。大。利。を。七。八。箇。の。子。院。あり。又。十。餘。箇。所。の
 屬。寺。あり。皆。是。同。氣。相。求。る。奸。佞。の。賣。僧。下。風。を。立。て。枝。葉。院。不。住。持。と。され。ら。の
 故。不。城。内。の。諸。侍。檀。家。甚。々。と。就。中。結。城。の。家。臣。長。城。枕。之。不。逆。利。聖。名。衆
 司。經。稜。根。生。野。飛。雁。太。素。頼。と。喚。做。ま。三。十。八。先。代。の。家。宰。筋。也。大。公。執。也
 嘉。吉。の。役。不。戰。殺。の。老。黨。え。けれ。結。城。の。家。再。與。の。初。也。他。們。の。職。祿。人。不。超。て。俱。不
 兵。馬。隊。長。の。上。席。也。氣。も。相。似。也。無。字。俗。骨。也。胸。廣。く。小。人。を。先。祖。の。忠。義。を
 鼻。不。拭。て。備。若。無。人。の。奉。動。ま。る。然。件。の。徳。用。と。師。壇。の。交。り。淺。く。不。素。より。暇。あ。る

身みをを拘く見みをを牽ひにに隼はやぶさ鵠こくをを放はなち遊あそ獵りと事こととらら開ひらけ飽あえ共とも俱あし那な逸いつ四し寺じ小せう参さん
詣より住ぢゆう持ぢ徳とく用ようと武ぶを講かうし人ひとを誚しやうと樂がくととと殘ざん忍にんを斬ざん心しんの暴ばう雄ゆうをを必かならず徳とく用ようを
相あ資しけと這こ方まへと打うち向むかふとと實まことに大おほ敵てきと今いま更さらににああるるとと庵あん主しゆ今いま番ばんの追お薦せん
供く養やうに單ひと里り見み殿でんの兒こ與よれれ敢あて人ひとを雜まささけけ情なさけの修しゆ行ぎやう好このとと心しんを救すくふ施せ
の報ほう條じやうを城じやう下かの四し巷がうに布ふれ故ゆゑに立た地ぢに人ひとが知しれれて這こ殃やう危きをを讓やしし夫そ寺じを造つくり
僧そうの施せ去されれ只是ただ有あ漏ろうの縁縁故ゆゑに連れん磨まの取とららるる以もつて施せの富ふ裕よくの慈じ
善ぜんをを兼か愛あいの義ぎをを庶しよれれども又また名な聞きに似にたるるもああれ時とき宜よろしし用もち捨す去さししの憚はりの言こと
多おほく施せの二に事ことに過あり及および各おの位ゐの千せん慮りよの一ひと失し後ご悔くわいああり達たつべべ誠まことや唐たう山さんの常じやう言ごん
二十六計じふに走はるるとと最たひ上じやうとといいふふとと立たちち居ゐるる危あやはは邦はうに居ゐるるとと利り
害がいと談だんし得とく失しつを説せつく教かう諭ゆ叮てい寧ねいととけけ大おほ家か敬かうく開ひらか中ちゆうに大おほ法はふ師しの沈しん吟いんしたた
頭かぶと拾しやくは感かん服ふくして長ちやう老らうの示し教かう道だう理りを稱せうし一切いっ衆しゆう生じやう自じ他た平へい等とう只ただ結けつ縁えんを任にんする

乙おつ如にょ來らいの本ほん願げんするるものもの救きうふ他た施せ王わうと討とつつとと利りを謀まうるる是こゝ名な聞きに庶しよれれ且かつ他た
領りやうの奔ほんと締ぢむむ今いま番ばんの遠えん已い追お薦せんを領りやう主しゆと告つげげしし現げん松しょう僧そうがが行ぎやうするる
に甚おほままたたととりり後ご悔くわいするると照てう文ぶん然ぜんとと尉ゑいに難がたで俱く頭かぶと痺しびれれ大おほ小せう
意見いけんと尋たづねねれれ道だう節せつ勃はつ然ぜんと膝ひざと杖つゑを今いまゆゆ雌め々め々め何なにを按あんせせ畢ひつ竟じやう施せの
一條いっに我われ們らの思しひ起おこしてして薦せんゆゆ做しよ去さしし我われ們ら七しち名な踏ふ踏ふりり寄よ寄よるる惡あく魔ま鬼きと川がは
拂はらんん蚤そう崎さき和わ殿でんの庵あん主しゆ俱くししとと當あた所しよを立た退たいめめとと照てう文ぶんをを立た開ひらけけとと
らら咱おれ們ら和わ殿でん達だつと招まう會かいの御ご使しを擇えらびび偶ぐ環わん會かいけけしし今いま事ことの危あや窮きゆう及およびび縦たて
大おほ徳とくに俱く去さるる捨すてて那な里りにに退たいるる只ただ命いのち運うん不ふ儘げんせんんとと惴すいるると信しん乃の推お禁きんををそそ
議ぎ定ぢやう不ふ理りののれれも安あん内ない知しるる敵てきを留とどめめるるも退たいくくも安あん危あやにに定ぢやうむむ我われ們らの左ひだりもも
右みぎもも大おほ徳とくの先さき君きみの御ご遺い骨こつを衛ゑいむむののああらら二にのの勇ゆう士し相あ俱く去さしし心しん許こるる思しれれ
る我われ們ら義ぎ兄けい弟てい七しち名なの中なか一ひと人ひと和わ殿でんと俱く退たいんん推お辭じするると諫いれれ照てう文ぶん争そうふふとと

び。あつ。そのた。あつ。の。い。さ。か。の。信。と。備。を。な。す。と。大。阪。和。殿。の。智。囊。の。
 富。了。極。て。宜。に。王。意。あ。ん。快。隊。配。と。定。め。ら。れ。て。毛。野。の。毫。も。礙。議。せ。ま。否。我。と。
 ても。免。身。們。と。異。る。良。策。を。け。れ。も。寄。隊。大。勢。を。ん。あ。寄。兵。を。め。敵。と。分。ち。て。一。時。の。
 拉。ぶ。小。あ。づ。ぐ。り。開。と。皆。這。里。を。敵。と。名。指。角。の。戦。心。許。り。今。愚。意。と。も。計。ん。
 養。崎。失。伴。當。共。侶。大。庵。王。不。從。て。関。宿。路。立。退。べ。大。塚。和。殿。と。燒。雪。と。養。崎。
 生。と。相。資。け。て。趕。來。敵。と。防。び。る。萬。一。由。過。る。と。又。大。川。大。田。大。飼。の。夥。兵。二。四。名。を。
 從。て。這。里。を。距。る。と。二。四。町。東。の。茂。林。を。有。り。ま。す。其。邊。邊。の。樹。の。枝。に。紙。幡。を。掛。け。し。
 勢。と。た。せ。敵。の。先。鋒。を。疑。せ。て。其。境。に。擊。つ。捕。ら。べ。又。思。弟。の。大。山。大。村。兵。侶。亦。殘。
 る。夥。兵。を。相。從。へ。這。草。庵。火。を。放。て。煙。と。揚。て。敵。と。分。る。も。れ。も。敵。も。亦。間。謀。見。成。
 り。と。這。方。の。虚。実。を。窺。ひ。知。る。も。あ。ん。縦。小。勢。と。知。る。も。一。人。當。千。る。取。ら。る。
 けれ。討。退。け。ん。易。か。る。べ。い。の。餘。の。多。談。は。固。様。と。意。志。を。送。り。解。示。信。

の。どう。せ。ら。ま。う。す。け。ら。ぶ。が。ぐ。と。あ。ん。の。乃。道。郎。莊。介。們。大。角。小。文。吾。も。皆。共。侶。好。と。稱。え。て。先。夥。兵。の。中。兩。個。を。課。て。敵。の。
 動。靜。を。と。り。ま。し。も。城。下。の。方。遣。一。け。り。小。程。代。四。郎。の。件。の。軍。議。と。ら。ち。听。て。倒。ふ。
 飲。む。找。出。り。難。ま。る。も。佳。ら。を。礼。と。て。叱。ら。れ。る。知。ら。ぬ。も。小。可。偶。故。主。不。逢。て。
 今。の。危。窮。及。ぶ。折。ゆ。捨。て。向。容。々。と。安。房。へ。退。り。久。し。く。の。憚。り。ま。す。本。意。ま。あ。
 ら。ん。死。身。と。も。生。る。も。共。侶。と。も。思。ひ。願。ふ。の。依。留。置。て。道。郎。隊。を。諫。め。
 い。さ。し。と。切。る。願。ひ。と。道。郎。聽。く。聲。を。立。ち。そ。亦。益。の。口。誼。へ。御。高。も。既。に。
 ざ。り。致。知。老。も。今。の。里。見。の。家。臣。我。們。と。朋。輩。ま。め。の。私。情。を。演。る。の。義。我。違。へ。り。
 最。鳥。辭。へ。と。窺。れ。小。文。吾。莊。介。大。角。の。共。侶。を。慰。め。て。皆。云。と。論。さ。る。代。四。郎。才。の。
 兼。伏。ま。俱。の。准。備。を。ま。ら。け。當。下。信。乃。の。庵。主。向。ひ。て。大。德。い。ま。御。送。骨。を。備。て。
 當。所。を。退。り。俱。一。ま。あ。ん。か。ら。れ。て。大。一。議。及。ぶ。承。子。其。王。の。骨。壺。
 と。粗。公。の。名。刀。と。愛。小。藏。也。脚。絆。を。着。け。て。草。鞋。穿。締。め。發。佛。を。搭。駝。て。出。ん。

とある折星額師弟とて長老今昔の好意の千萬言の殺年かろう。
縁場去異日亦再會の折もいへ聞諍の側杖打れんとて退りぬ。とて折星額
らち听て否。拙僧も置りて寄隊近づく立迎て和解して相計いん。その
亦出家の役をれ。とて大の點頭て又道節們をち向いていませぬ。好きて人を
傷りぬ。とて一個のとも敵と殺さる日属の作善空とて。自他の功德と張んぬ。其を
忘れぬ。とて論せ。道節らち笑いて。その亦無理を軍令る。戦兵は原是凶器なり。今
大敵と戦ん。殺さて克んと合んぬ。最做く。死所ゆる。近曾大江親兵衛が武功を
傳へる。富山でも館山でも幾千百の死黨と一個の殺を降伏する例もあれ。
左も右もせん。とて井介推禁めて。その我咱們的肯い。かり。何とあれ。人の各。ゆる。あり。
ゆる。あり。大江の仁字の玉の應とて。その性。仁恕る。人の。他が。仁慈。及。及。と。又。立
優る所もあらん。非如教の違。とも。饒。ぬ。と。と。陪。話。れ。小。文。吾。現。八。大。角。も。共。侶。の。

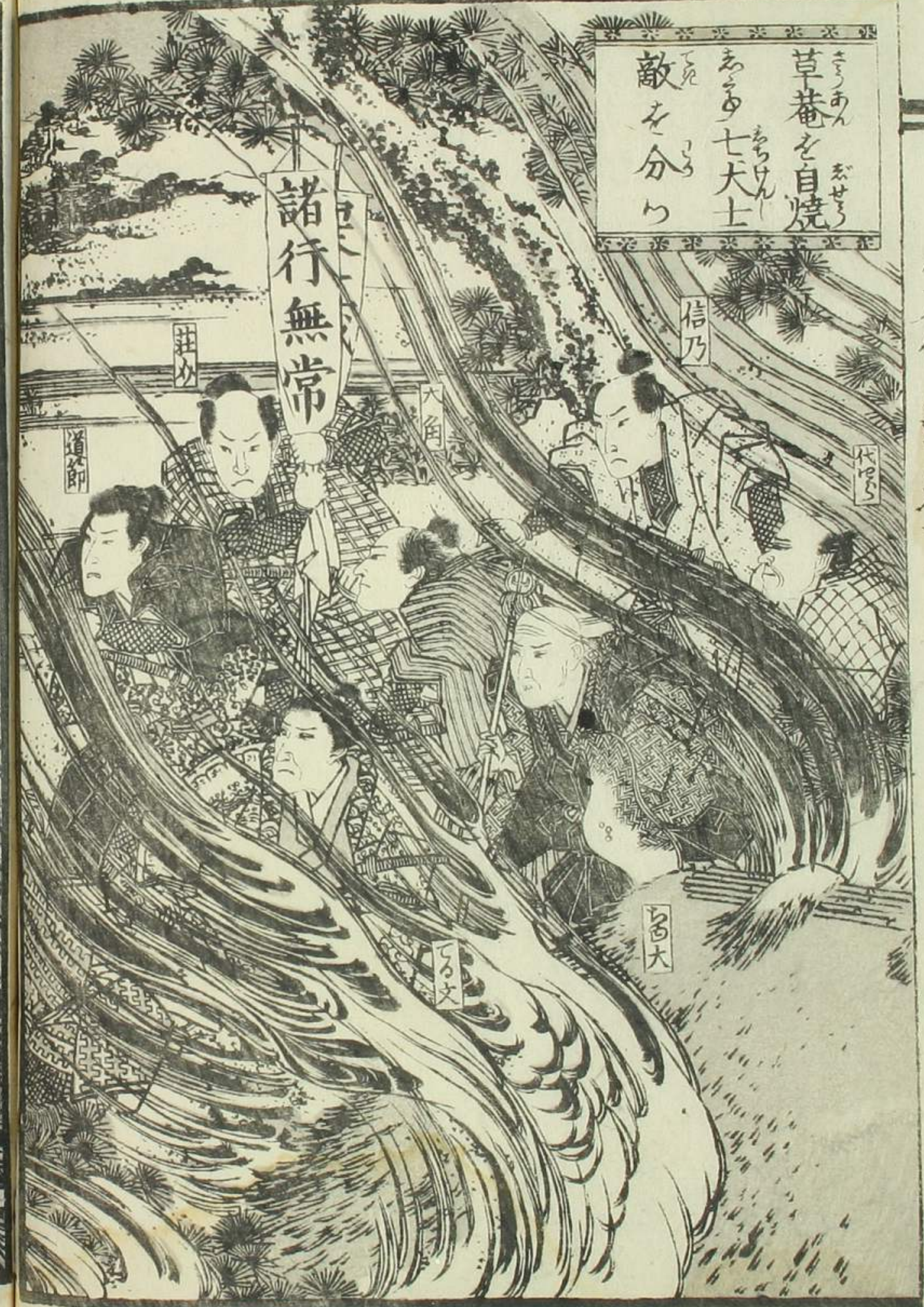
笑局入りて。宜し。是。い。れ。る。出家の出家の作。武士の武士の進退あり。閑
戦の方。只。我。們。の。任。て。と。退。り。ぬ。か。と。合。同。照。文。代。四。郎。及。大。士
們。の。不。服。と。も。脱。て。袂。見。ぬ。裏。て。脱。て。照。文。の。伴。當。渡。與。つ。身。を。固。め。ぬ。脱
纏。瞞。看。現。戰。世。の。沿。習。と。修。折。の。武。を。磨。く。准。備。脱。落。る。の。浩。然。不。兩
個。の。躬。兵。と。城。下。の。方。より。か。つ。て。七。大。士。の。報。る。小。可。們。の。以。指。揮。を。從。ひ。て。那。邊。と
徘徊。る。敵。の。虚。実。を。張。い。ひ。ぬ。勢。カ。二。三。百。の。い。ぬ。大。將。と。か。か。り。を。狩。場。將。衣。束
や。騎。馬。を。が。綾。井。浦。立。と。載。て。前。を。馳。い。り。を。推。方。甲。乙。二。騎。の。い。ぬ。開。が。伴。當
か。の。二。三。十。名。の。過。ぬ。ひ。ぬ。他。們。の。半。纏。脚。絆。を。列。卒。繩。桿。棒。を。引。提。へ。り。の
餘。の。猛。可。の。驅。催。する。土。兵。の。あ。え。ん。敗。る。武。具。を。着。る。の。介。も。あ。ら。ち。交
て。竹。槍。或。の。連。切。を。と。推。方。の。い。ぬ。既。ぬ。と。ち。立。た。れ。推。寄。ん。工。程。あ。る。べ。う。に
御。小。心。い。へ。と。言。語。急。迫。に。注。進。を。大。法。師。も。ち。听。て。あ。ら。ち。拙。僧。の。衆。議。の。い。ぬ



八代大車卷十一

十七

文政堂正英



草菴を自焼
あま七犬士
敵を分り

八代大車卷十一

文政堂正英

まふ退るべし。犬士達武勇を負きて、愆をなすまのひを敵退か赶捨て、引返すと勝とまふ。
 よくあゆむと期と示し、星額師弟別を告て、後と揺揚け錫杖と衝立をり出て、
 左右に従ふ照文代四郎次、蛭崎の伴當八名、信乃の迺殿して、徐の後を續けける。
 尔程、壯介現八小文吉、夥兵四名と相俱して、石塔波の邊を四流の紙幡を合ひ
 かる。夥兵の邊與して、東の方へ赴けり。登時、星額長老師弟俱お茶弁と立出、寄
 隊の近づくも程、毛野道節大角の俱お茶の隊の夥兵、下知して、幕の白張とて、
 安房より遣い、ひを敵お乱暴せられ、後々も瑕瑾るん。その餘の佛器も漏ら
 ざり、皆庵中へ合入れて、焼草おせ下といそめて、馳て煙と賜けり。嗚呼、歎矣、濁世の境
 界不善、小人をうれば、沙門の忠信、大功徳多、八十許、易念佛場の脩羅戰諍の巷と
 変れ、流轉する生死の海、迫る結城の郊外、嘉吉のひり、今あ照を樹間の岩石、滴
 流く、あゝ、大才、畧勢、ひ既、決然、武勇と感、夥兵、比、皆、慚、く、を、思、ひ、け、る。

第百二十五

逸正寺不徳用二三士と謀る
 退職院未得名詮諫て不得

單表這結城の城下る。通光奇山逸正寺の住持徳用、その朝憶り、大か
 念佛供類の美と、他、皆、枯醋、得勝、猛可、子院、屬院、多、任、僧、們、を、召、聚
 合、支、條、々、と、言、示、し、て、敦、圍、悍、く、論、ま、さ、す、柳、本、山、の、昔、より、結、城、氏、の、香、華、院
 中、彼、家、累、世、の、廟、墓、這、里、お、存、在、ふ、似、而、非、頭、陀、大、と、お、り、迦、曾、這、地、を、庵、と
 締、め、嘉、吉、の、役、の、戰、死、ま、る、列、將、士、卒、の、菩、提、と、信、て、一、座、の、石、塔、婆、を、建、立、出、処
 不、定、の、禿、驢、を、取、り、て、念、佛、供、養、ま、さ、す、の、を、施、行、の、報、條、を、徇、衢、に、貼、り、因、に、
 貧、民、を、見、們、お、施、さ、ん、と、欲、ま、る、只、是、鳥、爵、の、所、行、ま、る、畢、音、我、寺、に、ゆ、え、領、主
 結、城、殿、も、茂、如、お、ま、る、結、構、を、壯、裏、料、り、か、さ、る、寔、件、の、似、而、非、頭、陀、安、房、の
 里、見、の、舊、臣、也、故、主、お、代、り、て、追、薦、の、法、延、え、れ、他、人、を、雜、毛、安、房、より、代、香、使、を

達れ。里見の士卒二十名來會。風聲あり。巷談る。施の報條の證。括
 れ紛れる。早く領主訴。理非と糾明。せざる。何ぞ。その後。懲。武門の
 恥辱。佛家の瓊。忽諸。各這。を思。と。席。と。拍。言。本。山。侍
 者。の。け。祿。釋。坊。堅。削。と。喚。做。惡。僧。衆。議。の。名。を。突。然。と。杖。を。出。て。答。る。現
 御。鬱。憤。の。支。の。趣。道。理。至。極。お。ま。え。い。然。る。兵。書。中。兵。を。杜。速。責。ぶ。る。受
 あり。その。計。巧。人。と。も。久。く。を。佳。と。せ。介。介。今。ゆ。長。詮。議。の。議。を。領。主。訴。五
 の。憶。む。も。時。日。移。り。他。們。他。御。走。る。ま。う。ん。常。言。の。聞。諍。果。て。の。棒。之。味
 世。の。胡。慮。ま。ら。ん。の。因。て。悄。地。小。思。量。る。幸。い。る。本。山。の。檀。越。る。堅。名。根。生。野。兩
 兵。頭。の。追。鳥。獵。の。與。ふ。今。朝。未。明。より。城。へ。出。て。程。遠。く。野。邊。に。在。り。と。告。た。家
 者。の。ひ。へ。弟。子。隨。便。入。り。て。那。毎。お。と。告。ぐ。快。來。會。と。請。ふ。時。を。得。ま。る。あ。り。あ
 べ。御。商。量。の。か。の。詞。も。訖。り。結。城。の。家。臣。と。せ。る。堅。名。衆。司。經。稜。根。生

の。ひ。かん。と。せ。り。野。邊。に。招。か。る。伴。當。列。卒。と。相。俱。と。鶴。と。駕。狗。を。牽。一。獸。獵
 野。飛。雁。太。素。頼。堅。削。が。招。か。る。伴。當。列。卒。と。相。俱。と。鶴。と。駕。狗。を。牽。一。獸。獵
 獲。束。の。儘。く。野。邊。に。這。果。來。り。德。用。被。斜。を。躬。て。堅。削。の。迎。へ
 卑。議。の。席。に。招。り。經。稜。と。素。頼。の。伴。當。列。卒。們。の。内。に。住。め。る。儘。堅。削。の
 引。む。德。用。の。對。面。に。子。院。屬。院。の。法。師。們。の。席。に。讓。り。上。坐。請。薦。め。寒。暖。と。舒。て
 恙。を。祝。け。登。時。住。持。德。用。の。送。の。口。誼。の。果。る。と。も。經。稜。素。頼。ふ。ら。向
 い。件。の。支。の。趣。と。辯。舌。尖。銳。く。廣。知。ま。る。兩。士。の。所。々。推。禁。め。て。その。美。の。衛。の。祿
 釋。坊。も。告。り。れ。か。ら。る。因。て。伴。當。吩咐。て。巷。頭。の。風。雨。掃。身。安。房。の
 里。見。の。兵。每。が。那。頭。陀。大。の。哄。誘。ま。り。今。番。の。法。事。と。執。り。小。の。口。誼。に。給。見。事。
 繼。その。支。実。へ。も。嘉。吉。の。戰。死。の。列。將。士。卒。の。菩。提。の。與。る。法。會。も。と。我。君
 候。お。告。票。し。て。己。前。小。免。許。を。請。奉。る。當。寺。へ。も。慈。々。と。示。し。七。帮。助。と。請。ふ。免
 許。之。介。る。受。不。及。り。け。他。們。の。鳥。許。の。舉。動。の。饒。走。系。中。終。も。今。ゆ。告

許の時を殺さ。敵の遠く逃して。然る時六日の昔蒲十日の菊を悔む。非
 如許京を奪へ。今忽地小柄捕らる。他們的非法の懸危見之疎忽の咎あるべし。
 我們兩個長城と俱に一家の結城譜第の重臣先代忠死の兒孫を各夥兵二百
 名と與けられて俱に是兵頭の上席より傳れ兵權を中へ置られも其の事と知らざり
 ければ伴當列卒のまゝと。夥兵一個。俱して奉命され。城内へ還り。夥
 兵と召聚する。人為の許されて且時移る。故に我們商議して。情地の一個の伴
 當に城内へ走らせ。則長城枕之入。夏の趣を告知し。箇様々々ふいへせ
 る。枕之入とせ。その那身の夥兵百名と俱に。力と勤せんと。信じて。程
 々來會せ。又近郊の莊客の緝捕せ。徇示して。猛可土兵を駈催し
 たり。ければ他們も幾隊散出。來入。是は加る小本山の子院屬院の勇僧と道
 人們を用せ。れ。夥兵も。二百名の躬方の兵越。安内知。は。事。

情地の那首推寄て短兵急來。拉が囊裡の東西と探る。像く一個の
 漏さ。柄捕りて。惴利並に近郊の莊客の來身と。謀。合。て。部。と
 定め。日屬の武談。虚。く。器。械。會。て。覚。め。法。師。武。者。を。遣。り。し。め。
 準備せ。も。た。あ。か。し。答。を。俱。に。説。誘。は。德。用。堅。削。い。は。ら。し。這。席。上。在。り
 と有る。破戒を斬る。衆徒。兇僧。は。勇。さ。る。且。素。頼。經。徒。の。酒。杯。と。薦
 め。る。月。云。と。相。譚。ふ。程。長。城。枕。之。入。惴。利。の。利。は。作。る。素。頼。經。徒。は。告。げ。ら。れ。く。
 と。是。く。這。義。と。夢。知。る。より。二。百。許。の。夥。兵。と。俱。に。城。内。より。出。る。來。り。け。れ。素。頼
 と。經。徒。の。圍。坐。の。席。に。招。容。れ。住。持。德。用。共。侶。の。大。家。い。と。く。面。談。を。惴。利。と。し。て
 听。せ。現。那。賣。僧。大。事。の。同。僚。達。を。告。げ。て。その。山。屋。略。と。知。れ。又。は。中。の。も
 及。ぶ。い。は。ゆ。ぐ。と。は。這。奴。們。が。鳥。僻。所。の。倘。是。も。忍。ぶ。べ。く。孰。を。忍。ぶ。べ。く。は。唯
 們的。緝。捕。の。准。備。を。夥。兵。を。送。り。領。て。來。れ。各。隊。配。甚。麼。を。と。回。へ。ど

経稜素頼の俱不答々然いよよの美咱們の不用意ゆく従ふ暇兵あつたれこの
 より程遠く取社客們的拘示して猛可の土兵を駈催しつければ時を殺
 さる咸来るべし是の本山内外の法師武者を加へ既四隊の雄兵あり却又
 那里の法會を連る里見の士卒の千餘名を餘の庵主と次負は居居出処不
 定の秀驢のそ其も十人不過むと居居る躬方の多勢より八方より捕
 稠々那奴們萬夫の勇あつても捕漏さるるをと憚り徳用推禁めて開
 勿論の事から事成かたも洩易く非除里見の士卒們を送る捕捕
 るとも似而非頭陀、大と走り一息後々までの送恨るるや今愚意より
 せん堅名主根生野主の土兵と相率く本樹頭より推寄り堅削是
 副とありて子院屬寺の衆徒道人と半分のその隊の相俱し宜く先鋒の
 找むべし又長城主の隊兵を領て間道より先找むる他們が敗れて走ん折開が

去向を捕細く刺殺して敷の漏れざるも武井の這方小岐路あり正
 路の関宿より木下風行徳に到る開岐路の江戸へ下信れ又拙僧の當寺の
 所化と道人們を従へ長城主と共侶の情地を先へち出で那岐路の敵をせん
 武井諸川の這方知るる細流より下流の利根河の相通の関宿よりを
 西流の一箇の松戸新宿より別れて戸田河と做る有悠が去向と津も知らず不知
 案内の敵るれ進退不便推て知るべしあのみ誰何とるは合る像く鼻鼻鼻鼻
 あり鮮示せば大家理ありと稱えたるその中長崎惴利の件の一説をうち聴て適登
 たる長老の説法死る躬方引導のその圖不當と精妙の咱們の初度の隊の
 會つて伏兵あるん勇士の本意あるも現の隊を大事るれ咱身を既
 準備して暇兵を送るるおと來おければ持せ火銃よりあり敵の援の兵を來る
 備ふ餘ふ暇も作さん其の長もあつた安んべしと噪るる蒼髯搔拍る皆憑く

思ひ却酒不盡と行替し。云云と相譚ふ折ら。這近郊る莊客們的堅名
 經稜根生野素頼が催促に従ふ。走聚る者二百餘名。少く連枷捍棒
 長柄の鎌と携り。既小當寺を來りけり。そのゆえのゆけ。大家の勢ひ腐て
 卒然と快打立と。徳用堅削衆徒道人准備あり身甲餘杉介る各
 臂縛脛衣小身掬ら器械と皆傷引着て俱小部と听く程小本山の先住を
 け。未得と喚做せ老僧あり。齡の既八十有餘年來隱居と山内の別院に在り
 今の一談と人傳ふ少知り。よりち敬馬にて一霎時の堪む兩個の行童。技被
 出でて多の住持徳用ふらち向て涙と共諫るや。少く他御の行脚の法師が當
 城外の古戰場也。嘉吉の陣殺の列將士卒の菩提の與ふまると念佛供養
 施の義を先我寺へ告示せ。非除帮助と請れども。開け給ふ。人の好事
 醋と。屬院の衆徒さ。召聚會。武家の檀那。告譚。出家人。相心。る。後

伐の議及。及。於。天。魔。鬼。の。障。身。と。謂。べ。且。法。會。の。願。主。大。と。や。ら。ん。安。房。の。里。見。は。舊
 臣。也。故。主。代。は。る。供。類。は。信。見。の。家。臣。也。名。秋。果。會。也。と。云。え。り。嘉。吉。の。む
 か。龜。城。せ。れ。御。方。の。列。將。三。人。中。の。那。里。見。本。基。主。の。我。先。館。氏。朝。朝。臣。と。莫。逆。の
 信。友。也。その。忠。之。を。表。し。甲。し。る。け。れ。當。館。成。朝。朝。臣。城。邑。再。興。の。初。より。嘉。吉。の。戰。死。の
 列。將。義。士。の。菩。提。の。與。ふ。石。造。の。地。藏。菩。提。と。建。立。あり。多。かる。中。の。殊。又。多。大。佛。一。體。を
 本。基。主。の。墓。表。と。定。ま。る。ゆ。え。と。世。に。知。る。人。稀。也。我。任。職。の。折。り。當。寺。の。舊。記。に
 紛。れ。る。有。徳。の。件。の。法。慈。の。獨。里。見。殿。の。與。ふ。先。館。氏。朝。朝。臣。並。御。方。の。列
 將。士。卒。の。菩。提。と。自。他。平。等。と。云。ふ。法。會。の。後。那。里。義。を。當。館。外。より。許
 する。も。愛。懽。せ。る。ん。何。で。追。捕。の。沙。汰。あり。と。り。又。根。生。野。們。三。個。の。武。士。ふ。ら。ち
 向。て。各。位。格。別。方。々。素。も。道。理。の。面。面。に。那。里。義。と。思。ひ。あ。る。館。許。重。し。て
 之。下。知。依。り。の。私。の。議。と。言。て。或。は。土。兵。を。駈。催。或。は。僧。侶。の。幫。助。借



八天傳九郎卷十一

廿三

八天傳九郎



八天傳九郎卷十一

緇素を
聚會て
徳用を
魔談を
疑らむ

八天傳九郎

して緝捕の準備何事ぞや忠もあらず義も違ふ傲慢の事免れず。此の思ふ
 ねども。這方と禁め那方と審の理の切なる老僧の茶言口小苦け。狂馬小鞭うる像のよ
 り怒る経稜素頼惴利も亦共侶の權威も兼て聲もひく。余の言和僧の听ん
 慈悲忍辱の佛意でも邦火邦の法度の武士の務めの壁言那奴們言を設て
 我先君の菩提卒も吊奉るといふ。人の湧まぬ法會三味酒是我君と蔑如かある
 非礼の杖槍許さず。鳥の許さずと罵れ。然と點頭く徳用堅削俱腕と拒り
 三檀越の言道理の稱。當君曩の李基門の義烈の戦殘と憐れ。以て草標と建立
 あり。折其義と安房へ告れ。他が領地小建。今番他們が這地子て館不
 免許を稟請。法廷施のと同か。乱れる世。出家でも弥陀の利劍と頭小駁して天
 子將軍圍守領。手與小兇徒を艾拂ひ。山門の大衆南京法師先例。引く。迂遠
 多る似而非談。義の時後。後悔あり。敵も小く。立の。と打斬鎖の。あり。拂ふ

三士の勢の執鳥鳥の像。大家立の身と起。猶禁入と推れ。堰留難。水や座平劍
 降ふ。僧羅維隆の。得。惡僧俗。未得を推遣。推隔て皆散動。外更也。遲
 去と。長城が。殿兵。莊客們及堅名と根生野。伴當列卒們送。去。関近。側
 存整と。星列れ。王の信と相巨と事件。言示。大家都て。中。小。近
 郊。莊客。每。欵。料。緝捕。古戰場。庵。念佛。供。類。施。行。大願主
 大坊及來會の士卒も漏れ。捕。欲。且。教。具。目
 注。言。出。然。思。催。使。儘。俱。悔。も。小。勢。既
 あり。至。脱。も。あ。れ。己。從。あ。躬。方。の。心。致。と。知。原。僧。の。意。致。法。師
 武者。道。人。之。部。不。勇。心。去。向。進。退。比。三。を。如。と。經。稜。素。頼。惴。利。各。馬。う。ち。踏。
 二隊。小。路。暗。跡。と。定。期。と。約。小。敵。と。見。侮。思。那。僧。俗。と。送。多。捕。漏
 さ。と。い。は。れ。這。段。の。長。を。も。楮。數。言。定。限。あ。れ。作。者。の。自。由。成。か。姑。且

筆を執るの事見結城の三士們が悪僧徳用堅削と共侶の犬並七犬士と擯捕す欲
 あり。この日勝負甚摩を再び又巻を改めて本輯下帙の中は首の解分と聴ねが。
 作者云々の第九輯の始の腹稿より巻の數を言及するを以て上中下三帙相分ち
 又帙毎に上下のうらちで九六七八九の十の附言の既記の如く
 就中這第百二十五回の説く処七犬士們が憶りる。又厄におお殖添るを
 后までいふ。解分さむの看官思ひ感ふ言うてん然りと今整ふ茲中筆を執
 めぬ。唯看官の送城の事をも作者の本意おわねる。本帙の限るおあ
 後看送るもさうく。後の樂多かる。綴り送るも長々たる筆の勞を省ふより
 中然ハ口の五巻と看る。第百十五回より上り劣りけり。この君子の糠を舂
 まで糟あると知らぬ。龍を臨む蜀の富ると思さるける儔るべし。
 南總里見八犬傳第九輯卷之十八終

○曲亭翁編演里見八犬傳第九輯下帙上画工筆工刷人目次

出像畫工

柳川重信

淨書筆工

谷金川

刷

十三之卷 十七之卷
 十五之卷 十八之卷
 十六之卷 並補遺

横田 吉川
 櫻木 藤吉
 鳥山 某

南總里見八犬傳全輯

九九輯一百四十餘回全部七十有餘卷
 右來丁酉年刊列全備仕候每輯在の如し

- 第一輯 五卷 第一回より 發端結城落城義実安房の流寓神餘並金磁考事の本輯あり
- 第二輯 五卷 第二回より 山下定包伏誅満呂安西等のの倉房の大並伏姫富山等の本輯あり
- 第三輯 五卷 第三回より 信乃額藏道節現公の世渡りの大塚口塚芳流園の段を本輯あり
- 第四輯 四卷 第四回より 芳流園の後段行徳の段の文吾親兵衛出世大塚の後段庚申塚の段を本輯あり
- 第五輯 六卷 第五回より 市河の段雷電山明魏山荒芽出大段五主小集音音夫婦親手姉妹の本輯あり
- 第六輯 六卷 第六回より 荒芽出後段朝倉村並岩邊の段を野角世對世樓康申山壁返の段を本輯あり
- 第七輯 六卷 第七回より 庚申山赤岩壁返の後の段申斐の穴山様石の段指月院の段を本輯あり
- 第八輯 六卷 第八回より 二村の闘牛小千倉の宿片見の館誡訪湖並青柳客店の段を本輯あり
- 第九輯 六卷 第九回より 大田大川が再尼の段穗北の段湯嶋の社頭の段司馬濱の段を本輯あり
- 第十輯 六卷 第十回より 鈴の木林大坂大山復雙の段安房の稻村の城段素藤の段を再世本輯あり

第九輯中帙上七卷 第九輯下帙上五卷 第九輯下帙中五卷 第九輯下帙下五卷
富山の後の段館山の城の段入不山の段濱路姫の親兵衛遠くも段本輯あり
不忍池の段西国河原の段素藤も伏誅結城古戦場の段も本輯に在り
是より下の作者の稿本も成りざる故にその趣を注し置かれこの中下二帙の
過不及あるも明年改定を録す

右八大巻全部七十餘巻一百四十餘回明年刊列満尾仕ひり並製本半紙摺りの外に賜願の君
子の御詔に儘しなりの雁皮紙摺りより大抵一輯一帙分を合巻二冊に製本仕ひり九輯全部
十三二冊に可成り尤ひり遠国御進物或は御旅の折或は湯治場など御携と成り道中皮張りして
至極の御便利なりといふ並製本も第一輯より六七輯まで刺画の湯墨板紛失致し標帛並に
帙袋の模様板の磨滅及びひり先般悉彫り改め製本執事も新板を買出し一冊の如く高きも疎
累多し折々掛廻し毎輯品はれ多し故に仕入置向本房並に向寄の書肆あり少くも依りて求め
て改りし世に物の本まともな以来から大部類あり春日秋夜の御慰もそのまゝ板を書林文溪堂蔵す

近世説美少年録第四集 第一集より第三輯三十回までの既刊刊列あり
第四集三十回より四十回まで五巻續出遠くはへりぞ

開卷驚奇俠客傳第五集 第四十二回より五十四回まで
四集の既刊刊列あり 本集五巻 近刻

莊蝶翁再遊外紀第一集 胡蝶物語前後二編今も世に存
因て曲亭翁の書と刊列せしむ 五巻 近刻

著作堂一夕話 大本五巻 本亭吾も山中一夕話の書ありといふもあやうく戲墨の
ゆゑ翁の隨筆も初学の心と評するべし 近刻

曲亭翁精著八大巻の二書第八輯より九輯の下帙
是本房刊布の蔵板を之餘の浪花多し書肆の所蔵を
けりて客蔵したる冬十二月第一輯より第七輯までの蔵板を
彼外も購ひての全部不殘本房の蔵板を成りて依りて
その多し板のありしを補刻し製本して初めに
美本仕ひりて未刊の新書目録の左の演る如く
本房必明年の結局大團山に至りての年より彫鐫の工功
果しひりて又美少年録第四集の餘も右目録
わすれし翁の新編間も毎年刊列仕ひりて四方遠
近億兆のみを君子をみまきりて求めざることを
かゝるもねだりあり 大江戸刊布の書林文溪堂再白
○内裏あり仙女香 四十八文 黒わが美金香 四十八文 江戸京橋南橋の町三丁目坂本氏

天保八年丁酉年春正月吉日令辰發行

大阪 同 河内屋長兵衛

書行 江戸 大傳馬町二丁目 河内屋茂兵衛

丁子屋平兵衛板

大傳馬町二丁目

共六

